
とある科学の生体電極（パルスポール）

ルス・ソラール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学の生体電極^{パルスボール}

【Nコード】

N5181P

【作者名】

ルス・ソラール

【あらすじ】

学園都市。東京西部に位置する、人口230万人を誇るそこでは、その人口の8割を占める学生達が、『超能力』の開発に^{ジャッジメント}取り組んでいる——そんな街ではありふれた異能の力を持つ^{たかつき}風紀委員、鷹月^{あきら}暁。そんな街の中で、落ちこぼれの烙印を押された無能力者《レベル0》、鷺谷^{わしや}洸^{こう}。過去に拘り、故に強くあろうとする二人は、その先を見る事ができるのか。とある科学と学生の街で、物語は始まる。

プロローグ（前書き）

これはあくまで一素人の駄文です。少々無茶したりかなり無茶したり結構無茶したりするかもしれませんがそれでもよろしければどうぞ。

プロローグ

白い廊下をひたすらに駆ける。途中看護婦にぶつかりそうになったが、少年は気にすることなく走り続ける。目的の部屋の戸が見えるとそこに跳びつき、思いっきり引張って開け、その先の大きな窓ガラスにへばりつく。そのガラスの向こうには何個も白いカプセルがあり、その中には子供が、少年と同じぐらいの子供たちが入っていた。少年は、見るなという自分の頭の警告を無視して一個ずつ目で追っていく。そして、見つけてしまった。

自分の妹が、そのカプセルの中で死んだように眠っているのを。

どうして、少年は知らず知らずのうちに呟いた。その時。

「……君は」

耳に届いた声に少年は振り返る。そこには見知った白衣の女性が立っていた。

「そうか、君はあの時、体調を崩して――」
「どうということ？」

少年は女性の声を遮って尋ねた。

「なんで、みんな……」
「……すまない」

次の瞬間、少年は女性の服を引っ掴んだ。

「なんでっ、なんでだよ!どうして……ぼくらがなにかわるいことしたのかよっ!」

「っ……」

「かえしてよっ!あかりをっ……いもうとをかえせよおっ!」

(あれから、もう……)

少年は窓の外を見る。相変わらず、予報通りの空が広がっていた。

少年の日常（前書き）

ブログ投稿からずいぶんと間をおいてしまった第1話……

少年の日常

「うあゝ、終わったゝ」

たかつきあきら

鷹月暁は、眩きながら背を伸ばす。別に学校があるのはいつものことだが、その中でも今日は特に疲れる日だ。

システムスキャン
身体検査。

これは超能力を開発している学園都市ならではのイベントで、要は今の自分はどれくらい^{レベル}の能力が使えるかをテストする日だ。ここでは能力者は六つの段階に区分される。

強い方から、超能力者^{レベル5}、大能力者^{レベル4}、強能力者^{レベル3}、異能力者^{レベル2}、弱能力者^{レベル1}、そして、能力を持たない無能力者^{レベル0}。そのレベルに応じて、学園都市からでる補助金などが大きく違ってくる……要は、レベルが高い方が単純にお金がもらえるということで、レベルの差はかなり生活の質に違いが出てきてしまうのだ。

まあ、無能力者でも生活に支障が出ない程度にはちゃんと払われているので、生活がままならないとしたらそれはその人のせいだと思ふが。

ともあれ、あまりお金を使わない鷹月に見れば、レベルが一つ下がろうが上がるうが大したことはないのだ。成績に関係するの^で本気を出さない、というわけにはいかないが。

「さて、どうしよう……って決まってるか」

鷹月は制服のポケットから腕章を取り出す。

盾をモチーフにした紋章が描かれている緑色のそれは、学園都市の治安維持機関、『風紀委員^{ジャッジメント}』に所属することを表す。とはいって

も、学生を中心にした機関なのであまり派手に動き回ることは許されないし、実際、学生達自身も校外の活動には積極的ではないというのが現状なのだが。

その風紀委員の腕章を腕につけ、校門から出ようとした時。

「鷹月くん、待って下さいーい！」

もう聞き慣れた飴玉を転がすような甘ったるい声に鷹月は振り返る。

「どうしたの初春さん。今日は佐天さんと一緒じゃないの？」

ういはるかざり
初春飾利。鷹月の同級生にして、同じ風紀委員第一七七支部の同僚。

数少ない鷹月の友人でもある彼女の特徴を挙げるなら、その頭にこれでもかというぐらいに飾られた花飾りだろう。おかげで、彼女のことは絶対に間違えることはない。あとは、顔立ちが幼いことぐらいか。その彼女は、鷹月の前で息を整えている。校舎からそんなに離れた記憶はないのだが、心なしか頭の上の花もしなれてるようには見えなくてもない気もする。

「い、いえ、一緒、なんです、けど、少し、用があって、よければ一緒に、どうですか？」

「初春さん、ちょっと休んだ方がいいんじゃない？」

教室から走ってきただけなのにまるで持久走をやったかのようにぜえぜえと息をつく初春の背中をさすっていた鷹月だったが。

「うーいーは——」

「させるかっ！」

「ひゃあっ!？」

不穏な気配を察知した鷹月はとっさに初春のスカートを掴む。突然の鷹月の行動に変な声を上げる初春だったが、後ろからチツ、と舌打ちの音がすると事情を把握したように涙目で振り向いた。

「さ、佐天さん!？」

「もー、なんで邪魔するのよー」

長い黒髪の少女が口をとがらす。

佐天涙子。初春と同じく鷹月の同級生だが、風紀委員ではない。もつとも、さっきのように日々友人のスカートをめくる人が風紀委員であつては鷹月としてはたまつたものではないのだが。まあ、それさえ除けば……。

「まったく、もういい加減やめてあげなよ」

「そんなこと言っちゃってーホントは鷹月だって見たいくせにー」

「んなつ!？ そんなことあるわけないだろっ!」

訂正。どう考えても彼女とは馬が合う気がしない。

「はぁ、もう……で、何？」

「えっ? あつ、あのつ、少しつ、用が、あつて……」

「初春さん……やっぱもう少し休んだら？」

「いっ、いえっ、大丈夫ですっ!」

いくら注意しても変わらない佐天にため息を呆れてから、初春に話を振るとまだ息を整えているのか、途切れ途切れに話す初春。それを氣遣う鷹月だったがどうやら息切れではないらしい。じゃあなんだろう、と考えてみたが、読心能力者ではない鷹月に分かるはずもなかった。

「うーん、ならいいけど……あ」

ふと鷹月は声を上げる。よくよく考えてみれば。

「僕、これから風紀委員の仕事があった……」

「そう、ですか……」

落ち込む初春を見て申し訳なくなるが、こればかりは仕方ない。ごめんねと言ってそこから立ち去ろうとすると。

「あーっ！」

「今度は何！？」

突然響いた佐天の声に、つい声を荒げる鷹月。

「ひどーい！なんてことしてんのよ！せっかくの初春の申し出を！」

「だからごめんって言うてるだろ！」

思わず怒鳴ってしまう鷹月だったが、次の一言はさすがにきつかった。

「初春、泣いちゃったじゃない！」

「ええっ！？」

慌てて振り返るが、初春は先ほど俯いたまま動いていない。これでは泣いているのかいないのかまったく判別がつかない。しかし、時と場所が悪かった。さきほど佐天が叫んでから、周りを過ぎて行く学生達はヒソヒソと自分を見て話しているのを鷹月は知った。そ

の上、この状況。

「わかった！わかりました！行きます行かせていただきます！」

仕方なく鷹月は諦めたように叫んだ。次の瞬間。

「本当ですか！？」

「はい……って、初春さん？」

「やりましたよ佐天さん！すごいです！」

「ふふーん。ま、あたしにかかりや鷹月なんてこんなモンよ」

がらりと変わった初春の態度に気付く鷹月だったが、そんな彼をものともせず、初春ははしゃぎ、佐天は調子に乗っていた。どう考えても、騙されたのは明白だ。

鷹月は佐天と初春に引きずられながら、眼鏡の先輩のお説教を想像してがっくりと肩を落とした。

少年の日常（後書き）

書いてみて気付く。あれ？こんなに佐天さん頭良かったっけ・・・？
主人公についてはおいおい説明していく羽目になると思います。

御坂美琴

意外だった、と言っているのか分からない。彼女のことはあまり知らなかったし、付き合いはあってもそれは風紀委員ジャッジメントの同僚としてのものでそれ以上の関わりはなかったから。しかし、驚いてもいいことだと鷹月は思う。

自分と同じ風紀委員であるはずの白井黒子どろりこがレストランの中で場もわきまえずに見知らぬ女子に飛びついていたのでから。

「というわけでとりあえずご紹介しますわ」

少女に殴られた頭をさすりながら、白井黒子しらいくろこが話を進める。

「こちらが柵川中学一年、初春飾利さんですの」

「は、はじめまして、初春飾利、です……」

白井に紹介されて、頬を染めながら緊張気味の初春。レストラン前まで話を聞いてきたが、初春は御坂に憧れているようだった。というか、常盤台のお嬢様というフリーズに憧れているようだった。なので、緊張するのは当たり前かもしれない。

「それから……」

「どーもー。初春のクラスメイトの佐天涙子です。なんだか知らないけど付いてきちゃいましたー。ちなみに能力値は無能力レベル0です」
「さ、佐天さんなにを……」

そして、初春とは対照的にいささか高位能力者、お嬢様に良い印象を抱いていない佐天が続き、その態度に初春が慌てる。

「ふーん。初春さんに佐天さんね。で、君は？」

「そういえば、どうして鷹月がここにいますの？ 貴方を呼んだ覚えは——」

少女が鷹月に気付き、白井がそれについて尋ねようとした瞬間、鷹月はですよねーと叫ぶ。これが最後のチャンスと思い、ここぞとばかりに。

「そうですね！ いくらなんでも男はお呼びじゃないですよね！ それに本当は今日の警邏は僕の担当だったんですから！」

「そうですね。まったく、いくらなんでも警邏をさぼるなどは……」

「だよね！ それじゃ僕はここで……」

さっさと初春や佐天が割り込む前に話をつけてその場を立ち去ろうとする鷹月だったが、そこに思わぬ助けしょうがいが入った。

「ちょっと黒子！ そんな言い方ないでしょ！」

響いた声に白井が少女の方を向く。

「お姉様、これは——」

「アンタだって警邏の一つや二つさぼったことぐらいあんでしょうが！ 自分のこと棚に上げないの！」

そう言って白井を黙らせると、少女は笑顔で鷹月に謝った。

「ごめんね。黒子の言うことなんて気にしないでいいから、君も来ていいわよ。えっと……鷹月くん、だっけ？」

「……はい、鷹月暁っていいいます」

まさかそんな優しさを受けて、帰らせて下さいとも言えず、結局鷹月も一緒に同行することになってしまったのだった。

「そ、あたしは御坂美琴。みさかみこと初春さんと佐天さんも、よろしくね」

「ふうん。鷹月くんもエレクトロマスター発電能力者なんだ？」

「まあ……レベル2異能力者ですけど」

御坂の問いかけに煮え切らない返事を返す。意外にも、御坂は面倒見が良いようで鷹月は道中さまざまなアドバイスをもらっていた。

（ふうん、お嬢様っていうより面倒見のいいお姉さんって感じかな）
「あ、いいです」

御坂の隣で彼女にかまってももらえない白井の負のオーラに冷や汗をかきつつも、鷹月は冷静に御坂と言う人間を判断する。と、その時ふと隣を歩いていたはずの御坂の姿が消えていた。不思議に思っ
て後ろを向いてみるとさきほど鷹月が断ったビラ片手に立ち止まっていた。

「どうしたんですか？……ああ、クレール屋さんか。やっぱり女の

子ってみんな甘いものが好きなんですか？」

「えっ、あ、そ、そうね！」

御坂の付け加えたような反応に疑問を持つが、どうして慌てているのかなど鷹月が知るはずもない。まあ、いいかとそのビラから視線を外した鷹月。ところが、その視界に思わぬものが入った。

（カエル……？）

カエルだ。緑色の身体に不自然に頭から飛び出た目。明らかなカエルのデフォルメだ。どこかで見たような気もするが、どこで見たか……。

「何このやつすいキャラ、今時こんなのに食いつく人なんて——」

そういえば、さっきのビラに書いてあったような気もする、が——。

「このゲコ太が^{ストラップ}目当てとか……」

ボソツと呟いてから、ないないと笑おうとした。しかし、その前に御坂が鷹月からズザザッと離れた。

「な、何言ってるのよ！こんなモノ……」

わかりやすいな！と驚愕する鷹月をよそに、御坂は顔を真っ赤にして言い訳を続ける。そのおかげで。

「あれ？御坂さん、そのキーホルダー……」

初春の言葉に、あたりがシン、と静まったような気がした。

「……行こうか、クレープ食べに」

「そうですね。クレープ食べに」

「そうだね。ちようどお腹すいてたし、クレープ食べに」

「そうですわね。ちようどお時間もいいことですし、クレープを食べに」

「違うッつってんでしょー!!」

御坂の悲鳴を背にくすくす笑いながら、五人はゲコ太を配っているクレープ屋を目指すことにした。

御坂美琴（後書き）

まあ、まだプロログ入れて三話しか書いてないから仕方ないけど、やっぱり感想くらいはほしいかなーなんて思ったりします。今更だけれどアニメ版準拠です。

クレープ屋のカエル

「うわあ、すごい人だね」

クレープ屋がある広場を見た瞬間、鷹月は茫然と呟いた。よほど前から宣伝されていたのか、それとも偶然か、目的のクレープ屋の前にはすごい人だかりができていた。その中の大多数がクレープを手にしていたことから、買うのにそれほど時間はかからなさそうだったのが救いと言えば救いか。

「これは場所取りが必要ですね。下手をすると立って食べる羽目になりそうですし」

「初春さんの言う通りね。ここは二手に別れましょう」

「人数から考えて、クレープを買う班が三人、場所取りが二人になるけど……まあ、御坂さんはクレープを買う方に決定だね。それ以外は……」

「あー、もうめんどくさいしジャンケンでよくない？」

「そうね」

佐天の提案に各々頷いてから、鷹月達は円になる。

「じゃ、いくわよー。最初はグー、ジャンケンポン！」

御坂の音頭に合わせて、鷹月、初春、佐天、白井が手を出した。

「お姉様、黒子は、黒子は」

「はいはい、行きますよ、白井さん」

初春が心からの涙を流す白井を引っ張って行く。

「……大変ですね、御坂さん」

「……白井さん、御坂さんの前だといつもあなるんですか？」

「え、ええ、まあちょっとね」

クレープ屋の前に残った三人は呆れたり、同情したり、苦笑したりしてそれを見送る。二人の姿が見えなくなり、三人はクレープ屋に並ぶ。

「御坂さん、前どうぞ」

「そうですね。御坂さんが一番前で」

「え？ どうして私が前なのよ」

先頭を進める二人に、御坂が首をかしげる。が、その本人はいかにも前に行きたそうにそわそわと動いていた。

「え、だって、その……ねえ」

「え、まあ、そうだよねえ」

二人が御坂から視線をそらす。その先には幸か不幸か、あのゲコ^{ストラ}太を手^ツに喜ぶ園児が。それを見て、御坂は心外な、とでもいう風に顔を真っ赤にする。

「な、だ、だから違うって！ ほ、ほら！ 先輩の言うことはちゃんと聞く！ 遠慮せずに並びなさいって！」

言い訳をしながら、佐天を押す。このままではまずい。そう思った鷹月はより一層の抵抗を試みる。

「い、いや僕は良いですよ、後ろで」

「いいつつってんでしょ！ほら、早く！」

「そ、そう！レディーファーストですよ！ほら、僕は男ですから！」

必死に言う鷹月に、御坂ついにそう、と言って列に並ぶ。ほっと息をつく鷹月。しかし、不幸はこれで終わらなかった。

「おめでとうございまーす。これが最後の一個ですよー」

佐天がクレープを買うと同時に告げられる、死刑宣告。おそろおそろ二人が御坂を見ると、御坂は地面に床をついてがつくりとうなだれていた。顔を上げ、佐天と顔を見合わせる。二人は頷くと、まず、佐天が手に持ったゲコ太を御坂の前に垂らした。

「あの一、よかったらこれあげますよ？あたし要りませんし」

その言葉に御坂がバツと顔を上げるが、すぐにその顔を反らした。

「べ、別に私だって要らないわよ。そんなカエル……」

「ま、まあ、別に佐天さんは御坂さんがほしいからあげるっていうんじゃないくて、仲良くしましょうっていうあいさつ代わりに言うってるんですよ。受け取ってあげてくれませんか？」

頑なにゲコ太を受け取ろうとしない御坂に、鷹月が言い聞かせる
と、少し間をおいてから、御坂は顔を上げた。

「そ、そう！？じゃ、じゃあもらおうかな！」

佐天からゲコ太をもらった御坂はそのゲコ太をいかにも興味なさげにカバンにしまうと白井と自分の分のクレープを買い、上機嫌に先に列から離れて待っていた佐天の下へ歩いていく。それを見送って、鷹月も財布をポケットから出しながらクレープを買おうと思ったその時、ふと鷹月の視界に入ったものがあつた。

（あの銀行、閉まってる……？）

鷹月は右腕の腕時計を見やるがまだ銀行が閉まるには早すぎる時間だ。少し考えてから、鷹月は財布をポケットにしまって店から離れ、広場に来ていた幼稚園の先生を見つけ、注意を促す。最初は怪訝そうな顔をしていた園児の先生も鷹月が腕章を見せるとそそくさと園児たちを集め始める。鷹月はそれを確認してから、腕章をつけながら初春達の方へと駆ける。

「初春さん、白井さん！」

そう呼びかけた刹那、閉じていた銀行のシャッターが、内側から爆発した。

クレープ屋のカエル（後書き）

ようやく次で主人公の能力を出せる！・・・そんなに強い能力ではないと思いますが。

生体電極―パルスポール―

突然起こった爆発に、広場に悲鳴が響いた。

「くそっ！ やっぱりというかなんというか！」

「起きてしまった物は仕方ありませんわ！ 初春は警備員に連絡とケ
アンチスキル
ガ人の確認をお願いしますわ！」

非常ベルが鳴り響く中、初春は携帯を取り出し、鷹月はそのまま銀行へと向かう。その間にも、小さな爆発は起きている。

「まったく！ 爆弾を使ったのか能力を使ったのか知らないけれど、少しは加減ってものを！」

吐き捨てながら走る鷹月の前に、煙の中から男が4人出て来る。その風貌や持つてる荷物からしてどう考えても職員ではなく、強盗犯だ。と、その内の一人がこちらに気付いたのだが、男が取りだしたものは予想外なものだった。

（拳銃！？ そんなものまで用意してたのか！）

パンパン！ と銃声が響くが、鷹月には当たっていない。素人なのだろう。もちろん、近づけば近づくほど当たる可能性は高くなる。

（けどっ！）

鷹月はそんなこと関係なしに突き進む。もちろん、何の確信もなく突っ込むほど鷹月もバカではない。そしてその確信はすぐに現実になる。

ガツと鈍い音を立てて、銃を持っていた男が転がった。

「まったく、拳銃まで持っていようとは、呆れて物も言えませんわね」

男が立っていたところに白井が着地する。

テレポート
空間移動。

それが彼女の、常盤台の^{レベル4}大能力者、白井黒子の持つ能力だった。

「クソッ！ついてねえ！」

白井の背後で、男が握った拳を振り上げる。しかし、その前に鷹月が男の足元に滑り込み、足を引っ掛ける。

「うおっ!?!」

ジャッジメント
「風紀委員です。器物破損及び強盗の現行犯で——拘束します！」

叫ぶと同時に、前のめりになった男の服の衿を掴んで地面に叩きつけた。ついでにその勢いを利用して立ち上がる。

「そんな気をきかせなくとも自分で対処出来ましたのに」
「わかってるけど、それじゃ僕の立つ瀬がないじゃない」

バカにするなどとも言いたげな白井の言葉に鷹月が苦笑いする。
ともかく、これで二人。しかし。

「きゃああ!?!」

突然上がった悲鳴に二人は慌てて振り返る。そこには、初春の首に腕を回し、ナイフを突き付ける男がいた。

「へへへ……この嬢ちゃんがどうな——おい！聞いてんのか！」

しかし、鷹月は男の声が終わらないうちにしゃがむ。そして、思いつき地面を蹴った。

エレクトロマスター

鷹月は発電能力者だ。しかし、鷹月は自ら発電した電気を放電することはできない。体から電気を放つことも、磁力を扱うこともできない上、精々発電量は人を感電、気絶させることが関の山の異能力者だ。しかし、触れていれば、それに電気を流したり、機械を操ったりすることもできる。もちろん。

自らの筋肉に電流を流して、常人ではありえないほどの瞬発力を得ることも。

その能力を、鷹月自身はこう名付けた。

パルスボール
『生体電極』と。

「な、にっ!？」

絶句する男を前に、鷹月は空中を一回二回と回って男に肉迫し、その踵で男の顔面を蹴り飛ばした。

「ぐあっ！」

「きゃあっ！」

男と初春の悲鳴が重なり、男の腕が初春から外れたのを見計らって地面に着地した鷹月は倒れ込む初春を抱きとめる。蹴られた男は地面を転がった。

「大丈夫？」

「は、はい……あ、ありがとうございます」

見たところケガをしていなさそうな初春を見て、鷹月はほっと息をついた。

「いや、なんというか……迷惑かけてごめんなさいというか……」
「謝ることじゃないわよ。私が勝手にやったことだし」

頭を下げる鷹月に御坂は戸惑ったような表情を浮かべる。初春を助けたのはいいが、その後、男は車に乗って逃走を図り、御坂の超電磁砲ルガンによって車ごと吹き飛ばされたのだった。御坂曰く、「友達を人質に取ったのが許せなかった」らしい。

「それにしても、すごかったですね、超電磁砲レールガン」
「本当ですね！ こうコインを弾いて……」

手を前にかざして御坂のまねをする初春を見て苦笑していると、でも、と御坂が鷹月の方を見た。

「鷹月くんも面白い使い方するわよね。アレどうやってんの？」

アレって？ と首を傾げる。御坂が言うにはあのジャンプのことを指しているらしい。

「あれはですね。ようは電気ショックですよ。筋肉に強めの電気信号を送ってるんです。でも強すぎたりすると神経細胞を壊してしまいかもしれなくて、加減が難しいからそう簡単に使えるものじゃないし、そもそも僕自身の発電量が逆に大きくないからできるんです」

ふーん、と納得したように頷く御坂。

「まあ、御坂さんぐらいになると、元々の身体能力スベックなんて関係なくなっちゃいそうだからあまりいらいてっ」

突然走った後頭部の刺激に、鷹月はそれほど痛くもないのに思わず口に出してしまう。振り返ると白井が呆れたような顔をして立っていた。

「いったい何をくっちゃべってますの。元々鷹月があの時犯人を捕まえていればお姉様は手を出さずに済んだのですわよ？」

「はは、おっしゃる通りで……」

白井の耳の痛い意見に笑うしかない鷹月。そんな鷹月を見て、白井はため息をついた。

「まったく何度目ですか？初春だってもう立派な風紀委員ジャッジメントなんですわよ？」

「そう言われてもね……」

曖昧に笑いながらも、白井の言葉を鷹月は否定する。別に初春がまだまだ未熟と言ってるのではない。

確かに、犯罪の矢面に立てば今日のように人質に取られたりと決してほめられるようなものではない。しかし、初春の後方支援バックアップはとても優秀だし、情報処理に関してはきつと風紀委員の中でも優秀な方だろう。初春は優秀な風紀委員だ。中途半端な自分とは違って。

だが、それとこれとは関係ないのだ。これは、鷹月が生きる目的なのだ。

(そう、何があっても、守り通す)

かつて、自分の命よりも大切なモノを失くした、
鷹月みじゆくもの暁の。

生体電極ーパルスポールー（後書き）

これではやく1話分・・・先が見えない。それと、御坂の活躍は省かせていただきました。なぜって、そりゃ超能力者の御坂の戦いと異能力者の鷹月の戦いを一緒に書いたら間違いなく御坂の方が派手になるからです。けっして面倒くさかったわけではないです。多分。

学舎の園（前書き）

鷹月暁

柵川中学校1年生。初春や佐天の同級生で風紀委員第一七七支部所属。

発電能力者の異能力者（レベル2）で、発電能力はレベル相応、放電も出来ず、自分が接触している対象に電気を流すくらいのことしかできないが、演算能力はかなり高い。故に自分では生体電極パルスポールと名付けている。その高い演算能力によって電気を操ることに關してはかなりの精度を誇る為、自らの筋肉を電気信号によってドーピング、飛躍的に身体能力を高めることができる。ただし、無理な負担を筋肉に強いている為、反動も強い。もちろん、能力を使っていない状態でもかなりの体術を使える。

学舎の園

「ここかな」

鷹月はきよろきよろとあたりを見回す。

珍しく鷹月の携帯に入った私的プライベートな連絡で呼び出された場所。それは第七学区のとある高校だった。

「えーと……職員室は……あ、すみません」

鷹月はしばらくあたりを見回すと、学校から出て来た高校生に声をかける。

「あーチクシヨウ土御門のヤツ変なこと言いやがって。おかげで上条さんの不幸指数は本日も右肩上がり……ん？ ああ、どうかしましたか」

肩を落としながら歩くツンツンした髪の高校生は気だるそうにしていたが声をかけると気だるそうな顔をやめて真面目に話を聞こうとする。決して優等生という感じではなかったが、困ってる人は放っておかなさそうな、人のよさそうな顔だな、と鷹月は漠然と思いつながらも、尋ねる。

「えっと、職員室に用があつて来たんですけど」

「ああ、それなら——」

丁寧に教えてくれた高校生にお礼を言って、ふと思いついたように食べようと思って食べ損ねていたカレーパンをあげると、何故か少年は涙目になりながらも嬉々として受け取った。今にもスキップ

しそうな彼を見送り、鷹月は職員室へと向かった。

「おーすまないな。よく来たじゃん」

鷹月を職員室で待っていたのは、緑のジャージを来た女教師だった。

「ええ。まだ学校も終わってない上に風紀委員もこのところ忙しいのに、わざわざ呼び出しなんてご足労この上ないですよ黄泉川先生」

「まあそう言うなじゃんよー。風紀委員になりたいって言うお前に警備員の捕縛術を教えたのは私じゃん」

鷹月の嫌味を黄泉川はあっさりと笑って受け流す。

先ほど黄泉川の言った通り、鷹月の風紀委員としての体術は、この黄泉川から教わったものだった。だからこそ、鷹月は今回呼ばれたのだろう、と勝手に推測する。

「で、要件はなんなんですか？」

「まあ、ここじゃなんだからせっかくだし食堂にでも行くじゃん。校内見学も兼ねて」

黄泉川に連れられ、鷹月は生徒が下校して人気のなくなった廊下を歩く。

「・・・鷹月、お前さあ」

「なんでしよう？」

「女装って興味あるじゃん？」

「はあ！？あるわけないでしょう！……ってまさか」

鷹月は突然尋ねられたことから、頼みごとの予想をして顔を真っ青にした。

「いやですよ！ぜったいいやですからね！」

「つつても、今回の事件の現場は『学舎の園』まなびやのその。その被害者は女子なんじゃん」

「じゃあなんで『学舎の園』の中にいる風紀委員に頼まないんですか！？」

「んー、イタズラごときでわざわざって向こうが乗り気じゃないんじゃないよー」

「イタズラの犯人を捕まえる為に女装させられるんですか僕は！？」

ぎゃああー！と叫ぶ鷹月だが、黄泉川は聞く耳を持たず、ちよつと待ってろと言うと教師用のロッカールームに入った。そして出て来た黄泉川の手に抱えられた物を見て、鷹月の顔はさらに青ざめる。

「そ、それって……」

「潜入用になってわざわざ向こうから送られて来た制服じゃん」

見覚えのありまくるそれは常盤台中学の制服だった。

（うう……よりもよってこの制服とは……）

バスに乗りながら、鷹月は今自分が来ている服を見る。

それは奇しくも、自分の風紀委員の同僚がいつも着ている服なのだが。

（どうしてこんな服で表を歩けるんだろう……）

スカート、というものは鷹月の想像以上にはきたくなくなるものだった。なにせ。

（足がスースーする）

男子がはいているのは基本ズボンだ。しかも、鷹月の場合、私服ですら長ズボンが多いのだ。それに比べて常盤台の制服は（鷹月からすれば）超がつくほどのミニスカート。短パンをはいているとはいえ、脚が心もとないのも当然だった。しかし、何よりも鷹月がシヨックを受けたのは。

（何より、自分が着ててもバレてないってことだよなあ……）

もともと、鷹月の顔は男の様な精悍さはかけらもなかったし、それで整ってはいたので女、と言われても不自然ではなかった。その上、体格もほっそりとしていたので何気にごまかしおおせていたのだった。

「次は、学舎の園前、学舎の園前」

心からの（言っておくが心の、ではなくあくまで心からの）涙を流す鷹月の耳に無情なアナウンスが流れる。そのアナウンスを聞き

ながら、鷹月は涙を拭いて顔を上げる。

（なら……結局行かなきゃならないのなら——）

鷹月は決意を胸に、学舎せんじょうの園の入り口に立つ。

（やってやる！僕をこんな目にあわせたそのフザけたイタズラをするヤツを捕やってやろうじゃないか！）

鷹月は黄泉川から預かったカードを入口の監視員に見せ、羞恥心を捨てて学舎の園に踏み込んだ。

学舎の園（後書き）

何気なくかの主人公さん登場。もちろん、カレーパンで喜んでいたのは彼の体質によって昼何も食べなかったため。あと前書きに主人公のプロフィール掲載。

感想とかいただけるとうれしいです

いつもの顔ぶれ

（とは言ったものの……）

なるべく平静を装いながら、鷹月はただ歩いていた。

（まだ何も手掛かりないんだよなあ）

いつもと違い、今回は初春のバックアップも、現場の情報収集もできていないため、一から調べなければいけなかったのだが、それすらもできずにいた。

今回の件はあまり表ざたになっていないものではない上、被害者があまり口外しないため、事件そのものが知られていないためだ。

（初手から手詰まりかあ……どんなイタズラかも教えてくれなかったし、これはとんでもなく面倒なことになりそうだなあ）

「きゃあ！」

はあ、とため息をついた途端、いきなり悲鳴が聞こえた。

（来たか！？）

慌てて声の方を振り向くと、そこにはなぜか見知った顔がびしょびしょになって地面に座り込んでいた。

「さ……だ、大丈夫ですか？」

佐天さん、と呼び掛けかけて、鷹月は慌てて口をつぐむ。佐天と知り合いの常盤台の生徒など、御坂か白井以外にありえそうにない

からだ。今の鷹月は決して鷹月暁であることは知られてはいけ
ないのだ。

「ど、どうもすみません」

鷹月が差し出した手を掴んで、佐天は立ち上がりながらお礼を言う。鷹月はいえ、どういたしましてと断るとそのままその場を後にしようとしたのだが、不意にあの！と声を掛けられて振り向く。が、その顔を見て鷹月はあやうく吹き出しそうになった。

（う、初春さんまで！？）

「どうかしましたか？」

心の中で驚愕しながらも、鷹月は至極冷静に立ち振る舞う（もちろん、本心は必死）。

「あの、私達、常盤台中学に行きたいんですけど、私たちここに来たの初めてで……よかったら、案内していただませんか？」

「うん、いいよ」

思わず返事をしてしまってから、しまった！と鷹月は自分の失態に絶望した。

今初春達の道案内をすれば、何のために学舎の園まなびやのそのに来たか分からなくなる上、下手をすれば初春達に正体がバレる。そして何より、すでに尻尾を見せてしまったのだ。ぎゃああ！と心の中で悲鳴を上げる鷹月だったが。

「わあ！ありがとうございます！」

初春は当然のように喜んだ。鷹月は一瞬何を言われたかわからな

かったが、バレなかったことをわざわざ聞いて不自然がられる必要もないと、鷹月は気にせず、事前に調べていた学舎の園の地図を頭に思い浮かべながら、初春達を連れ立って歩き出した。

（そうだよそうだったそりゃそうだよ……!）

変な三段活用を胸の奥で叫びながら、鷹月は頭を抱えた。

（初春さん達が学舎の園に入る為には白井さん達に招待してもらわなければならないじゃないか……っ!）

「えっと、そちらは？」

「ああ、ここまで案内してくれたんです。えっと――」

「わしびあかね驚陽明音です」

焦りながらも、決められた偽名を名乗ってお辞儀をする。しかし、そう簡単に事が運ばないのが世の中だ。

「あれ？ウチの生徒にそんな子いたっけ？」

「さあ……一年では聞いたことがない名前ですけど」

「え、えっと、その、今度転入する予定で……」

首をかしげる御坂と白井を見て、大いに慌てる驚陽こと鷹月。

「まあいいじゃないですか！それよりも、ほら、早く行きましょう
よケーキ屋さん！」

「……ま、そうね！よろしく、驚陽さん」

（た、助かった……）

しかし、慌てる鷺陽の信条を知ってか知らずか（知ってもらっていても大いに困るが）発された初春のフォロー（？）のおかげで何とかことなきを得た鷺陽だった。

佐天が借りた常盤台の制服に着替えるのを待ち（もちろん、鷺陽はトイレに行くと言って、立ち会わなかった。もちろん、トイレに入ってもいない。女子トイレしかないのだから）、件のケーキ屋に向かう。

「うわぁ……」

そこで、カウンターに並べられた様々なケーキを見て、鷺陽は思わず声を上げた。整然と並べられたそれらは学舎の園の外では見られないような飾り付けをされていた。もちろん、そのお値段も学舎の園の外ではありえない数字だ。もちろん、潜入捜査という名目で来ている鷺陽がそんなお金を持っているはずもない。しかも、ましてや食事など、女の子がどんな仕草で物を食べるかなんて男の鷹月が知るはずもない。

もっとも、所詮は同じ『人』なのでそこまで変わることはないだろうが、それでもなるべくバレる可能性は減らしたいのだ。今後の自分の為にも。しかし。

（これは……まずいかも……）

「あ、あの、私、ちょっと今日持ち合わせがなくて――」

「ああ、大丈夫。それぐらい私が払ってあげるから心配しないで」

バツサリと言い切られてしまった。

さすがは学園都市の誇るお嬢様学校常盤台の生徒。太っ腹だ。な
どと変な感心をしている場合でもないのだが、実を言えばこれ以上
の策が思いつかない鷹月だった。しかし、日頃の行いが良かったの
か、突然初春と白井の携帯が鳴りだした。

その顔ぶれからして、恐らく風紀委員からの呼び出し。そして、
同じ風紀委員である鷹月には電話がかかって来ないのは、事件が発
生した場所が男子禁制である学舎の園内であったからか。つまり、
考えられるのは、今鷹月が追っている事件が、正式に風紀委員に任
された、ということだろう。

「仕方ないですわね。わたくし達はこの辺で」

「そ、そんな」

残念そうに肩を落とす初春を引きずるように駆けだす白井を見送
り、鷺陽はどうしよう、と考えだす。このまま帰ってしまっても、
きっと白井と初春が解決してくれるだろう。しかし、それでは今ま
での自分の苦労が無駄になる気がして（実際そうなのだが）なんと
なく気に食わない。だが、この変装もいつバレるかわからない。さ
て、どうしたものかと顔を上げると、佐天がいらないことに気付いた。

「あれ、佐天さんは？」

「あ、ちょっと化粧室行ってる」

「そう。ありがとうございます」

鷺陽は気にも留めずに再び思考の沼に沈む。この後何が起るか
も知らずに……。

いつもの顔ぶれ（後書き）

ふざけてるかふざけてないかで言えば大いにふざけてます。
進行遅くてスイマセン・・・更新も・・・かな？

視覚障害一ダミーチェッカー（前書き）

ずいぶんと間が空いてしまった・・・。

視覚阻害ーダミーチェックー

「こんな、こんなこと……」

「ひどい……」

御坂と鷺陽は口をそろえて愕然とした。その二人の前には、佐天が横になって寝ていた。

佐天が席をはずしてから、いつまでたっても戻って来ない彼女に對して、御坂が様子を見に行くと、佐天が倒れ伏していたのだ。幸い、ケガはなかった。しかし、その代わりとでもいうのだろうか。

佐天の姿は、変わり果てていた。

「常盤台狩り？……そうか、常盤台^{ウチ}の制服を着てたせいで……」

戻って来た初春と白井と合流し、鷺陽達は常盤台^{ジャッジメント}の風紀委員が使う部屋を間借りして話しあっていた。

「佐天さんの具合はどうなんですか？」

「体の方は大丈夫。今は寝てるだけって言うてましたから。でも……」

初春と御坂が悔しそうに唇を噛む。

「そういえば、その、犯人が誰かっていうのはわかってるんですか？」

鷺陽がおどおどと口を開く。

「まだですの……少々厄介な能力者のようでして……」

「厄介って？」

「目に見えないんです」

尋ねられた白井の代わりに、初春が答えた。

『本当ですわ！わたくし何も見ていません！』

扇子で顔の上半分を隠しながら、常盤台の女子生徒が警備員アンチスキルに怒鳴る。しかし、警備員のパソコンの映像はたしかにその女子生徒の隣を歩く別の制服を着た女子生徒が歩いていた。

「最初は光学操作系の能力者を疑ったのですが――」

「姿を完全に消せる能力者は学園都市に47人います。でも、その全員にアリバイがあって……」

「それ以前に、監視カメラには映ってるんですよ。光学操作系っていうのはちょっと違うんじゃない？」

初春が操るパソコンの画面を見ながら御坂が呟く。うーん、と悩む4人。

「あ、鳩」

「え？」

「白井さん、見なかったんですか？私も見ましたけど」

「そんなもの、気付きませんでしたわ」

白井があっけらかんと言う。その時、御坂がなにかに気付いたよ

うに顔を上げた。

「初春さん、ちょっと調べてほしいんだけど」

「「え？」」

カタカタとキーを打つ音が鳴り響く。すると間もなく、画面に一つの文字列が出て来た。

「ありました。能力名『ダミーチェック』。対象物を見ているという認識そのものを阻害する能力です。該当する能力者は一名」

再びキーを打つ音が響き、一人の女子の顔写真が画面に表示される。

「関所中学二年、重福省帆^{じゅうふくみほ}」

「そいつですわ！」

初春を押しつけて叫ぶ白井。でも、と初春は画面を見ながらその意見を否定した。

「この人は異能力者^{レベル2}です。自分の存在を完全に消せるほどの能力ではないと、実験データにあります」

「うーん」

「良い線言ってると思ったんだけどなー」

推理が外れて残念がる御坂。その時、うーん、と佐天の方から声

がした。

「あ、佐天さん、まだ無理しないで——ぷっ」

気を使おうとした4人。しかし、その顔を見て口を手で押さえる。そんな4人を、佐天は首を傾げて見ていた。

「あああああ！！！」

「「「あはははは！！！！！」」」

佐天の悲鳴が響き、4人は一斉に笑いだした。鏡に映った佐天の顔は、いつも通りのものだ。ただし、その極太に書かれた眉を除けば。

「な、なななな」

「さ、佐天さん。そんなに気を落とさずに——ぷっ、くくくく」
「シヨックよねえ、そりゃ。くっくく」

動転する佐天を気遣う御坂と初春だったが、どうもその顔を見ると笑ってしまい、慰めになっていないのがわかる。

「せめて、これくらい前髪があったら隠せましたのにねえ」
「……前髪？」

白井が眺める画面を佐天が覗きこんだ。

「こ、コイツだぁー!」

瞬間、佐天が勢いよく叫んだ。

「あ、あなた犯人を見たんですの!？」

白井が慌てて確認を取る。当然だろう。今回の犯人は見えないゆえに厄介なのだったのだから。

「はい。あの時、鏡の中に……」

「鏡に監視カメラ……なるほどそういうことか。認識できなくするのは直接肉眼で見てる相手に限られるんだ」

佐天の話を聞いて、御坂が納得したように呟く。

「くっくっく……」

ふと佐天が笑っていることに気づき、振り向くと、佐天が画面を指さしながら凄まじいまでの敵意をむき出しにしていた。

「この眉毛の恨み。晴らさでおくべきか!やるよ!初春!」

「……はい?」

妙な展開になって来た。鷺陽は心の中でため息をついた。

視覚阻害ーダミーチェッカー（後書き）

鷹月・・・いや鷺陽がいる以外はほとんど原作通り・・・感想と
かあればぜひ。

追いかけてこのその先で（前書き）

前回感想くれた方、ありがとうございます！

追いかけてこのその先で

西洋の街並みを思わせる学舎の園の路地。その壁に鷺陽は寄りかかって待っていた。

『鷺陽さん。間もなくそこに来ます。相手はスタンガンを持っていますから注意してください』

「はい。気をつけます」

小さく返すなり、路地の入口から足音が聞こえて来た。

（さすが初春さん。タイミングも位置も完璧だ）

初春の的確なバックアップに感心しながら、タイミングを合わせて足を前に突き出す。その瞬間、足に何かがぶつかった感触の後、何かが転ぶ音がした。そして姿を現す、重福省帆。

「風紀委員です。用件はお分かりですね？」
ジャッジメント

「……くっ」

鷺陽が近づくと、再び重福は鷺陽の目からは見えなくなる。

（なるほど、ここまで見えなくなるものなんだなあ）

「初春さん！どっちですか！？」

『大丈夫です！そっちは白井さんが待機していますから、指定する位置へお願いします！』
ポイント

間髪いれずに返って来る初春の指示に鷺陽は舌を巻く。

（いくら見えなくてもこれじゃ逃げられないよな……）

初春がキーボードを叩く音に合わせて、画面の中の文字列が下から上へと流れて行く。初春はそこに目を走らせているが、その光景は普段の初春からは想像もつかないものだ。なにせ五台ものパソコンを一人で操作しているのだから。

「なんか、すごいね」

「こうでもないところにある端末じゃ処理が追いつかないんです」

同じことを思ったのか御坂が感心するが、初春はさも当然とでもいうかのように返す。

「それより、学舎の園は一七七支部の管轄じゃないんですけど大丈夫なんですか？」

「……上からの許可、取れましたわ」

携帯から耳を放すと同時に、白井が答えた。それに佐天がよしと勢い込む。眉毛のことを相当根に持っているようだった。

「初春！どーんとやっちゃって！」

「はいはい。どーん」

やる気のなさそうな掛け声をあげながら初春がエンターキーを押す。それと同時に、一息に画面に画像が映し出され始めた。

「学舎の園にある監視カメラ、全2458台、接続を終えました」

おお！と四人の歓声が上がった。

つまるところ、こういうことだ。

いくら学舎の園で逃げ回ろうとも、全2458もの目が常に重福を追いまわす。さらにこちらには学舎の園をいつも歩きまわっている御坂と白井がいる。いくら見えなくても、地の利は完全にこちらにあるのだから、逃げようもない。

『ふふふんふーんふふふん——』

さすがに自分と同じ中学一年生が鼻歌交じりで五台パソコンの画面を見ながら自分達に指示していると言うのはぞっとしない話だが。

『初春、容疑者を拘束したと、警備員に連絡してくださいな』

『ふぁーい』

『お疲れ様』

（ふうー。やっと終わったか……）

指示された公園の入り口前で、鷺陽はそんなやりとりを聞いて安心する。犯人が捕まったのも何よりだが、それよりもバレずにここ

まで隠し通せたのは本当によかった。
無線機を取り外しながら、鷺陽は階段を上がって行く。その時だった。

「……笑えばいいわ、あの人のように！」

慌てて駆けあがった鷺陽の耳に届いた、衝撃的な事実。

彼女の春。それは確かに幸せなひと時だった。

しかし、その春は突然にして崩れ去る。

彼は、常盤台の女と歩いていた。

それがいかに彼女にとって信じがたい出来事だったか、それはきつと彼女にしかわからない。

彼女は問うた。なぜ、あの女なのかと。私ではダメなのか。

その問いに、彼はこう答えたのだった。

『だって、お前の眉毛、変』

もう彼女は絶望するしかなかった。

そして、憎んだ。自分を捨てた男を。自分から男を奪った常盤台の女を。そしてなにより、自分をこんな目にあわせた眉を。

「だから、みんな面白い眉毛にしてやろうと思ったのよー！」

「えっと」

「ごめん、途中から話が見えないや」

白井と御坂がポカンと拍子抜けした顔をする中、鷺陽はいや、鷹月は震えた。

そして、自分の感情のままに叫んだ。

「ふざっけんなあああああ……！！！！！！」

「「わ、鷺陽さん！！！！？」」

御坂と白井、そして佐天が驚くのも構わず、鷹月は吼える。

「そんなことが理由なのか！？なんだそりゃ！そんなことでこんな事したのか！そのせいで僕はこんな恥ずかしいカッコさせられてあやうく男の尊厳失うトコだったんだぞ！こんな場所で事件起こしやがって初春さんとか白井さんとかにバレたらどうするつもりだったんだ、ええ！ましてや佐天さんなんかバレたら酷いことになるのは目に見えてるだろうに！人様の迷惑も考えないで勝手しやがって、今回の件でどんだけ寿命縮んだかわかんねーぞこんのバカヤローオオオオオオ！！！！」

一息に叫び、ゼエゼエと息をつく鷹月。その剣幕に、御坂達ともかく、罵倒された重福でさえも一時茫然とした。そして、白井がつぶやいた。

「もしかして……鷹月……ですか？」

「……あ」

ぎゃあああああ！と鷹月の絶叫が響いた。

重福省帆が、連行され、一件落着いたわけだが、鷹月はがっくりとうなだれていた。

「……もう死にたい……」

「ま、まあまあ、別に良いと思うわよ？似合ってるし」

「そうですわよ。そんなに落ち込むことはありませんわよ」

「……いつそ殺して……」

本人達に悪気はないのだが、そのフォローは鷹月の心にザックザックと傷を刻んでいく。

「あああああ！」

しかも、そこに初春も到着という最悪なタイミング。ふと見てみると、初春は鷹月と同じように地面にへたり込んでいた。

「そんな、そんな……」

「ち、違うんだ初春さん！これは、その、いろいろと事情が――」

鷹月が慌ててわけを話そうとしたところで、うなだれる初春は呟いた。

「常盤台の制服を着てないのが、私だけなんて……っ！」

「ごめん初春さん。反応するのはそこじゃないと思うんだ」

「これでしばらくは人手に困ることはなさそうじゃん♪」

一方そのころ、携帯の画面に映る鷹月（常盤台制服着用）を見ながら一人ほくそ笑む警備員アンチスキルがいたという。

追いかけてこのその先で（後書き）

ようやく重福さんが捕まった・・・長かったなあ。

次回は初春と白井の出会いを知った佐天が今度は鷹月に尋ねます。

鷹月と初春の出会い。そして、鷹月が初春を守る理由・・・。

思い出と面影。

感想とか待っています！少し遅れるとは思いますが返信もなるべくしように思います。

思い出と面影（前書き）

すごく長くなってしまった・・・すいません。

思い出と面影

「そういえばさー」

いきなりパフェを口にしていた佐天が鷹月に話しかけた。ここはとあるファミレス。鷹月は、とある事情によって初春に補習の手伝いを断られた（正確には、自ら手を引いた、らしいが）佐天に呼び出されたのだった。

「なに？」

鷹月は憮然とした顔で言った。実際にプリントを目にして答えを書きこんでいるのが鷹月なのだから仕方ないが。

「鷹月と初春って最初っから仲良かったの？」

「……なんで？」

「いや、中学に上がって来た時から仲良かったじゃん。デキてるんじゃないかなーって思ったりもしたぐらいだし」

グバツと鷹月は口に含んでいたコーヒーを吹き出した。もちろん、佐天のプリントは守ったが。

「な、なんてことをいきなり言い出すんだよ！誰の手伝いだかわかってんの！？」

「い、いや、さすがにもうそういう噂は立ってないけどさ。この間白井さんと初春の話聞いたからさ」

ゲホゲホと咳き込む鷹月を少しだけ心配しながら、佐天は理由を言った。

「だからさ。やっぱそういうのってあったのかなーって」
「ああ、そうだったんだ」

鷹月はなんとなく納得した。まあたしかに、2人の話を聞いてあと1人知らないとなると聞きたくもなるだろう。

「んー……まあ、2人のほど美談じゃないけど、それでも聞く？」
「え！？マジ！？」

「いや、隠すほどのものでもないし」

それから、なんとなく思い出しながら、鷹月は思い出す。初春と初めて顔を合わせた日。そして、自分の新しい生きる目的を見つけた日。

「ええと、あれは――」

鷹月暁は、ジャッジメント風紀委員だ。

しかも、その中でも鷹月暁の名前はかなり有名だった。
戦闘訓練で警備員アンチスキル5人相手に大立ち回りをした、とか。
その始末書の数は小学生にして100を超えた、など。
さまざまな伝説とも言える噂を持っていた。

しかし、実際鷹月を見たある者は、彼をこう言った。

『生ける幽霊ゴースト』。

まさしくその通りなのだろう。実際、鷹月はそれを聞いた時、口端を上げて皮肉そうに笑ったのだから。

その日、鷹月は進学予定の中学のある第七学区をただフラフラと歩いていた。身長は年端もいかない子供。しかし、道を歩く人々は彼を避けて通った。

なぜなら、鷹月はいつも黒いパーカーに黒いカーゴパンツをはき、パーカーのフードを深くかぶっていたからだ。その上、ただでさえフードで見えにくい目元はどれくらい切っていないのかわからないくらい伸びた前髪に隠れて見えなくなっていた。

フラフラと歩く鷹月はまさしく、亡霊かなにかのようだった。

いや、亡霊だった。

鷹月には、妹がいた。あかり明という名の双子の妹。親に捨てられた自分の、たった1人の、家族。学園都市では、時折最初の入学金のみを払って蒸発する親がいる。その子供を、学園都市では『置き去りチャイルドエラー』と呼んでいた。あきら暁も明もその内の一人だった。

しかし、今、彼女は病院で覚めるかもわからない眠りについている。

（守らなきゃいけなかった……）

鷹月は定まらない視線をさまよわる。

（守らなきゃ、いけなかったのに……）

守れなかった。そう思った瞬間、鷹月はあやうく自分を殺してしまいそうになる。それでも、鷹月は踏みとどまった。妹は死んだわけではない、とあの先生は言ったのだ。だから、自分は生きなければならぬ。風紀委員になったのも、妹が起きた時、今度こそ守れるようになるためだ。そう自分の思考に沈んでいた時、ふと目の前で声が響いた。

「だれか、助けてください！」

閉められた郵便局のシャッターの前。自分と同年くらいなの、しかし、顔はそれより幼げな女の子が、目に涙を浮かべながら叫んでいた。

「郵便局の中で、風紀委員は強盗に襲われて——」

その周りには人だかりができてはいたものの、誰ひとり動こうとする人はいなかった。しかし、鷹月は決して彼らを薄情とは思わなかった。風紀委員とは治安維持機関であり、一応とはいえ訓練された人間だ。その人間が手も出せないのに、どうして一般人が入り込むことができるだろう。

そんな時、ふとその女の子が鷹月を向いた。そして、女の子は鷹月の目の前に来ると助けてください、と言った。鷹月が自分と同じくらいの背であるにもかかわらず頼みに来たのは、よほど慌てているのだろう。しかし、鷹月は動かなかった。なぜ、自分がわざわざ助けに行かなければいけないのか。シャッターを閉められ、中の様子は見えない上、客は中に取り残されたまま。ここまで状況を悪くしたヤツをどうして助けなければいけないのだろう。

そうして黙っていると、少女はそのままずっとその場に座り込んでしまった。

「お願いです……だれか、たすけて……」

その時、ふと、なぜかその女の子と妹が重なったように見えた。たしか、と鷹月は思い出す。

それは、自分達の寮の前で、捨て犬が見つかった時だった。

雨にぬれた子犬がかわいそうで、妹は必死に鷹月に犬を飼うよう頼んだ。しかし、鷹月はできずにただ立ちすくんでいた。当り前だ

ろう。寮はペットを飼うのは禁止、それより、自分達にその子犬を養えるはずもないのだから。それでも、妹は自分の前で子犬を抱きかかえるようにして座り込んで――。

「どいて」

「ふえ？」

気付けば、鷹月はシャッターの前に立っていた。なぜか、立っていた。あの時とは場所も状況も違う。なにより、この子は妹じゃない。

それでも、鷹月は全力を込めて、本当に能力も今までの鬱憤も何もかも、全てを込めて、シャッターに回し蹴りを打ち込んだ。シャッターは衝撃を受け、鈍い音を立てて内側にへこむ。

「あ？クソ！警備員か！？」

中で男の声がしたが、鷹月は気にせず同じ場所に回し蹴りを打ち込む。バコン！と音を立てて、シャッターがさらにへこむ。そして、さらにもう一撃当てた時、ガタン！と音を立ててシャッターが内側に倒れ始めた。

鷹月はそのまま傾いたシャッターを押し倒し、視界に入った男に突っ込んだ――。

「まあ、あとは初春さんから聞いたろうけどね」

「へー、でも初春、黒い服着た男の人って言ってたよ？」

そうだろうね、と鷹月は頷く。

「僕が初春さんと会ったのはその時だけど、初春さんが僕を知ったのは僕が新人研修で初春さんの担当になったからなんだ。だから、多分初春さんに僕と出会った時に話を聞いたらその時の話が聞けると思うよ」

「ふーん……言わないの？」

「言ったところで何かが変わる訳でもないでしょ？別にその時の人

が僕だったってわかってても変わるところはないよ」

「そうかなあ？」

ニヤリ、と佐天は笑った。

「もし、その時の人が鷹月だったら、初春惚れこんじゃうかもよー？」

「別にそういう関係じゃないってば！」

ビクツと佐天が驚いたように肩を上げた。

「じよ、冗談だってば。そんなに怒らないでよ」

「あ、ごめん……ちよつと席外すね」

そう言って、鷹月はトイレに向かった。

どうもおかしい、と鷹月は思う。

さして気にならないはずの佐天のちよつかいに対して、話をしたせいかどうも反応が過剰になってしまった。鷹月暁が、初春飾利を守る決めているのは、守れなかった妹を重ねているだけだ。もちろん、失礼だとは思っている。

だけど、もし。

自分の見えないところで、その決意が変わって行ってしまったい

たとしたら？

もし、自分の感情が、佐天に言われたとおりになっているとしたら？

「……くそっ」

鷹月は、鏡に映る自分を、怖くて見るができなかった。鏡の中の自分は、それを認めているかもしれないから。

思い出と面影（後書き）

うーん・・・少し無理矢理だったような気もするだろうか・・・。
次回、続く爆発事件。未だ犯人の特定すらされていない事件。鷹月
は、一人、駆ける。
量子変速—シンクロトロン—。

量子変速—シンクロトロン—

「一週間前、初めての犠牲者が出たのを皮切りに」

固法の説明と共に、壁に取り付けられた大きなモニターに現場の位置と写真が映し出される。

「連続虚空爆破事件は、その威力、範囲を拡大させています」
グラフィトン

今度は想定される爆発の威力を示すグラフが映し出される。そのグラフは後になることに大きくなる威力を表している。

「場所も時間も関連性は認められず、遺留品を^{サイコメトリー}読心能力で調べましたが、以前手掛かりはつかめていません」

映し出される遺留品は、アルミ缶に始まり、スプーン、熊のぬいぐるみなど多岐にわたり、証拠にはなりそうもない。

「次の犠牲者を出さない為に、^{アンチスキル}警備員と協力して、一層の警戒の強化と事件解決に全力を」

こうして、さした成果も得られずに、会議は終わった。

「はあ」

後ろに流れて行く街を見ながら、鷹月はため息をついた。

今回の警邏から、鷹月は学園都市製の電動のローラースケートをつけるようにした。本来ならそれほど速度はでないが、鷹月の物はバッテリーを外し、代わりに一般に出回っているものよりも大型で出力の高いモーターを取りつけることで、そこらの乗用車になら負けないほどの速度で移動できる特注品だ。もちろん、電力は鷹月の能力で供給している。

そんな物をなぜ使っているのかと言えば、理由は簡単。人手が足りないからだ。

ただでさえ学外の活動には積極的でないのに、その上、既に九人もの風紀委員が被害にあっていて。さらに言えば、その調査に割かれている人員も決して少なくない。

よって、機動性があり、かつその機動性を長時間活かせる鷹月の警邏範囲はおのずと広がったのだった。

「躍起になるのも仕方ないとは思うけど……」

本当に仕方ないと思う。しかし、この人手の少なさは異常だ。こういうときだからこそ、警邏を怠ってはいけないと鷹月は考えていた。しかし、現実はこのありさまだ。

早く犯人が分かればいいのに、と鷹月はせつなげなため息をついた。

それから、数日の後。

鷹月は、とある少年をつけていた。その格好は、いつもの制服ではなく、黒い半そでのパーカーに長くて黒い長ズボンといった風貌

だった。

数日前から、最近立てつづけに起きている事件について一つの共通点に気付いたのだ。例えば、あの忌まわしき常盤台の事件。あの時の重福省帆は、異能力者^{レベル2}であるにもかかわらず、自分の姿を完全に消していた。

そのような事例を基に鷹月はこう推測した。

学園都市の書庫^{バンク}のデータは、完璧ではない、と。だからこそ、鷹月は自らの足で調べまわった。ある時は実際に能力を見せてもらい、またある時は、実際に話を聞いたりした。

そして、もう一つ。それはこの事件の主な犠牲者が風紀委員ということだ。

もちろん、最初は偶然だと思った。しかし、爆発の規模に対して、一度の爆発による犠牲者が一人というのは、どうも不自然だ。普通に人を傷つける愉快犯なら、もっと人の多い場所、時間帯を選ぶはず。要するに、動機があるはずなのだ。

そうして見つけたのが、今鷹月が尾行している彼なのだった。

彼は実は結構ないじめにあっているらしく、彼の学校の風紀委員が、彼を助けに来た時、何回か、憎まれ口を叩いたらしい。

そんな理由で、彼を風紀委員とバレないようにつけていた鷹月だが、その少年に集中しすぎて、ドン、と誰かにぶつかってしまった。すいません、と声をかけて、再び前を向くと、なんとそこに少年はいなかった。

まずい。そう思って慌てて少年が消えたあたりを探すが、人ごみでよく見えない。

「くそっ！」

吐き捨てて、鷹月は考える。

少年の能力は『量子変速^{シンクロトロン}』。実際には分からないが、移動にはあまり役に立ちそうにない能力だ。

まだ遠くに入っていないはず。そう思い立ち、ふと鷹月はビルを見上げた。

セブンスミスト。

もしかすると、最悪の事態もあるかもしれない。覚悟を決めて、鷹月は中に駆け込んだ。

量子変速—シンクロトロン—（後書き）

幻想御手編。展開がちよっと遅いかな？とも思ったりするこの頃。よければ感想とかお聞かせください。

少年を見失い、探す鷹月。そんな彼の元に届く電話。
次回、虚空、爆破。

虚空、爆破

「このフロアでもない！」

駆け回りながら、鷹月は吐き捨てた。

件の少年を見失ってから、既にかなりの時間が経過していた。やはり取り押さえてしまふべきだったか、という考えが頭をよぎるが、鷹月は頭を振ってそれを否定した。あくまで、まだ疑いがあるだけ。捕まえるには証拠を得ないといけないのだ。それで関係のない人を危険に巻き込むものかどうかとは思うが。

（とにかく、早く見つけないと！）

疑いとは言いつつも、鷹月はなんとなく確信していた。だからこそ、一秒でも早く見つけ出さないといけない。もし、少年が標的になる風紀委員ジャッジメントを見つけてこの店に入ったら、それは。

不安が頭をよぎった時、突然携帯電話が鳴りだした。見れば、それは支部で白井と共に事件を調べていた固法からのものだった。

慌てて通話ボタンを押すと、電話の向こうから固法の慌てたような声が響く。

「もしもし！固法先輩！？」

『ああ、鷹月くん？今、衛星が重力子の爆発的加速を確認したんだけど、今座標を送るから——』

「まさか、第七学区のセブンスミストって店じゃないですか！？」

鷹月が店の中を走りながら叫ぶと、え！？と驚くような声が聞こえてきた。嫌な予感というのは、当たるものらしい。

「今、僕はそこにいます！そんなことより、僕以外にセブンスミストにいる風紀委員はいますか！？」

そう携帯に叫んだ瞬間。電話の向こうから慌てる白井の声が聞こえた。

『ちょっと待ってて』

固法の言葉を聞いて、走るのをやめて携帯に神経を集中させる。直後、「なんですって！」という固法の声に続いて聞こえた情報に、鷹月は電話を切った。

「……くそっ！よりにもよって！」

鷹月が近くの壁に拳を叩きつけるのとほぼ同時に、店内に電気系統の故障と称した避難勧告が流れ始めた。おそらくは、いや、きっと自分が狙われているとも知らない風紀委員^{かのじょ}が、指示したのだろう。鷹月は、今までとは別の物を探して駆けだす。どんなものかわからない以上、爆弾を見つけ出すのは不可能だ。ならば、その標的を爆弾から遠ざけるほかはない。

鷹月は、見慣れた花飾りを求めて走りだした。

「一体どこにいたんだ?!」

勧告が出てから、既にかなりの時間が立っている。大方の客はもう出てしまったのか、さっきまでにぎやかだった店内はしんと静ま

り返っていた。

まずい、と鷹月は唇を噛みしめる。

今までの事件が風紀委員の身を狙っている以上、どちらかといえ
ば一般人の身は傷つける可能性の少ない今の状況の方がはるかに犯
人にとって都合がいい。なにせ、一般人は全て外に出払っているの
だから、あとは標的のいるフロアを吹き飛ばせば、大なり小なりケ
ガを負わすことも不可能ではないはずだ。それが可能なら強い強
さかどうかはわからないが、事件を起こすごとに爆発の威力が上が
っているのを見ると樂觀はできない。

鷹月の中に、焦りだけが積もって行く。その時。

「おねえちゃん」

緊迫したこの状況に似合わない、女の子の声が聞こえた。まさか、
と思って振り向くと、そこには、ぬいぐるみを初春に差し出す女の
子がいた。

見つかった。鷹月はほっと胸をなでおろす。その言葉が出るまで
は。

「一めがねをかけたおにいちゃん……」
が、おねえちゃんにわたしてって」

眼鏡をかけたお兄ちゃん。鷹月は咄嗟に叫んで飛び出した。

「ダメだ！逃げるんだ！」

「え！？」

初春が声を上げたその瞬間、ぬいぐるみが歪み始めた。

鷹月は、走るのを止め、その場にしゃがみこむ。刹那、鷹月の身
体は砲弾のように、初春達の下へ跳んだ。差し出されたままのぬい

ぐるみの頭を引っ掴み、思いっきり投げた。

しかし、その途中で、ぬいぐるみはその形を、白い閃光に変えた。

「つ、う……」

「だ、大丈夫ですか!？」

体をゆすられて、鷹月は頭を押さえながら体を起こした。

「どこか痛むところはありませんか!？」

「ああ、うん。大丈夫——っ!？」

後頭部に走った痛み鷹月は再び頭を押さえる。

「ああっ! ムリしちゃダメですよ! ちょっと見せてください」

頭に載せた手をどかされ、フードが外され、少し暗かった視界が開けた。

「鷹月……くん？」

「うえ？」

驚きを露わにした声を聞き、鷹月は声のした方を向く。
そして、やっぱりそこには見慣れた初春の顔があった。

「……や、やあ」

「やあ、じゃありませんよ! どうしてこんな所にいるんですか! し

かもそんな恰好で！」

「えっと、今日非番だし」

「白井さんは非番でも調べものしてたんですよ!？」

「私服、着れるのこれしかないし」

「どういうセンスしてるんですか!？」

鋭いツツコミの応酬に、鷹月は冷や汗をかいた。

これ、ちょっと面倒なことになる気がする。

もちろん、ちょっと犯人っぽい人を尾行してました。なんて言えない。そんなこと言ったら、間違いなく待っているのは眼鏡の先輩のありがたーいお説教と、もはや鷹月のデスク上の相棒となっている始末書の束だ。どうしよう。その答えを出すのに、三秒とかからなかった。

ポケットから携帯を取り出し、メールを確認するふりをする。それを即座に閉じて、立ちあがる。

「ちょっと先生から呼び出し!じゃ!」

「え!?! ちょっと! 鷹月くん!」

三十六計逃げるにしかず。

鷹月は、全速力でその場から逃げだした。

虚空、爆破（後書き）

無傷だったのは、もちろん鷹月がなにかをしたわけじゃありません。鷹月達を救ったのは、いつか会った高校生だった。お礼を兼ねて親しくなる二人。一方置いてけぼりにされた初春は。

次回、再会。

・・・予告に面白みがほしいかも。いいアイディアあったらください。あと、感想の方もよろしく願います。

再会

「ここまで来れば大丈夫かな」

そう呟いて、鷹月は走るのをやめた。そして、逃げて来る途中、店内で拾った財布を見る。

「これ、誰のかなあ」

見たところ、何の変哲もない財布。それゆえに、持ち主を探し出すのは難しそうだ。

交番にでも届けようか、とそれをポケットにしまって前を見た時。ずーんと音が聞こえそうなくらい膝について落ち込む高校生らしき人が視界に入った。

「不幸だ……」

うわ、変人だ。小さな子供の親に見ちゃいけませんって言われるタイプの人だ、とドン引きする。しかし、よく見れば以前どこかで会ったような気もする。

「あの」

「なんですか。上条さんは今財布を落として今後空っぽの冷蔵庫、もとい自分のこの空腹感とどう戦うかという生命的危機に陥って愕然としている最中ですよー」

ダメだこの人。そう思いながらも、彼が以前とある女体育教師に呼び出された時に親切に職員室の場所を教えてくれた上条さんなる人物であったことを思い出した。ついでに拾った財布のことも。

「えっと……財布ってコレですか？」

鷹月が差し出すと、上条さんはガバァ！と顔を上げるとガツと財布を掴んで「あったー！」と天に掲げた。やめてほしいと切に願う。周囲の視線が恥ずかしい。

「いやーよかった！ホントに助かった！危うく上条さんは弱冠16歳で餓死するトコでした！っておおげさか！いやーとにかく、ホント世の中捨てたもんじゃないなあ！」

そんな大げさな、と呆れた笑みを浮かべる鷹月の手をがっしりと掴み、ぶんぶん振り回す上条。そんな上条を見ながら、鷹月はいえ、と首を振った。

「僕と、僕の友達の命を助けて下さったんです。これくらい別にいいですよ」

「いいっていいってそんなことって、え？」

それから、鷹月はフードを深くかぶった。すると、上条はあー！と叫ぶ。

「お前、さっきの！」

「どうも、ありがとうございました」

ペコリ、と頭を下げると、上条はいやいやと首を振る。

「お前が飛び込んで来てくれなかったら間にあわなかったよ。こっちこそ、ありがとな」

「いえ。僕じゃ何もできなかった。お礼を言うのは僕の方ですよ」

あの人形が爆発した瞬間。

鷹月は爆風をまともに受ける場所に立っていた。本当なら無事で済むはずのない場所。それでも助かったのは、あの時、目の前にいる上条がいたからだった。

『よくやった』

そう耳に届いた瞬間、鷹月は衿を掴まれて後ろに転がされた。その時したたかに頭を打ったのは不運だったが、それを除けば、無傷というのは奇跡だった。しかし。

「でも、いったい何をしたんですか？ 高位能力者なんですか？」

それが、わからなかった。能力で壁を作ったのならわかる。しかし、あの爆発のあとにはそれらしきものは全くなかった。まさしく、爆発そのものが鷹月達を避けたようだった。

「いやいや、わたくしは高位能力者どころか、無能力者^{レベル0}でございますの

「じゃあ、どうやったっていうんですか？」

「お前、能力使えるか？」

「はい。少しなら」

鷹月は携帯のバッテリーを抜いて上条に差し出す。そのディスプレイがついているのを見て、上条はへえ、と呟いた。

「便利そうだな、それ。ビリビリとおんなじか」

「ビリビリ？」

「ああ、こっちの話。気にしないでくれ」

そう言うのと、上条は右手で鷹月の手に触れる。直後、何かが弾けるようなおと共に携帯のディスプレイが黒に染まった。

「あ、あれ？」

戸惑う鷹月をよそに、何事もなかったかのように上条はその手を離す。すると、再び携帯の電源が入った。

「ま、こういうこと。俺の右手は『イマジンプレイカー幻想殺し』つつってどんな能力も打ち消せるんだ」

「へええ。すごいじゃないですか！」

目を輝かせる鷹月。上条はそんなことねえよと言って笑うが、そんなに悪い気はしてないようだった。

一方その頃、初春は佐天と一緒に寮に向かっていた。

「大変だったねー。でも、ホント初春が無事でよかったよ。さっすが御坂さんだよねー」

「そうですね」

しかし、今初春の頭はずっと別のことを考えていた。

あの服。そして、能力。

自分がまだ風紀委員にもなっていない頃、黙って助けてくれた名前も知らないあの黒い少年。あれ以来、初春はあの少年を見かけた

ことはなかった。

でも、また助けに来てくれた。いや、もしかしたら、いつもそばにいて、いつも助けてくれていたのかもしれない。

そう考えると、とても嬉しかった。

「なーにニヤニヤしてんのかなー？」

「に、ニヤニヤなんかしてませんっ！」

慌てて気を引き締めるが、この友人はからかいの種を見つけたと意地の悪い笑みを浮かべている。

「あ！もしかして、助けてくれたのは御坂さんじゃなくて、男だった？それで惚れこんじゃったとか？」

「そっ、そんなわけないじゃないですか！」

「あっらーん初春ってば赤くなっちゃって、ああ、王子様どちらにいるのー、とか？やっだー初春ってばロマンチックー！かわいいー」

「佐天さーん、いいかげんにしないと怒りますよー」

ごめんごめんと未だに笑いながら謝る佐天に頬を膨らませながら、初春は、慌てて逃げた黒い少年……鷹月をどう問い詰めてやろうかと考え始めた。

「あー！初春またニヤニヤしてるー！」

「佐天さん！」

時間は、たっぷりある。いつも、いつでも望めば会えるのだから。明日でも、明後日でも。

上条と別れた鷹月は、寮でパソコンを開いていた。

鷹月が関わった二つの事件の犯人。そのどちらも、本来持っている能力を超えた能力を行使していた。それを可能にするものとして、鷹月はそれを調べていた。

『^{レベルアップ}幻想御手』。

しかしそう簡単に見つかるものでもなく、鷹月が手に入れた情報は、それがなにかしらの曲である、ということのみ。

「あー、疲れる」

普段パソコンなど使わない鷹月にとってまだ四時間しかやっていないにしても、それはかなりつらい作業だった。ばたんとパソコンの前に突っ伏す。

と、その直後になった携帯に驚いて、鷹月は慌ててはね起きる。ガタン！と思いつきマウスをはね飛ばしてしまったが、気にせず鷹月は携帯を開く。しかし、鷹月が電話に出た直後相手はその電話を切ってしまった。が。

「これは……！？」

着信履歴に表示されていた名前。

木山春生。

それは、かつて鷹月のクラスを担当した教師の名前。

そして、パソコンには、隠しページへのリンクが表示されていた。

再会（後書き）

えー、あー、うん。・・・ともかく、ようやく木山先生ご登場。名前だけだけど。

突然かかってきた電話。忘れることもできない過去と向き合う時が来たのか。

次回、密会。

密会

『久しぶりだな。よもや君から連絡を受けるとは、意外だったよ』

電話の向こうから聞こえてきた声。鷹月は何も言わずに聞く。

『それにしても、こんな夜更けに何の用かな？ 私はこれでも忙しい身でね』

「用があるのは、あなたじゃないんですか？」

『……なんのことかな？』

「まあ、いいです。ちょうど僕も、あなたに聞きたいことがありますから」

あくまでしらばっくれるつもりならそれでも構わない。鷹月は暗闇に光るディスプレイを見ながら言った。そこには、あるホームページが表示されていた。

「『レベルアップバー幻想御手』というものをご存じですか？」

『ああ。最近噂になっていようだ。私の方にも、その解析に協力してほしいと要請があったよ』

「そうですか。それで、そちらのご用はなんですか？」

『単刀直入に言おう。私に協力してくれないか？』

先ほどとは打って変わって積極的になった木山。しかし、それを怪訝に思うより前に、鷹月の中に出てきたのは、怒りだった。

「用はなかったのでは？ それに、先生に今更何を協力しろと言うんですか？」

その怒りをなるべく出さないように、鷹月は注意して言った。しかし、それに気付いてか気付かないでか、木山は言った。

『安心して構わない。君に無理難題を押し付ける気はないし、犠牲者を出すつもりもない』《……………》

「犠牲者を出すつもりはない……ね」

直後、鷹月はふざけるな！と怒鳴っていた。

「まさか、あなたが僕……いや、僕達にしたことを忘れてるんじゃないでしょうね！？今更どの口が犠牲者は出さないなんて言えるんだ！」

『君とは、少し話をする必要がありそうだな』

「僕の方から話すことはない」

『まあ、そう言わないでくれ。ちゃんと話しあう機会をくれてもいいだろう？そう……皆を集めて』

「……は？」

木山の言葉の意味を理解しかねていると、鷹月の携帯に一通のメールが届いた。

『待っているよ。皆と共にね』

その言葉を最後に、電話は切れる。しかし、鷹月は受話器を置こうとはしなかった。その目は大きく見開かれていた。

「まさか……皆って……」

あの日を最後に、会うことも叶わなかった。それがこんな形で転がり込んでくるとは。

鷹月はただ呆然と受話器を置いた。

「ここ、か」

その翌日の夜遅く、鷹月は例の黒い私服姿で周囲を見回した。ここはある病院の待合室。

昨夜、木山から送られて来たメールにあったのは、時間と場所。鷹月が時計を見るときもう間もなくその時間になるところだった。そして。

「待たせたようだね」

コツコツと靴を鳴らして暗闇の中から木山は現れた。

「こっちだ。ついて来てくれ」

それだけ言うと、木山は再び暗闇の中へと溶ける。鷹月は慌てて後を追った。

エレベーターに乗り、本来一般人は立ち入りを許されない地下へと潜る。

「何をする気だ」

「見せたいもの、そして、君に聞いてほしいことがある」

単調な電子音が目的の階についたことを知らせ、目の前の扉が開く。そして、その前に広がった光景に鷹月は目を疑った。

「明理……みんな……?」

よろよると前に進むが、途中でドンと窓ガラスにぶつかる。その窓ガラスに手をつけて、その先をじっと見つめる。

「ど、うして、こんな、ところ、に……?」

それは鷹月が予測していたものに違いなかった。しかし、いざ目の前にすると、鷹月の頭の中はまるで金槌で殴られたかのように真っ白になった。

「私ひとりでは、手に負えなかった」

窓ガラスに手をつく鷹月の肩に、手が置かれた。

「しかし、あのままにしておけば、またヤツらはこの子らを使って実験を行うだろう。だから、この子達をここに隠した。そして、この子達を回復させる為に、この子達がなぜこうなったのかを調べる為に、ツリーダイヤグラム樹形図の設計者の使用も申請した。しかし、ダメだった。だからこそ……」

そこで、木山は一度言葉を切った。そして、続けた。

「だからこそ、幻想御手を作った。樹形図の設計者と同等の能力スペックを持つ演算機器を作る為に」

「……何が言いたいんですか?」

「君の力を貸してほしい」

木山は鷹月の肩に乗せた手に力を込めて言った。

「……僕は、風紀委員ジャッジメントですよ」

「構わない。いや、だからこそ、と言ったところか。いや、何も幻想御手を広めてほしいというわけではない。いつもの通りに風紀委員の仕事をやってくれて構わない。ただ、君には緊急時に、私の身を守ってもらいたい。もっとも、無理強いはしない。能力なら、私も使えるからな」

「……なんで、ですか？」

「それは、能力を使えることに対する質問か？それとも、能力を使えるのに君を引き入れようとするこの対するものか？」

「後者の方です」

鷹月は淡々と答えた。

「理由はただ単に能力を使える私よりも君の方がそういうことに関してはすぐれているからだ。風紀委員として戦って来た君だ。戦いそれに関しては君の方が得意だろう？それに、君は彼女のことをとても大切にしていたからね」

「……わかり、ました」

鷹月は言った。じっとガラスの向こう側を見つめながら。

「そうか」

背中越しに木山の声が聞こえ、肩に置かれた手が離れる。

「すまない」

鷹月は木山がそう呟いていなくなっても、ただガラスの向こうを見続けた。その口の端から、赤いものが一筋流れた。

密会（後書き）

はいはい。原作と同じ幻想御手編ですが、木山サイドです。果たして違和感なくできるかどうか・・・。

支部に姿を現さなくなった鷹月を心配する初春。その時、鷹月は。次回。選んだ道は。

選んだ道は

「あれ？今日も来てないんですか？」

「それはこっちの台詞よ。初春さん、仲良いんでしょう？何か知らない？」

いつものように支部に顔を出した初春が先にいた固法に尋ねると、固法はお手上げというふうに見返す。しかし、初春にも心当たりはなく、首を振る。

「こんなこと初めてよ。病欠とかならともかく、あの鷹月くんが無断欠勤なんて」

「そうですね……」

連続虚空爆破事件以来、鷹月が姿を見せない日が続いた。いつも欠かさず姿を見せていただけに、意外にもその反動は大きかった。

「まったく、こんなかわいい彼女を心配させて何してるのかしらね」
「そっ、そんなじゃありませんよ！」

固法がからかうように言うと、初春は顔を真っ赤にする。それを見て、ふふっ、と固法は笑みをこぼした。

「それだけ元気があれば大丈夫ね。さ、今日も頑張るわよ。このところ大変なんだから、彼の分も初春さんには働いてもらうわよ」

その言葉を聞いて、元氣付けられた、ということに初春は気付き、頭を下げた。

「すみません」

「いいのいいの。誰だって初春さんみたいな立場になれば不安にもなるわよ」

「すみません」

もう一度固法に頭を下げると、初春はパソコンに向かう。

きつと、大丈夫。

そう自分に言い聞かせながら。

男は、逃げていた。

おかしい。

男はそう思いながらも、必死に路地裏を走る。

ソイツが現れたのは数分前のこと。仲間を呼び、レベルアップ幻想御手とかい

うものを使って、能力を手に入れたのもそれから少し前のことではない。

なのに。

（なんで……なんなんだアイツはっ！）

それで今まで自分達をコケにくれた能力者共を見返してやろう、と意気込んでいた矢先に、突然舞い込んだガキきたのは、黒いパーカー、黒いカーゴパンツの、全身黒づくめの少年だった。

当然、男達は突然の来訪者に驚いた。しかし、少年が能力者と知ると、男達はまず、ソイツで自分たちの能力を試すことにした。日頃能力者に対して鬱憤が溜まっていた彼らは迷わずそれに挑みかかっていったのだ。

のだったが、その試みは大外れだった。

あつという間に自分以外の男は倒され、一人で逃げる羽目になったのだ。

(いいかげん、撒いたか・・・?)

唯一救いだったのは、ここが自分の勝手知ったる溜まり場だったと言うことか。ケンカに自信はなくても、逃げることに關しては、ここでは自分が最も上手い。そんな自信が、男にはあった。そして、案の定、後ろを振り返っても誰かが追って来てるような気配はない。男は安堵して座り込む。

「へ、へへへ……」

まるで悪夢のようだ。アレは人じゃない。倒されてく仲間達を見ても、何をどうされたのかわからなかった。

しかし、それもここまで。

男は路地裏から見える狭い空を見上げながら呟いた。

「クソツたれ……」

鷹月は倒れた男をちらりと見やった。

もちろん、死んでいるわけではない。ただ、男の身体に電流を流しこんで気絶させただけだ。

木山と病院で話してから、鷹月は支部に顔も出さず一人肅々と幻想御手の使用者を狩っていた。もちろん、無差別に、というわけで

はない。掲示板に張られた犯行予告などを見て、危険な人物と判断した人物を狩っている。

支部に戻らないのは、決別意思表示。

「……次」

無表情で携帯を開くその姿は、過去の鷹月を知っている人物なら、戻ったと言うだろう。妹を助けられるかもしれない。そう思って風紀委員を……仲間を捨てたのに、何故か心は空っぽだ。

「いや……」

思考を消す。迷ってる暇はない。

鷹月は次の目標を探す。アンチスキル警備員への襲撃予告、という言葉を見つけた鷹月はすぐさまその書き込み主の居場所を調べる。もちろん、能力を使用したハッキングで。その時。

「——っ!!」

ふっと足場がなくなったような感覚に陥り、鷹月は慌ててビルの壁に手をつく。連日の移動、戦闘、情報入手と続けさまに能力を行使する鷹月は、身体的にも精神的にも疲労が溜まっていた。

けれど、ここで止まる訳にはいかない。

これは、自分に課した贖罪。自己満足だと言われてもしょうがない。そして、こんなことを繰り返したって許されることではない道を進むことを自分は選んだ。それは覆しようのない事実だ。でも、それでも。

鷹月は首を振ると、大通りへ飛び出す。

ただ一人、今も自分の良く知る場所で頑張っているであろう人物を気にかけて、そんな資格もないと嘲笑う。そんなことを繰り返し

て。

選んだ道は（後書き）

なんというか、心の中で思ってる事が結構な重さなのにやってる事の小さいことと言ったら・・・。

ネット上に流される挑発。明らかな人手不足の中、初春は覚悟を決める。今まで守られていた自分だから。その相手は、同級生。

クラスメイト
次回。同級生の少年。

感想待ってます。とても元気づけられるのでいただけたら嬉しいです。

同級生の少年

「固法先輩！」

パソコンを操作していた初春が、固法を呼ぶ。

「これ・・・なんですけど・・・」

「何よ・・・これ・・・」

初春が指さしたディスプレイに映る物を見て、固法は絶句する。そこには、支部からそれほど遠くない公園が映っていた。映っていたのだが、そこはすでに公園らしさのかけらもなかった。所々地面は抉れ、遊具は倒れたり、酷いものでは原形を留めていなかったりする物もあった。そして、その画面情報をテロップが流れる。

『止めてみる』

それは、明らかな挑発行為だった。

「警備員アンチスキルは何をしているの!？」

「そ、それが、ほとんどこの近くの警備員は出払っていて……」

「今の白井さんに任せるわけにもいかないし……こうなったら私が――」

固法が呟いた時、支部の電話が鳴り響く。固法が取ると、向こうから慌てたような声が響く。どうやら、こっちでも能力者が暴れているらしい。それでも、電話の向こうの状況を聞く限り、それほどものでもないようだ。それでも、固法はこんな時にと悔しげに唇を噛む。

「わかりました。今からそちらへ向かいます」

そう締めると固法は初春を振りかえる。

「私はこれから電話の方に行くけど……いい？絶対にそこに行こうなんて考えちゃ駄目よ」

固法はパソコンを指さして初春に言い聞かせる。

「多分警備員も向かってるわ。……どれくらいかかるかわからないけど、いいわね？絶対に白井さんみたいなこと考えちゃ駄目よ」

そこまで言うのと、固法は慌ただしく部屋から出て行った。

固法を見送ってから、初春はしばらく立ち尽くす。それから、もう一度パソコンの画面を見ると、初春も支部を出た。

「私だって……！」

白井に、御坂に、固法にも、鷹月にもいつも助けってもらってばかりだった。だから、自分だって。

初春はひた走った。

少年はつまらなさそうに自ら破壊した公園を見回した。これだけの破壊活動を行っても、警備員はおろか、ジャッジメント風紀委員さえ顔を現さない。

拍子抜けだ。

せっかく、ここまで吹き飛ばした公園をわざわざネットにまであ

げたというのに。

「もうちょい必要か？」

呟くと、少年は手に持った拳銃モデルガンを掲げた。その時。

「じ、風紀委員ジャッジメントです！大人しく投降してください！」

走って来たのだろう、息を切らした声が響いた。

少年はその手を下して声のした方を見、そして呟いた。

「へえ、お前が来たか」

「鷺谷……くん？」

鷺谷と呼ばれた少年は、笑みを浮かべる。その視線の先にいるのは、同級生の初春飾利だった。

「どう、して」

「どうして、ねえ」

初春の問いかけに、鷺谷はさらに笑みを深くした。

「まあ、単純に言えば——」

呟きながら、拳銃の銃口を初春に向ける。

「こういうこった」

刹那、その銃口から撃ちだされたのは、銃弾ではなく、光だった。放たれた光は初春の脚を掠めてその後ろの地面に突き刺さり、爆発

した。その爆発に巻き込まれ、初春は鷺谷の目の前に放り出される。

「わかったか？」

「う……」

鷺谷は初春に歩み寄ると、その手首を掴むと引っ張り上げた。

「まあ、お前に用は——」

ないと言おうとした時、銃声が響いた。

「その子を放せ！」

「おーおー、ずいぶん遅かったな」

銃を向けられてるというのに飄々とする鷺谷。実際、それは脅威にはならないのだから当然だが。しかし、そんなことにも気付かず、に警備員の男は銃を構え、引き金に指を掛けた。

「もう一度言う。その子を放すんだ。そして投降しろ」

「ほー……撃てんのか」

ぐいと初春を自分と銃口の間に入れる。ひゅ、と初春の呼吸が一瞬止まるのが聞こえた。

「お、お前!？」

「ほれ、撃ってみろよ。撃てねえのか?じゃあ——」

カチャリ、と初春の横から拳銃を向ける。鷺谷の銃からはためらいもなく光が迸った。その光は警備員の後ろにある車を屠って、爆発させた。駆け付けた警備員のほとんどがその爆発に巻き込まれる

のを見て初春は呟いた。

「ひどい……」

「ひでえなあ」

涙を浮かべる初春を横目で見て、鷺谷は呟いた。

「じゃあ、なんでこんなことしたんですか！」

「さてなあ？ 話したところで許されるような理由でもない」

そう言うと、鷺谷は先ほど倒した警備員の方を見る。いや、正確にはそこに再び集まりつつある警備員を。

そして、銃口を向けられた瞬間、再び撃つ。正確に車を撃ち抜き、その誘爆に警備員を巻き込む。

ふと見ると、初春は泣いていた。多分、怖さじゃない。悔しいのだろう。その気持ちは痛いほど分かった。しかし、だからといって放すほど鷺谷は優しくはなかった。

（悪いな）

鷺谷は次の襲撃に備える。しかし、次の攻撃は、銃撃ではなかった。ちょうど鷺谷の真上に影が落ちる。

「つく!？」

慌てて初春を放して下がると、鷺谷と初春の間に鋭い蹴りが入る。その影は着地した直後にそのまま体をバネのようにして肘で顎を狙って来る。体を反らして避けたが、直後腹部に衝撃を受け、地面に倒れ込んだ。

「げほっ！ テメエは」

制服ではなく、それは黒いパーカー、黒いカーゴパンツを着、フ
ードを深くかぶってはいる。しかし、一瞬だけ見えた顔は見覚えが
あった。

「鷹月、か」

同級生の少年（後書き）

ん、なんだか最近いくら書きなおしてみてもしっくり来なかったり。変なところあったら教えていただけると助かります。誤字とか、脱字とか。

二人の共通項

「大丈夫？」

「は、はい……でも……アンチスキル警備員の方達が……」

再び目に涙を溜める初春の頭に鷹月は手を置いた。

「大丈夫。初春さんのせいじゃないよ」

「でも、私がもつとしっかりしていれば——」

ほほ笑みながら、鷹月は花飾りのついた頭を撫でる。

「よく、頑張ったね」

ついに涙を流し始めた初春を連れ、鷹月は再び現れた警備員の所へ歩いていく。

「……遅くなってすまなかった」

車から降りて、申し訳なさそうに謝る黄泉川に向かって首を振る。

「いえ。この所忙しいから仕方ないです。それより……」

鷹月は腕の中の初春に目を向けた。

「この子を安全な所へお願いできますか？」

「それはお前もじゃん。鷹月」

鷹月は黙って首を振ると、頭を下げた。

「お願いします」

「しかしな――」

言いかけたが、ため息をつくとき、黄泉川は「わかった」と言った。

「でも、この子を引き取ってもらったらすぐ戻って来る。それまで、無茶はするなよ？」

「わかってます」

そう笑って言うとき、鷹月は車から離れる。

「鷹月くん！」

その途中で呼び止められ、鷹月が振り向くと、初春がまだ目をはらしながらもこちらを見据えていた。

「鷺谷くんの、銃に気を付けてください！」

「ありがとう！」

「いいな！無理はするなよ！」

黄泉川の言葉を最後に、車は走り出す。それを見送ってから、鷹月は鷺谷を振り返った。

「おいおい、そんな怖い顔しなくたっていいだろ？せっかく待ってやっただから」

「どうして、初春さんを？」

「ちようどよかったからな。銃を向けられて、何もしくちや撃たれちまう」

鷲谷の答えに「そう」とだけ呟くと、鷹月はしゃがみこむ。

「充分だ」

同時に、鷹月は地面を蹴った。鷲谷が銃口を向けるのが視界に入
った。

「空中でどう避けようってんだ？」

問いかけに対して、鷹月は無理矢理体を捻った。

「そんなんで避けられると思うな！」

鷲谷の銃から放たれた光は寸分たがうことなくその黒いパーカー
を撃ち抜いた。

「場数が違うんだ。君とは、戦ってきた相手も、状況も何もかも」

パーカーを四に鷲谷の目の前に着地して、距離を取ろうとする鷲
谷に迫った鷹月は目前に現れた拳銃を掴む。

「これは没収させてもらうよ」

そして、顎を狙って足を振り上げる。

「くっ！」

先ほどの攻撃を警戒してか、半歩引いた鷲谷は腹の前に腕を持っ
てくる。

しかし、つま先をかわした鷲谷を襲うのは、跳ね上がったはずの

踵。脳天に走った衝撃に耐えきれずにふらつく鷺谷を、鷹月は容赦なく追撃する。

「ぐうっ!？」

落ちて来た額に頭突き。

「があっ!？」

のけぞったその胸ぐらを左手で掴み、引き寄せながら右の拳を鷺谷の顔をぶん殴ると鷺谷は地面に転がった。

「ッハ——!」

鷹月は息を切らしながら、倒れ込んだ鷺谷を睨みつける。そして、まるで言い聞かせるように呟く。

「なんでこんなことをしたのかは聞かない。本当は、風紀委員としてはここは問いたさなくちゃいけない所なんだろうけど、今の僕は、腕章を着けてない」

「ハア?なら、なんでテメエが出てくんだよ」

「守りたい、大切なものを傷つけられた。だから、僕は君を許さない」

「それだけか？」

「それ以外に、理由は必要ない。君にはわからないよ。その重さは」

鷹月は未だに起き上がらずにいる鷺谷を睨みつけながら答えた。

さすがに今のは響いた。頭はふらふらするし身体もまともに言うことを聞かない。

「うる、せえよ」

しかし、鷺谷は立ち上がった。

「大切なモン、ね」

一緒に笑った仲間。認めてくれた人。自分でいられる居場所。でも、それはあっけなく奪われた。あの人達となら何でもできる。そう思っていたけれど、自分にできることはなくて。警備員にも、風紀委員にも助けられることもなく。だから、俺は――！

「デメエに、何がわかる……」

「わかりやしないさ。人が何を失ったかを知ったところで、その人の苦しみがわかるはずない」

「ハッ、言うね」

なるほど、と鷺谷は思った。

コイツも、昔大切な何かを失くしたのだろう。でなければ、こんなに言葉に重みがある訳がない。

鷺谷は、腰に差してあった予備の銃を捨てた。

「鷺谷……」

「鷺谷洸だ。鷹月暁。もうコイツは必要ねえ」

鷺谷は笑った。コイツは、強い。自分にはない強さを持っている。

能力とか、そんなものじゃない、強さを。だから、拳を握って立ち向かわなくてはならない。勝てないだろう。でも、コイツに負けることで、コイツの強さが少しでもわかるかもしれないなら。……今度こそ、俺の手で。

「いくぞおおおおっ!!」

叫びながら、鷺谷は鷹月に向かって走り出す。能力は、もう使わない。それに応じるかのように、鷹月も走りだした。

きつといつか、コイツと同じ強さを手に入りたい。いや、手に入る。そして、今度は、ちゃんと……!

彼は、何を求めているのだろうか?

彼は、何を守りたかったのだろうか?

鷹月はそのまま振りかぶった《……》拳を下ろす。幻想^{レベル}アッパの副作用で意識を失ったのだろう。鷺谷は鷹月の目の前で倒れていた。

「鷹月!」

「黄泉川先生」

黄泉川は倒れた鷺谷に目を向ける。

「こいつは?」

「……僕が手を出す前に」

「またか」

ため息と共に黄泉川が呟く。

「どこの誰だか知らないけれど、ずいぶんと下らないことやってくれるじゃん」

鷹月はなにも返せず、ただ鷺谷を見つめる。

その時、ぐにやりと視界が歪んで、鷹月はその場に座り込んだ。どうやら、予想以上に体に疲れがたまっていたようだ、と鷹月は苦笑する。

「大丈夫か!？」

「い、いえ、大丈夫です。寮に帰ってもう休もうと思います」

「なら、送るじゃんよ」

「黄泉川先生はこの後始末が残ってるでしょう。そんな忙しい身にわざわざ頼みこむほど僕は子供じゃない」

「しかしな」

黄泉川を手で制しながら、鷹月はよろよろと立ち上がる。なんとかきちんと大丈夫と言う所を見せたいのだが、体は言うことを聞かない。それどころか、再び地面に膝をつく。

「鷹月!」

「大丈夫、で……」

鷹月の意識はそこで途切れた。

二人の共通項（後書き）

えー、まあ久々の戦闘^{ケンカ}だったわけですが、短くて・・・。
感想とかその他もろもろ待ってます。

不器用な覚悟（前書き）

最近というかずいぶん更新が遅れててすみません。

不器用な覚悟

「う……?」

体に残る気だるさを感じながら、鷹月はゆっくりと目を開いた。まず目に入ったのは白い天井。しかし、その視線を横に向けると、そこは知らない部屋だった。自分はどこかのソファに寝ているらしい。

（ここは、どこだろう……?）

「気がついたか」

聞き慣れた声を耳にして、鷹月は慌てて声のした方を振り向いた。

「木山先生」

「ここは私の研究室だ。安心してくれていい。あの警備員に話は付けておいた。知り合いだと言ったら渡してくれたよ。もつとも、信用させる証拠をいくつか提示する必要はあったがな」

「つけて、いたんですか？」

「まさか。偶然だよ」

「……まあ、そういうことにしておきましょうか」

肩をすくめて言う木山を見て、鷹月はため息と共に呟いた。

「で、なんの用なんですか？」

「例のネットワークが使用可能なまで広がった」

「そう、ですか……」

鷹月は複雑な心境になった。これでかつての同級生達……妹を治

せるという喜びとそれが鷺谷のような人達の犠牲の元に成り立っているという事実。そして、初春や白井、佐天や御坂を騙しているという罪悪感が、鷹月の中でせめぎ合う。

「しかし、今はまだ使わない」

木山の言葉に、鷹月は顔を上げた。

「当たり前だろう？今はまだ使用可能な最低限数を越えたというだけで、今下手に使えば、その脳を使用された子供達に膨大な負担がかかるかもしれない。だから、事が発覚するギリギリまで使用しない。私とて、子供達を傷つけたくてやっているわけではないのだからな」

「そう、ですか」

「まあ、今日はここでゆっくりと休むことだ」

「はあ——は？」

鷹月は耳を疑った。

「ここで、ですか？」

「そう言ったはずだが？」

「なんでですか？」

はあ、と木山が露骨にため息をついたので、鷹月は少々苛立った。

「僕はもう一人で大丈夫です。先生に面倒を見られなくても——」

「それで昨日倒れたのは誰だったかな」

ぐ、と鷹月は何も言えなくなる。

「まあ、私とて人の子だ。教え子が今までどんな生活をしてきたのか、聞きたいと思ってでも不思議ではないだろう？」

「それは、そうですね——」

「では、さっそく聞こうか」

木山は鷹月の前にコーヒーを置くとその向かい側に座る。

「あの花飾りの子とはいったいどんな関係なんだ？ 初春とか言ったか」

「ぶっふっ!？」

予想だにしない質問に、鷹月は口に含んだコーヒーでむせこんだ。

「子供かあんたは!？」

「ふむ。元教え子に彼女がいるというのは喜ぶべきだと思ったのだが」

「それじゃ教師と言うより保護者ですから！ 先生が考えているような関係じゃないですよ！」

一息に言ってしまったから、鷹月は息を整える。

「そうか。では、なぜ彼女にこだわる？」

「はい？」

「君は寝言で謝っていたよ。しきりに、特に、彼女に対してね」

「は!?! いえ、えっと、ええ!？」

「……面白いな、君は」

ふっと笑った木山を見て、遊ばれたと知った鷹月はため息交じりに呟く。

「先生、こんな人でしたっけ？」

「いや、久しぶりに昔を思い出して嬉しくなってるな。なにせ、君は今、私のたった一人の教え子なのだからな」

木山の言葉は、とても重かった。

自分は今まで誤解していたのだ。木山は、加害者などではなく、被害者なのだ。自らが育てた生徒は、鷹月たった一人を残して目を覚ますことのない身体になってしまった。その上、自分はその実験を手伝っていた。果たして、木山はどれほどの罪悪感を背負ったのだろう。

「すみません」

気付けば、口を衝いて出たのは謝罪の言葉。

「僕は、今まであなたが憎かった。憎くて憎くてたまらなかった」

「それは仕方のないことだろう。君の妹を実験台にしてしまったのは、事実だからな」

「でも、あなたはきちんとそれを悔やんで、みんなを治そうとしてくれてるじゃないですか」

鷹月は木山の目を見て言葉を紡ぐ。小学校の頃見たものと変わらない目。

「……まだ早いな。私を許そうというのなら、彼らを助けだしてやらだ」

木山は立ち上がると、空になった自分のコーヒーカップに新たにコーヒーを入れる。

「それを言うのなら、私とて君に謝らなければいけない」

戻って来た木山は座るなりそう呟く。

「先ほど言ったことだが、君が謝っていたというのは本当だ。誰に對してか、まではわからなかったが……無理をすることはないんだ。降りたければ、降りてくれても構わない」

「大丈夫です」

鷹月はただそれだけ答えた。

「彼女達を、敵に回すことになるぞ」

「それは、覚悟の上です」

鷹月が言いきると、木山は再び口元に笑みを浮かべた。

「……不器用だな、君は」

「先生こそ」

自分は、妹を助ける。ただ、それだけの為動く。それを阻むなら――。

（戦うさ。それがたとえ、彼女であったとしても）

彼女は、妹の代わりに過ぎない。それ以上の何者でもない。鷹月は拳を握った。

不器用な覚悟（後書き）

そろそろレベルアップ編も終わりかな。

今更だけど木山先生とか原作キャラのキャラが変になってなければいいんですけど。少々というかかなり不安です。感想とかいただけると助かります。

戻れない道（前書き）

同じ内容を二回投稿してました。すいません。

戻れない道

「うーん、やっぱり疲れちゃってそのまま出るんだなあ……」

一日のわずかな休憩を挟んだ鷹月はぼんやりと呟いた。

今、鷹月は歩いて木山の研究所に向かっていた。その肩には急ぐ時に使うローラースケートを入れたバッグが掛けられている。

先日、幻想御手のネットワークが使用できる状態まで構築されたことから、いつでも行動を起こせるように鷹月はなるべく木山の研究所にすることにした。それに基づいての行動だった。

ふと、鷹月は周囲を見回す。

最近の流行について笑いながら友人と話す同年代の女の子、取りとめのない話にお互いとおつきあう自分よりいくつか年上そうな青年、園児を率いる保育士――。

ほほえましいと思うと同時に、うらやましいとも思う。自分はきつともうあのような日常に戻れないと思うから。仮に妹を取り戻せたとして、自分はその隣にすることはできるだろうか？ そんな資格はあるのだろうか？ そして、また、少し前のように皆と笑って歩けるだろうか？

そんなことを、今更考える自分がおかしくて、鷹月は嘲るように笑った。

無理に決まっている。何人もの人間を傷つけておいて、虫が良すぎるとは思わないのか。わかっている。それでも、この道を選んだのは自分なのだ。

鷹月は、ポケットで震える携帯を取り出す。

「少々予定が狂った。メールにある場所で合流しよう」
「わかりました」

鷹月はポケットに携帯を無造作に突っ込むと、袋の中のスケートを取り出して、靴に取り付けた。

これから先はもう本当に進んだら戻れない。

「な、なんで？」

初春は混乱していた。

今日突然起きたことが多すぎて、または突拍子すぎて、頭が追いつかない。

始まりは、御坂の助言からだった。

彼女の助言によって、幻想御手の解析が一気に進むかもしれないかだったのに。そのことを木山に伝えて、研究所に赴く途中だった。今までずっと連絡がつかなかった、佐天からの電話。けれど、いつもの彼女とはとても様子が違っていて、慌てて部屋に駆けつけてみれば佐天は暗い部屋の中で倒れていた。幻想御手を使ったのだということは、電話で聞かされていたから、その副作用だということはすぐにわかった。

けれど、悲しみくれる暇もなかった。

傷心のまま研究所に赴いた初春は木山の部屋で信じられないモノを目にする。共感性に関するレポート。それが、その引き出しの中に大量に入っていた。木山が、共感性に気付いたのは今朝のはず。それなのに、それだけの資料を並べられるとは思えない。それは、つまり……。そのことに気付いた時、初春は木山の声をすぐ後ろに聞いた。

そして、今に至る。車に乗せられ、着いたのはとある小さな公園だった。

そこで待っていた人影に初春は自分の目を疑った。

「鷹月くんが、どうして？」

「……彼女がどうしてここにいるんですか？」

「いや、人を部屋に入れることなどめったにないからね。少々不用心が過ぎたようだ」

「はあ……」

呆然として尋ねた初春だったが、目の前の二人はそれを気にすることもなく、むしろ逆に自分がこの場にいるのが不自然とも思えるほど自然に会話していて、それが初春の困惑をさらに深める。

「まあ、ここにいても意味がありませんし、とりあえず——つて先生の車二人乗りじゃないですか」

「まあ、そうだな。君達二人で助手席に乗ってもらうことになる。君が彼女を膝に乗せるか——」

「却下です」

「もしくは、彼女の膝に君が乗るか……」

「……僕が先生の車を追う、というの？」

「それはダメだな。目立つ」

「はあ、仕方ない、か」

ため息をついてこちらを振り向いた鷹月を見て、初春は一步後ろに引いた。

「ど、どうということなんですか!？」

「どうって言われてもね。とりあえず、来てもらおう、と言うしかないかな」

そう言った鷹月の顔を見ることができずに、初春はなすがままに

車に乗せられた。

戻れない道（後書き）

前書きでも書きましたが本当にすいませんでした。

たった一つの希望

「——それで、彼女にその資料を見られた、と。何をやってるんですか」

「いや、さっきも言ったが、あの部屋に他人を入れることなどほとんどないものでね」

「それにしたってきちんと引き出しを閉めるとか、そういうのは常識というか、当たり前のことでしょう」

「面目ない、な」

自分の後ろと、その横の運転席で交わされる会話は、とても親しみが込められるように思えて、初春は唇を噛む。

「ところで以前から気になっていたのだが、君のその頭の花は何なんだい？君の能力に関係があるのかな？」

「お答えする義務はありません」

言うてから、ちらりと背後を窺う。今自分を膝の上に乗せている鷹月は、木山が初春に話題を振ってから、顔を外に向けていた。いや、もしかすると車に乗ってからずっとこの調子なのかもしれないかった。

「君からも、彼女に何か言ってくれないか？」

「僕は興味がありませんので」

「つれないな」

じっと窓の外を見つめたまま返す鷹月の反応に、初春は気を落とす。今までの反応から見るに、鷹月はやっぱり自主的に木山の協力をしているようだ。

「そんなことより、幻想御手^{レベルアップ}って何なんですか？ どうしてこんなことしたんですか？ 眠った人達はどうなるんですか？」

そんな気持ちを振り払う為、初春は一気に木山を捲くし立てる。

「矢継ぎ早だな。こっちの質問には答えてくれないのに」

「誰かの能力を引き上げてぬか喜びさせて、何がそんなに面白いんですか！？ 佐天さんだって……」

そう呟いた時、後ろの鷹月がピクンと動いた気がした。

「そうか、君は知らないんだったな。彼女の友人が、倒れたそうだ」

まるで鷹月の心と呼んだように、木山が呟く。背中の鷹月は、少し間をおいて「そうですか」と呟いた。

「ともかく、私が君の思っている通りの考えを持って動いているとは思わないことだ。私の——いや、我々の目的はもっと大きなものだ。我々の目的は、演算装置だ」

「演算装置？」

初春は首を傾げる。人の能力の強さ^{レベル}を上げる幻想御手と演算装置の関係がよく掴めない。そんな初春の疑問を感じたのか、珍しく鷹月が喋った。

「幻想御手は、僕らが無意識に発しているA I M拡散力場を媒体にしてネットワークを構築、そのネットワークを使って複数の脳に処理を割り振ることで高度な演算を可能にする——つまりところ、人間で能力^{スペック}の高い演算装置を作るためのものだった」

「どうして！」

初春にはわからなかった。学園都市には樹形図ツリーダイアグラムの設計者というだけでなく高性能な演算装置があるのに。

「あるシュミレーションを行うために、樹形図の設計者の使用申請をしたんだが、どういうわけか却下されてね。代わりになる演算装置が必要だった」

「そんなことのために能力者を！？」

「一万人ほど集まった。充分代わりを果たしてくれるはずだ」

初春は息をのむ。それを察せられたか、鷹月が言った。

「僕らは、少しの間、みんなの脳を借りる——誰も犠牲になっていない、とは言わないけど、少なくともこの事件による後遺症は残さない。僕らの目的は、あくまでシュミレーションなんだ。その為に、僕はできる範囲でここ数日動いていた。行動するのはかなり遅くなってしまったから、完全に防げたわけじゃないけど」

「どういうことですか？」

「ただ能力を上げるにも、いろんな考え方をする人間がいるっていうことだよ。無能力者や低位の能力者の中には、現状に不満を持っている人もいる。そういった人達が人を傷つけようとするのを止めるのが、僕の役割だったんだ」

「別にそんなことをやれと言ったわけではないのだがな。そんな君の真面目さには、少々呆れさせられた——と、そうだ。コレを君に預けておこう」

そう言って差し出された木山の手には、音楽プレーヤーとメモリーチップ。

「幻想御手をアンインストールするプログラムだ。コレを君に預ける」

「え!？」

驚きを隠せない初春だったが、そんなことを気にもかけず、木山は淡々と続けた。

「後遺症はない。すべて元に戻る」

「信用できません。臨床研究が十分でないものを安全だと言われても、気休めにもならないじゃないですか!」

「……手厳しいな」

木山が笑みを浮かべながらそう言った直後、車のカーナビが音を発した。

「早いですね。もう踏み込んできましたようです」

「そうだな。別ルートで辿り着いたか」

そう言うと、木山は、初春の手にあるものを見る。

「所定の手続きを踏まずに機材を起動させるとセキュリティが作動するようになっていた。これで幻想御手に関するデータは全て失われた。その使用者を救えるのは君の持つそれだけだ。大切にしまえ」

初春は手渡されたそれを握りしめる。
佐天達を救う、たった一つの希望を。

たった一つの希望（後書き）

ずいぶんと遅くなってしまいましたがプロローグ抜いて次で20話目。

そういえばもうすぐとある新約発売。楽しみです。今から。

とりあえず、この話は非常に困りました。木山先生、どうして2人乗りの車なんて買ったんですか・・・。

決別の告白

幻想御手レベルアップに関する情報が失われてすぐ。木山は唐突に車を止めた。その前には、警備ロボを従えた警備員アンチスキルの姿。どうやら、先回りされていたらしい。

「木山春生だな」

「警備員か。上からの命令があった時だけは動くのが速いな」

「仕方ないですよ。それが本来のあり方ですよ。治安維持組織なんて。人助けとかやっても勝手な行動と上から取られれば始末書とか面倒な物が待ってますし、かといっていざって時に遅れても同じですから」

ぼやく木山にあわせて、鷹月は呆れ顔で呟く。何分始末書がデスクワークの相棒と化しているので、その苦労は痛いほどわかった。

「幻想御手頒布の被疑者で拘留する。ただちに降車せよ」

「どうするんです？ 年貢の納め時みたいですよ」

しかし、初春の言葉にも、木山は不敵に笑った。

「僕が出ましようか？」

「その必要はない。幻想御手は、人間の脳を使った演算機器を作り出すためのプログラムだ。だが同時に、使用者にある副産物をもたらしてくれるんだよ」

「副産物？」

「面白いものを見せてやろう」

鷹月の呟きを気にすることなく、木山は前の警備員のバリケ―

ドを見つめながら呟いた。

「両手を頭の後ろで組んで、その場でうつぶせになれ」

黄泉川の指示に、素直に従う木山を見やる。

「おーおー。やっこさん、ずいぶん素直に聞くな」

「ふざけないでくださいよ！——人質の少女は無事です」

双眼鏡を覗く鉄装に櫓を飛ばされ、首をすくめた男は、ふとその車の中を見る。

（ここからじゃちょーっと見えにくいな）

仕方なく、男は自前の小銃の照準器スコープで覗く。すると、直後にゴン！と頭頂部に衝撃が走った。

「いったいなあもう」

「子供に銃向けるのはあたしの流儀に反するじゃん！今銃口向けるのはそっちじゃねえだろ！つか、そもそもなんであんたはいつもウチらと違う銃使ってんじゃん！」

「いーだろーがよー。どーせ使うの俺なんだし。つかシグとか手に馴染んでねーモン使えるか！俺はM4がいーの！」

「それ違うじゃんよ！」

「5.56mmじゃなくって、せっかく未来都市なんだから6.8mmぐらい使ったっていーだろ！じゃなくて！情報じゃ人質は一人

のはずだろ？花飾りの女の子の後ろにもう一人男の子がいたんだが」
「なに！？」

黄泉川は慌てて鉄装から双眼鏡をもぎ取ると、信じられないモノを見たように呟いた。

「鷹月が、なんで、あそこに……？」

「黄泉川さん！」

「か、確保じゃん！」

警備員の一人に促され、黄泉川は慌てて声を上げる。それと同時に、じりじりと警備員達は包囲網を縮めていく。

と、その時、包囲網の一人が銃口をずらしたのに男は気付いた。

「そこ！何やってる！」

叫ぶと同時に構えて、撃つ。放った銃弾はその防弾チョッキに当たって銃口をずらした一人を吹っ飛ばした。同時に、再び後頭部に一撃拳をくらう歯目になったが。

「何やってんのはオマエじゃん！」

「何してる！さっさと散らばれ！いい的になってるぞ！」

黄泉川を気にせず、男は叫んだ。刹那、包囲網の一角がまとめて吹き飛ばされた。

「バカな！能力者だと！？」

「あーあ、これなら中東でテロリスト相手にしてた方が楽だったかもなあ」

「そんなこと言ってる場合ですか！？」

「な、なんですか……これ……能力は一人に一つしか使えないはずじゃ」

「詳しいことが分かる訳じゃないけど、今の先生は、幾つもの人の脳を扱っているんだ。それこそ、一万人の人間の脳をね。別に複数の能力が使えたって不思議じゃないさ」

そう言いながら、鷹月は車から降りる。

「ど、どこ行くんですか!？」

「その前に……ちょっと手を出して」

身を乗り出して尋ねる初春の問いにも答えず、鷹月は初春にそう促した。しぶしぶ差し出された手を見てから、少し逡巡した後、初春の手錠に鍵を差し入れ、回した。

カチャンと音を立てて、手錠が地面に落ちる。

「鷹月くん——」

「君は逃げて。ここにいたら、危ないから」

「逃げるなら、鷹月くんも一緒です!」

「僕は——先生を助けなきゃ」

鷹月は、俯いたままそう言った。

「どうしてですか!？」

「僕には、助けなきゃいけない人がいるから、だから」

齒を噛みしめて、顔を上げる。

「行くんだ。でないと、僕は君を傷つけなきゃいけないかもしれない」

「どうしてですか!？」

鷹月は悩んだ。この一言は、残酷かもしれない。でも、言わなきゃ彼女が行かないかもしれない。

「……君は、彼女の代わりだった。僕は——君を守りたかったわけじゃない」

「そんな——」

呆然とする初春を見て、鷹月は仕方なく初春の首に手を当てた。直後、ビクッと初春の身体が跳ねた。鷹月の能力は発電能力^{エレクトロマスタ・レベル}。強さは大したことないかもしれないが、それでも、スタンガンの真似事くらいならできる。

「あ——」

カクンと車から落ちそうになる初春の身体を受け止めて、再び車の中に戻す。路上に放置しておくくらいなら、車の中にいた方が安全だろう。ましてやこれから行われる事を考えたらなおさらだ。

気を失った初春の目から流れた物を見て、ごめん、と呟くと車のドアを閉めた。

決別の告白（後書き）

やっとここまで・・・。

正直どれくらい読んでもらえてるのかわかりませんが、何か感想いただけるとやっぱり助かります。

ちゃっかり警備員にオリキャラが混じってますがなんでかっていうのは今後の展開にちよろっと必要だったんです。自由に動かせる人材が。

頂点との戦い

「先生」

「ああ。既にあらかた片付いてしまったが——どうする？」

鷹月が隣に立つと、木山は自らが作りだした惨状を見ながら言う。

「どうすると言われても、これじゃあね……まだ動ける人もいるでしょうけど」

鷹月も顔色を変えずに返す。あの黄泉川も来ているのだからそれは確実だろう。そう簡単にくたばる人じゃないと鷹月は今までの付き合いから思った。

「結論から言えば、ここにいても仕方がない。進むべきだと思いきすけど」

「それもそうだな」

木山が首肯したのを見て車へ振り向いたその時、鷹月の視線に入った者がいた。

「アンタ……これはいったいどういうことなの？」

茶髪の髪に名門常盤台の制服。

「どうしてアンタがここにいんのよ」

鷹月の知り合いでは、最も強い能力者。

「答えなさい！鷹月！」

常盤台——いや、学園都市が誇る、超能力者^{レベル5}にして、鷹月達
エレクトロマスタ
発電能力者の頂点、『超電磁砲』。
御坂美琴。

「久しぶりだね、御坂さん。こんな所で会うなんて、奇遇だね」

鷹月は、御坂の威勢をもっともせず返事をする。一方、御坂は拳を握って怒鳴る。

「アンタねえ……バカにしてんじゃないわよ！初春さんはどこ！」
「彼女なら、車の中で寝てるもらってるよ。心配しなくても、ただ眠ってもらってるだけだ。外に出てきてもらっちゃうと、危ないからね」

そう言うのと、御坂は言い方が気に入らなかったのか眉をさらにひそめた。しかし、そんな御坂を気にすることもなく、鷹月は言葉を紡いだ。

「ところで、何か用？僕は忙しいんだ。手短に終わらせてほしいんだけど」

「僕ら……そう。アンタは自分が何をしてるか、隣にいる木山が何を
をしたのかってのもわかってるってわけ」

御坂の前髪からパチパチと電流が漏れ出す。しかし鷹月は淡々と告げた。

「木山先生が幻想御手^{レベルアップ}を作った張本人って事なら知ってるよ」

刹那、激しい稲妻が鷹月に向かって放たれた。光の速度で迫ったそれに、鷹月の視界は真っ白く塗りつぶされる。しかし、鷹月はさつきと同じようにその場に立っていた。

「なめない方がいいよ」

鷹月は告げる。

鷹月は直に触れた物にしか電気を流せない。発電量だってそれなりだ。そんな鷹月が異能力者^{レベル2}になれたのは、能力を使用する際の演算能力が高かったからだ。でなければ、そもそも自分の筋肉に電流を流してドーピングすることなどできるわけがない。そして、そんなことを繰り返してきた鷹月が、外側から襲いかかった電流を地面に逃がすことなど、他愛のないことでしかない。

鷹月は後ろを一瞥した。

「木山先生」

「仕方がないな」

木山が呟いた瞬間、木山を中心に鷹月、御坂を巻き込んで高速道路が崩壊する。鷹月は木山の助けを借りて降り立つ。

「ありがとうございます」

「それはどうも。しかし、なんとか情けなくはないのか？」

「そんなこと言っただって無理なものは無理なんです。あんなクモミたいなことできませんよ」

「誰がクモだっ！」

そんな声と共に再び上から電撃が鷹月を襲う。しかし、直撃しても感電するどころか鷹月は平然と立っていた。

「なるほどね。電撃はやっぱ効かないみたいね」

「じゃあ、どうするの？」

「こうすんのよ！」

地面に降り立った御坂が手を振り上げると、ズザザザと不気味な音を立てて黒い砂が集まってゆく。

「砂鉄……なるほど、これはちょっとまずいかもしれない」

「手伝おうか？」

「けど、まだ何とか出来るレベルだ」

咄くと鷹月は飛び出す。同時に御坂の手元の砂鉄が鞭のようになる。それを見ても、鷹月は止まらない。鞭ならば避けられる。鷹月が目で追える限り、その攻撃は当たることはない。

本来、物を見てから身体を動かす際には時差^{ラグ}が起こる。その過程に目から脳へ、脳から筋肉へという電気信号を伝えて動かしているからだ。しかし、鷹月はその信号を操ることができる。もちろん、それは速さも例外ではない。つまるところ、鷹月はまさに見てすぐに反応するという芸当が可能なのだ。もっとも、別に物事がゆっくり見えるわけではないので限界はあるが。

「なっ!？」

驚愕に見開かれた御坂の目を見ながら、鷹月は御坂の背後に回り込む。

「えっ!？」

そして、その後頭部に手刀を叩き込み、倒れこむ御坂を支える。まさに電光石火の早業だった。

「終わったかい？」

「ええ」

確かに急所をついた。しばらくは起きないだろう。しかし、そう思った刹那。

「——この様子じゃ、初春さんも無事そうね」

「っ!？」

響いた声に慌てて御坂を見下ろすと、御坂は鷹月の腕の中で笑っていた。

「たしかにそれなりの電気を操ることはできるみたいだけど——
——甘いよ、アンタは」

慌てて鷹月は御坂を突き飛ばそうとするが御坂に抱きつかれて果たせなくなる。

「くっ!？」

「私の本気、ぜんりよくなめんじゃないわよーっ!」

御坂が叫ぶ。同時に、電撃の閃光か、それともショックか。いずれにせよ、鷹月の視界は真っ白に染まった。

頂点との戦い（後書き）

どうだったでしょうか？VS御坂。
幻想御手の話もあと少しです。

進歩（まよい）

「——つ——き……くん？」
「う——」

ぼんやりと声が聞こえて、鷹月はようやくおぼろげながらも意識を取り戻す。後頭部に伝わる感触からすると、どうやら自分は膝枕をされているらしい。が、視界はまだぼんやりしていて誰かまではわからない。

「だ、れ？」

まさか木山ではないだろう。御坂という線もまずない。なにせ敵として戦って彼女に負けたからこの状況になっているのだ。

では、誰が？

次第に視界も晴れてきて、その答えも浮かんでくるに連れて鷹月は驚いた。

「——どうして？」
「えっ？」

咄嗟に口をついて出てきた言葉だったのだが、どうやらその相手には伝わらなかったらしい。

「僕は君を裏切ったんだよ？初春さん」
「はい。そうですね」

あっさりと言葉を返されて言葉に詰まる。意図が全く読めない。

「その、恨むとか、憎い——みたいには思わないの？」
「それは……でも、それよりもずっとずっと助けてもらってたって言う感謝の方が強いです」

笑顔で言い切った初春の顔が眩しくて、鷹月は何も言えなくなつた。

「ははは、君の負けだよ。いや、私達はもう負けた」
「そーね」

突然響いた声に鷹月はぎょつとして振り返った。

「先生！？それに、御坂さん！？」
「すまない。邪魔をしたな」
「ここにいない方が良かったかしらねー」
「へ？」

ニヤニヤと笑う御坂の言うことの意味がわからず、きょとんとしている和不意に視界に逆さまになった初春の顔が映った。

「うわああああああ！？」
「きゃあ！？」

叫びながら、ガバツと身体を起こす。

「邪魔なんかじゃないですよ！？ていうか何が邪魔なんですか！？初春さんも笑ってないで！？」

顔が熱くなるのを感じながらあたふたしていると、クスクスと初春が笑っていた。

「やっと『初春さん』って呼んでくれましたね」

「——え？」

「気付いてなかったのか……」

木山の呆れたような声に鷹月は首を傾げた。

「鷹月くん、今日会ってからずっと私の事、『君』とか『彼女』ってしか呼んでなかったんですよ」

「やはりかなりの無理を強いていたようだな……本当に申し訳ない」

「そんな、大丈夫ですよ！僕はまだ——」

「言っただろう？私達は負けたと」

慌てる鷹月を押し留めるように告げた。

「負けたって……！」

「まったくバカにできないものだな。さすがは超能力者^{レベル5}といったところか」

「ナメてもらっちゃ困るわね」

「そんな……」

「幻想御手で構築したネットワークも、既に私の手を離れて暴れまわっている。もはやたとえここを抜けたとしても目的は果たせない」

言葉を詰まらせて愕然とする鷹月を傍目に、木山は続けた。しかし。

「じゃあ、明理は？」

「鷹月……」

「明理は！？皆はどうなるんですか！？こんな、こんなってないですよ！もうどれだけ目を覚ましてないと思ってるんですか！？」

「鷹月くん？」

いつだってそうだ。大人達はいつも、身勝手で、押しつけがましい。捨てられる辛さも、実験動物^{モルモット}として扱われる痛みも、全て大人達に押し付けられたものだ。それを助けようとしているのに、そんな簡単に――！

「結局、大人なんてみんなそうなんだ！育てるのが辛かったら捨てて、保護者がいなければ利用して、あなた達は誰もわかつちゃくれない！」

「鷹月くん！そんなこと――」

「初春さんは何も知らないだろ！？何もわからないだろ！？なのに

――口を出すな！」

「アンタねえ！」

口を挟もうとした初春に鷹月は怒鳴る。思わず御坂が諫めようとしたその時、パン！と音が響いた。それから自覚したのは、頬が熱くなっていること。はたかれた。そう気付き、熱くなった頭のまま何か言おうと頭を上げようとして、鷹月は止まった。

「わかるわけ、ないじゃないですか！」

顔を上げたその先。初春は、泣いていた。

「何も教えてくれない。何も言ってくれなきゃわかるものもわからないですよ！鷹月くんは自分の事、何も教えてくれないじゃないですか！」

「っ――！」

鷹月は唇を噛みしめながら顔を反らす。一瞬の沈黙。しかし、そ

れも「とにかく」と言う木山によって破られた。

「さっき説明した通りだ。幻想御手の治療プログラム——それを使えば、恐らくアレを止めることができるだろう。彼のことは私に任せてくれ。一応、私も彼の担任だったのではな」

「それじゃあ」

御坂は未だに暴れる化物を見やる。

「アイツは私に任せて。その間に初春さんは警備員アンチスキルの所へ」
「はい！」

初春も強くうなずいて、二人は別々の方向へ駆け出した。

「あれは……？」

奇怪な声を上げる妙な生き物を目で指し示す。

「そうか、君は聞いてなかったな。あれは、幻想御手が作り出したAIM拡散力場の塊——私は幻想猛獣《AIMバースト》と呼んでいる」

「AIM、バースト……」

「彼女達はアレを止める為に戦ってるわけだが——どうする？」
「どうするって……」

試すように尋ねた木山を振りかえる。

「私はもう何もできやしない。だが、君には出来ることがある。違うか？」

「でも——」

「たしかに」

鷹月の言葉を遮るように木山は語調を強めた。

「君^{かこ}の妹を救うことは、もはや今の私達にはできない。しかし、彼女^{いま}達を助けることはできるだろう？」

「僕は、裏切り者です」

「そうだな。しかし、それは彼女達を助けない理由にはならないだろう？」

木山の言葉に鷹月は言葉を発することもなく俯く。

「それに」

何も言わない鷹月に木山は珍しく笑みを浮かべながら言った。

「たとえ誰かの代わりだったとしても、君は彼女を守り続けてきた。誰かの代わりと言いながら、結局君の中には彼女を守りたいという想いがあつたんじゃないか？」

「……」

鷹月は手を見つめてから、視線を動かす。プログラムを手に階段を上がる初春、幻想猛獣に立ち向かう御坂——。

「僕は——っ！」

鷹月は唇を噛みしめる。

どうすればいいのかわからない。ただ、鷹月自身は気付いていなかったが、迷う事で彼は前に進んでいた。

鷹月は初めて、前に目^{いま}を向けたのだから。

進歩（まよい）（後書き）

11日の地震はすごかったですね。自分は教習所で車に乗ってたのでお、かなりでかいぞ、くらいにしか思わなかったのですが・・・。

次回はやっと何故か増えた警備員が頑張ります。っていうか彼が主役です。

とある警備員の奮闘記

「ツイてねーなー」

男は呟いた。木山が起こした崩落に巻き込まれて落下。しかも自分の愛車まで巻き込まれるとはツイてない。しかし、本当にツイてないのは、木山の頭から出てきたバケモノだ。まさか原子力実験炉に向かうとは。しかも、上の銃撃は止んでしまっている。全滅したか、火力不足か。たまぎれどちらにしろ、あまり良い状況ではない。むしろ、ヤバイ。

自分が気絶している間に終わってくればよかったのになーと不埒なことを考えながら、愛車を確かめる。なんとか開くドアを見つけて、ほっと一息つく。

「まったく……こっからちっと仕事量増えるってことか。あーあ、割に合わねーよマジで」

そうぼやきつつも愛車のドアを開けた。

「おー無事だったか」

自動小銃、狙撃銃、サブマシンガンに対戦車砲。ありとあらゆる銃火器がそこにはあった。

彼の今の職は体育の非常勤教師。しかし、元の職は外国人傭兵。今の職場は校庭だが、前の職場は戦場ワンマンアーミーというなんとも不可思議な経歴を持つ自称『独立軍人』、唐沢一士からさわはじめ。それが、今の彼の名前だった。

「っと、こいつがいいかな」

そう言っ彼が取りだしたのは、M82通称『バレット』と呼ば
れる狙撃銃。2km先の戦車を撃破したという伝説を持つ、対物ラ
イフルとも言える代物だ。それを構え、唐沢は引き金を引く。

ドン！というライフルから出たとは思えない音が発された直後、
化物の一部がなにかに挟られたように吹き飛んだ。

怪物は、まるで痛がるように耳に痛い奇声を発する。

「さすがだなー。人に使いたくねーわこれは」

しかし、そう呟いた直後、化物の身体が膨らんだかと思うとすぐ
に元に戻った。

「おいおい、冗談じゃねーぞ」

ドン！ドン！と立て続けに音が響き、その度に化物の身体が挟れ
る。しかしその度に挟れた場所が再生する。チツと思わず舌打ちし
た所で不意に人が視界に入った。

制服をどこかで見たような気もするが、覚えてない。しかし、子
供が入って来るような場所でもないので改めて唐沢は舌打ちをする。

「おい！嬢ちゃん！ここはあぶねえから・・・っと！」

その少女に化物の触手に向かうのを見て、慌ててスコープを覗く。
そして引き金を引こうとした直後、黒い何かがその触手を切り裂い
た。

「だれが譲ちゃんよ」

「……ハハハ、こりゃあすまない」

「アンタの相手はこの私よ！」

なんだか知らないが、どうやらあの化物に宣戦布告した少女はずいぶんな能力おちからをお持ちになってる方らしい。まったく、この学園都市まは何から何までおかしいことだらけだ。唐沢はため息をつくという伊フルを構え直す。

とにかく、それならば自分のやることは決まっている。あの少女の援護。それが役割だと割り切ってスコープを覗く。

「すみません！」

すると、不意に声が聞こえて唐沢はスコープから目を放した。当たりを見回すとちょうど人質の少女と一緒に木山の車に乗っていた少年がこちらに向かって走って来るところだった。

「何か用か！ いや、危ねーからこっち来んな！」

そう叫ぶと、少年は走りながら上——正確には高速にかかった階段を指さした。意図がわからず首をかしげていると少年は叫ぶ。

「上に飛ばして下さい！」

はあ！？と思わず声を上げた。どう考えても人が二人力を合わせたところで届く高さじゃない。しかし、少年はもうその気になって全力で駆けてきている。どうなっても知らねえぞと吐き捨てて、唐沢はライフルを投げ捨てた。何が目的かは知らないが、階段を駆け上がろうとしない所を見るとよほど急いでいるのだろう。唐沢は階段の少し前にしゃがみこんで腕を組んだ。

「来い！」

「ありがとうございます！」

感謝の言葉を述べた少年が唐沢の腕に足を掛けた瞬間、唐沢はど
うにでもなれという思いと共に少年を上放った。それにあわせて
少年も思いっきり跳んだのだろう。腕にとんでもない負荷がかかり、
それをこらえて腕をはね上げた結果、唐沢は思いっきり後ろに倒れ
込んだ。

「ハハハッ。マジで行っちゃった」

青空に映る少年の影は本当に飛んでいるかのように軽やかだった。
何かいいことでもあったのだろうか？この状況で？何が何だか分か
らないがとにかく、味方が増えたと思っていいいのだろう。唐沢は再
びライフルに目を向けた――が。

「……」

腕を動かそうとして痛みが走った。どうやら肩が外れてしまった
らしい。少し考えた後、唐沢はそこにごろんと寝ころんだ。

「んじゃ、俺休憩」

別に戻して戦線復帰もいいが、無理をすれば下手をすともう銃
を握れなくなるかもしれない。それはごめんだと唐沢はそこで目を
瞑った。

とある警備員の奮闘記（後書き）

こんな警備員がいてもおかしくないと思った。そして、一時期はコイツを主人公にしてみようとも考えた。今後、彼が日の目を見ることはない・・・と思う。多分。確証はないけれど。

前を向いて。

初春は階段を登っていた。その下では御坂が幻想猛獣^{AIMバースト}の気を引く為に戦っているはずだ。今の自分のやるべき事は手の中にある幻想^{レベル}御手の治療プログラムを警備員^{アンチスキル}に届けて副作用に苦しむ佐天達を助けて、幻想猛獣を止めること。

初春はプログラムの入ったメモリーチップを握る。これを失くしてしまえば佐天達を助けることは叶わなくなる。緊張しながらも、初春は一段一段上がって行く。ただ上だけを見据えて。その時、不意に今までより近くで聞こえた爆発の音に初春は視線を横に向けて、息を飲んだ。その目前には、幻想猛獣が放ったであろう光が初春の視線いっぱい広がっていた。

目をつむって、プログラムを両手で握って自分の胸に押し付ける。これだけは守らなければ。その想いが取らせた行動だった。ドン！と自分に何かがぶつかる感触がして初春は自分の足が床から離れるのを感じた。が。

（あれ？）

初春は疑問に思った。確かに自分を狙ったものだったはずなのに、確かに自分は当たったはずなのに、痛みがない。おそろおそろ目を開けて、呟いた。

奇しくもそれは目の前にいる彼が呟いた言葉と同じで。

「どうして？」

「もう、妹を、明理を助けることはできないかもしれない」

何回も自分を助けてくれた、何回も自分を支えてくれた少年。たとえ誰かの代わりだったとしても、初春にとってそれは紛れもない

事実だった。

「でも、また誰かを失うのは、許せない。だから」

きっと来てくれると思っていたとまでは言わない。けれど、助けてに来てくれたことはとても嬉しかった。

「今度こそ、君を《・・》守るよ。初春さん」

「……っ！」

けれど、ここで「はい」と言うわけにはいかない。それでは今までと同じだから。だから、初春は言った。

「ありがとうございます。でも、鷹月くんは御坂さんの所へ行ってください」

心配してくれるのは嬉しい。けど、初春飾利は、鷹月暁に守ってもらいたいんじゃない。

「初春さん？」

「私よりも、危険なのは御坂さんなんです」

「鷹月」

でも！と鷹月が声を上げた時あらぬ方向から声が聞こえて、二人は視線を向けた。

「その子の言う通りじゃんよ。今一番危険なのは、常盤台のあの子だ」

「そ、それはそうですけど、こっちだって——」
「それに！」

鷹月の言葉を遮って、その警備員は初春の頭に手を置いた。

アンチスキル

「この子は、お前と一緒に戦いたいんだよ《・・・・・・・・・・・・・・・・》」

ぐ、とプログラムを握って、鷹月の目を見つめる。

「信じてください」

数瞬の後、鷹月は目を瞑って頷いた。

「——わかった。でも、気をつけてね」

「だーいじょーぶじゃん！私らが付いてるんだ。安心して行って来い」

「はい！」

そう頷くと、鷹月は駆けだした。しかし、すぐに名前を呼ばれて立ち止まった。

「何？」

「……今度は、ちゃんと戻ってきてください！約束です！」

「……うん」

鷹月が頷いて再び駆けだすのと同じく、初春も警備員に声をかける。

「行きましょう！」

「ああ！こっちだ！」

「うらあああああああ！」

地面から砂鉄を引き出して光弾を弾く。

「らあ！」

そして、そのまま幻想猛獣を斬りつける。しかし。

「ホンツトきりがいいわね！」

斬りつけた場所が再生するのを見て呟く。いくら傷つけても再生するのできりがいい。だが、退くわけにもいかない。

「まったく！なんで原子力の施設なんかに向かってくんのよ！怪獣映画かつつの！」

御坂の後ろには原子力実験炉がある。もしこれが破壊されれば学園都市中に放射能がバラ撒かれることになる。それだけはなんとしても避けなければいけない。

「こうなったら——！」

バチチチ！と御坂の手に電流が迸る。しかし。

（あれは一万人の子供達の——）
「くっ」

御坂はためらった。ためらってしまった。

その隙を見逃さず、幻想猛獣は御坂の足をからめ捕る。

「まづっ！」

ぐっと足を引っ張られ、自身の身体が宙に浮く。振り回され、御坂は身体がぐっと持ち上げられる感覚にとらわれた。

（このままじゃ——！）

刹那、突然足を掴んでいたそれが取れた。

「つて！なんでいきなり取れんのよー！」

空中に放り出され、あわや地面に激突かと目を瞑った御坂だったが、地面に激突することはなかった。なにかに収まるようにして持ち抱えられていた。

「……鷹月！？」

「遅くなってすいません。でも……もう、迷いませんから」

そう言った鷹月を見て、フツと笑って御坂は言った。

「カッコつけんのはそれくらいにして、降ろしてくんない？」

「すっ、すいません！」

降ろされた御坂はパンパンとスカートを払ってから鷹月に向き合う。

「で、どういう心境の変化なのかしら？罪滅ぼしとかそういう類？」

「それもあります。でも、そんな簡単に許してもらおうなんて思っ
てません。許してもらえるとさえ思っていない。けど、これは僕らが
招いたことだから。せめて最低限の責任は果たさないとって思った
んです。それでも、やっぱり僕にはみんなと一緒にいる資格なんて
ないのかもしれない。初春さんには、戻るって約束しちゃったん
ですけど」

そ、と呟いてから、御坂は言った。

「ま、とーぜんよね」

「……」

「こいつ止めたくらいで許すっていうのはねー。そうね、許してほ
しかったら——あ、そういえば学舎の園にいいお店があってね
ーってそういえばあんた行ったことあったっけ？一緒にいたんだし。
そこで私と黒子と初春さんに佐天さんと、あ、固法先輩もいるわね。
全員分のおごりどう？」

「あ、えと、ていうか今そんなこと話してる場合じゃ——」

困惑する鷹月をよそに御坂は顎に指を当てて考え始める

「あ、そーだ。せっかくだしあの時の格好でっくらいどうかしら
？」

「え？いや、だから——」

「うーん……ていうか考えたらあんたに拒否権ないわね。じゃあ決
まり！」

「ええ！？そこまで！？あの時の格好をする必要はないですよね！
？」

抗議の声を上げる鷹月。御坂はその額をピンと弾いた。

「資格がない、なんて悲しいこと言わないの。私も初春さんも、みんなそんなことは望んでない。だから、初春さんはアンタと約束したんだし——アンタだってそうでしょ？」

「……はい。でも」

額を抑えながら俯いた鷹月の頭をがしっと掴んで、だったら、と御坂は笑いかけた。

「そんなこと考えてないで、今度みんなと会った時どうしたらいいか考えなさい。みんなあんたと仲良くしたいって思ってるのには変わりないんだから」

「——はい！」

不思議な人だと思いつつ、鷹月は頷いた。白井がああも御坂を慕う理由がなんとなくわかった気がした。

「じゃ、やるわよ！足引っ張んじゃないわよ！」

「わかってます！」

鷹月は幻想猛獣に相對する。迷いがなくなったわけじゃない。けれど、迷うのは、コイツを止めてからでもできることだから。

だから、鷹月暁は前を向く。

前を向いて。(後書き)

ようやく主人公っぽくなったかなあ？

声

鷹月は目の前の幻想猛獣を見据える。^{A T M パーセント}

同時に、幻想猛獣の周囲に結晶のようなものが現れて鷹月と御坂に襲いかかる。

「で！あんたどうやってこいつとやり合うつもり！？」

「やりようなら、いくらだってありますよ」

叫びながら後ろに跳び退る御坂を他所に、鷹月はローラースケートでその真っ只中に突っ込み、身体を右に左に揺らしてかわすとベルトで腰の後ろに留めていたそれを引っ張り出して幻想猛獣に向け、引き金を引く。ガガガガと手に持った自動小銃が弾丸をフルオートで吐き出す。効果がないのはわかっている。しかし、今は足止め——ヤツの意識をこっちに向けられればそれでいい。そのまま後ろに回り込んで鷹月は叫んだ。

「こっちだ！」

同時に鷹月のライフルからカポン、と今までの激しい銃声とはまた違った音が響いた。刹那、ドン！という音と共にグレネードの爆発が幻想猛獣の身体の一部を抉り飛ばす。

幻想猛獣の悲鳴のような雄叫びが響き、光弾が鷹月を狙い始める。鷹月はそれを避けながら銃弾を叩き込み続ける。

やれる。倒せはできなくとも、時間稼ぎくらいなら。

そう思った時、ドン！と鷹月の後ろで聞いたこともないような音が響いた。

（なん——ッ！？）

その先を見て鷹月は驚いた。
さっきまで平らだったはずの地面に大きなクレーターが作られていた。

（くそっ！こんなことまで！？）

そう思っている間にも、クレーターに突っ込む。転ぶことは免れたが無理な姿勢でクレーターを飛び出した鷹月に次の光弾を回避する余裕はない。

（しまっ——！？）

そう思った瞬間、突然足をぐん！と引っ張られ、鷹月の思考は中断される。受け身を取ることも許されず、地面に転がると目の前に足があった。

「まったく、私を無視すんなっつーの」

「ハハハ、すみません」

立ち上がり、再び幻想猛獣と対峙する。

「……わかっててもここまでやって効果なしっていうのもなんかやるせなくなるなあ」

「つつたって退くわけにもいかないでしょ——やるせないのはわかるけど」

「まあそれもそうですけど」

マガジン
ランチャー
ライフルの弾倉を交換し、下部の投擲筒に弾を込める。これも無限にある訳ではないし、取りに行く時間なんてあるはずもない。そ

の前に、何とか活路を見出したいが――。
その時、周囲に音楽が流れ始めた。突然の出来事に当たりを見回す。

「これ……おん、がく？」

「なに？この曲――っ！やばっ！」
「っ！？」

御坂の声にはっとして、慌てて鷹月が上体を反らすと目の前を幻想猛獣の触手が過ぎ去って行った。

「つく――このおっ」

足に付けたスケートを能力で操る。左は前進、右は後進。信号を受けたスケートが唸りを上げ、鷹月の身体が回転する。

「だああああああっ！！」

その勢いのまま、右足を振り上げると御坂を捉えた触手が切れた。見た目はただの回し蹴り。しかし、鷹月は蹴りの瞬間に足が動く方向とは逆にスケートの車輪を回転させていた。そうすることで、たとえ鋭くないスケートの車輪でも動物の肉を抉るくらいのことはできる。さっき御坂を助けだした時に使ったのもこれだった。

（でも、すぐに再生されちゃあ――！）
「って、あれ？」

鷹月は違和感を抱く。てっきりすぐに修復する物だと思っていた触手が切り離されたまま地面に落ちたからだ。どうしていきなり再生しなくなったのか？そしてふと鷹月は気付く。今耳に響いている

この曲。これは――。

（幻想御手の治療プログラム！てことは初春さんか！）

「御坂さん！」

「わかってるわよ！これで――」

振り向くと御坂が不敵な笑みを浮かべていた。その前髪からはバチバチと火花が迸る。

「ゲームオーバーよ！」

叫びと共に御坂から爆発的な電流が迸り、幻想猛獣を包み込む。ついに、幻想猛獣は地面に黒い煙を上げながら倒れた。

「終わっ――た？」

「まあ、間一髪ってトコかしらね」

「気を抜くな！まだ終わってはいない！」

「「え？」」

ほっと安堵の息をついた所で声が響き、二人は振り返った。

「木山先生！？」

「ちょ、なんでこんな所に！？」

二人が声を上げたその時、不意に倒したはずの幻想猛獣が動き出した。

「ネットワークの破壊には成功しても、あれはA I M拡散力場が生んだ万人の思考の集合体^{かたまり}。普通の生物の常識は通用しない！」

「話が違うじゃない！そんなのどうやって――」

「来ます！」

鷹月が前を見て叫ぶ。目の前の幻想猛獣はまさに壁だった。

「核が——力場を固定させている核がどこかにあるはずだ。それを破壊すれば——」

核？と鷹月は唇を噛む。こんな壁の様な幻想猛獣から、どんな形かもどれくらいの大きさかもわからない核を探し出さなければいけない。それはとてもなく困難なことに思える。

（クソッ！こんなのだうしたら——）

その時、声が響いた。

声（後書き）

A I M バーストってどれくらい固いんでしょう？

そして御坂はどうやってA I M バーストの核の位置を知ったんだろう？

幻想御手事件、終結

『レベル0って欠陥品なのかな——』

「この声！」

「佐天さん!？」

流れてきた声は、たしかに佐天の声だった。佐天の意識、心の声。

『だと思ってやがる』のが許せない——』

ともすれば別の声が響く。幻想御手レベルアップを使った人達の声ということか。

鷹月は後悔した。罪悪感がなかったわけじゃない。しかし、これはそういう問題じゃなかった。後で治療すればいいとか、後遺症は残させないとか、これは友達を救う為とか、そんなものは微塵も言い訳にはならなかった。してはいけないかったのだ、こんなことは。鷹月は、まさに鷹月が最も嫌った科学者達と同じことをしてしまったのだ。目的の為に他人を食いつぶすやり方を。

「下がって。巻き込まれるわよ」

幻想猛獣AIMバーストの声を、幻想御手の使用者達の声を聞いた御坂は木山と鷹月に言った。

「構うものか。私にはアレを生み出した責任が——」

「アンタがよくても、アンタの教え子はどうすんの。恢復した時、あの子達が見たいのはアンタの顔じゃないの？こんなやり方しないなら、私も協力する。そう簡単にあきらめないで。あとね——」
「っ御坂さん！」

鷹月は声を上げた。幻想猛獣が、御坂を貫こうとしたからだ。しかし、その心配は杞憂だった。

「アイツに巻き込まれるんじゃない」

御坂から放たれた電撃がその触手を消し飛ばす。そして、振り向きながら言い放つ。

「私が巻きこんじゃうって言うてんのよ！」

怒声と共に御坂の右手から電撃が放たれる。が、その電撃はまるで見えない壁でもあるかのようにその周囲に拡散していく。効いていない。しかしその直後、御坂から放たれる電撃の強さが目に見えて変わった。

「電撃は、当たってない……のに……」

幻想猛獣の表面が焼け焦げている。一万人の思考の塊を能力の塊を力でねじ伏せている。これが超能力者^{レベル5}。これが、超電磁砲^{ちやうてん}。

「はは……」

思わず笑いが出た。これが、彼女の本気。敵うはずもなかった。しかし、鷹月は退かなかった。こんな非常識な能力^{チカラ}のぶつかり合いでも、鷹月は退くわけにはいかなかった。

ブスブスと黒い煙を上げる幻想猛獣。その沈黙の隙に、鷹月は話しかけた。

「御坂さん」

「何!?! ってか下がってなさいって——」

そう御坂が叫ぶ前に、御坂に耳打ちをした。瞬間、御坂は顔色を変えた。

「アンタ……正気?」

「そうでもしなきゃ核の位置はわからない。核の位置がわからなきゃ、コイツを止めることもできません」

「でも——」

「やらせて下さい。いや、やらなきゃコイツは止められない。御坂さんだって、消耗しないわけじゃないんでしょう? 考えてる時間もないんです」

しばらく御坂は逡巡したようだが、つたく、と諦めたように呟いた。

「わかったわ。のってあげる。でも、いい? アンタはもう一人じゃない。それだけは忘れないで」

「……はい」

そう返事をする、鷹月は再び御坂を狙い始めた幻想猛獣に向かって駆けだした。幸いなことに、幻想猛獣は鷹月をそれほど危険でないと判断したのか、その攻撃の矛先は主に御坂で鷹月に向かってくるのはまばらだった。ただひたすらに全力で、攻撃はまさに紙一重で避けながら、鷹月は跳躍し、叫んだ。

「お願いします!」

「オッケー!」

そして、打ち合わせ通りに電撃が放たれる。鷹月に向かって。

（御坂さんの電撃でヤツの身体は吹っ飛んだ。さっきのは直接当たらなかったから表面を焦がすにとどまった。なら！）

鷹月は向かって来た電撃を後ろに回した右手で受けた。

（僕の手で直接コイツに電撃を送ってやれば！）

右腕の神経に焼かれるような痛みが走る。感電している。それだけの量の電撃を低位ながらも、発電能力者である鷹月は御坂から受け取った。そして。

「うおおおおおおおおおッ！！！」

バン！と掌を押しつける。あとは右腕に溜められた電流を炸裂させればよかった。しかし。

『レベル0ニナリタカッタワケジャ マイニチガドレダケミジメダツタカ『キミタチニハ——』』

（これは、一体——！？）

刹那、頭に激しい痛みを感じた。何かが流れこんでくる感覚、これは——！

「う、がああああああ、ぐああああああああああ！！！！」
『オマエラハイツモオレタチヲミクダシテ『ソナオマエタチガ『ダレダッテノウリヨクシヤニ——』』

「あっ、がっ、ぐああああああああああ！！！！」

鷹月は知らなかっただろう。その少し前、彼らを内包した木山と

御坂が戦った時、御坂が電流を介して木山の記憶を知ったことなど。そして今まさに、鷹月と幻想猛獣の間に似たような現象が起きていることなど。だが、不運にも。

鷹月の相手は幻想猛獣で、一万人の思考の塊だったということ。

一万人の思考がたった一人の脳になだれ込めばどうなるか。

それは火を見るより明らか。

たった一個の風船に一万の風船の空気を一気に送りこむのと大差ないのだから。

「があああああああああ——！！！！」

しかし、鷹月はその中に異質な思考があるのを見つけた。交じり合ういくつもの思考の中で、たった一つ鮮明な思考。

『守れなかった。それが悔しかった。能力があれば、そう思った』
(これ、は)

以前似たようなことを言っていた人物を知っている気がする。

『けど、ソイツは違ってた。できるかできないかより、やるか、やらないか。その選択から、俺は逃げていたんだ』

(わし、や………?)

なぜ彼の思考だけがはっきりわかったのかはわからなかった。もしかしたら、混濁した思考の中でも異質な思考だけが印象に残っただけかもしれない。

『能力が欲しくないわけじゃない。けど、能力をがむしゃらに求めるより、もっと大切なことがあるんじゃないか。俺は、ソイツを手に入れたい』

けど一つ言えることは。

『簡単なことだった。けど、忘れてた。いや、知らなかったのかもな。この学園都市のシステムが、阻んでたせいで。けど、今はわかる気がする。あの人が強かった理由も、そして、アイツに勝てなかった理由も——』

こんな風に思えた彼を、鷹月は救いたと思った。過去にとらわれた自分を、そう捉えてくれた彼を助けたいと思った。そして、なによりも、こんな一万もの絶望の思考の中にも、希望を持った思考があったこと。それが、鷹月の目的を鮮明にさせた。

「——っあああああああああ!!!!」

雄叫びの声色が変わり、掌に電気が集中する。彼らの苦しみを取り除くことは鷹月にはできない。けれど。

「え、めん。こんな所に閉じ込めて」

きつと、こんな絶望だけで終わることはないはずだから。だから。

「今、助ける!」

ボン!という激しい破裂音と共に、幻想猛獣の腹が開いた。その奥にはそこだけ無機質な物でできているような三角柱が。アレがきつと核なのだろう。そう考えながら、鷹月は叫んだ。

(御坂さん——あとは——)

視界を一本の閃光が横切る。それを最後に、鷹月は意識を手放した。

幻想御手事件、終結（後書き）

サブタイまんまですが、ようやくレベルアップ事件が一段落しました！。

次回は、まんま幻想御手のエピソードです。

少年達のエピローグ

「久しぶりだな、こうすんのも」

何となく一人呟いてみる。場所は違えど、あの頃はこうやって夕焼けを眺めていたような気がする。

鷺谷が目を覚ましたのはほんのちょっと前の事だ。幻想御手の副作用によって昏睡状態に陥っていたのだが、つい先ほど他の患者と同様に目を覚ましたのだった。もっとも、その中でもかなり早い方らしく、まだ鷺谷が起きた頃に目を覚ましていた人間はちらほらと見るくらいだった。

しかし、そんなことはどうでもよかった。鷺谷が考えていたのは。

（最後の、あの夢）

不思議な夢だった。見知った気にいらぬヤツとなんだか知らないけどとんでもない能力を持った女にブッ飛ばされる夢。アレは本当に夢だったのか？ 本当にあったことじゃないのか？ そこまで考えて、やめた。

（考えてもわかることじゃねえ、か）

そろそろ戻るか、と後ろを向くとちょうど人が上がってきたところだった。見覚えのある顔だ。名前はたしか――。

「佐天、だっけか」

「あれ？ なんでアタシの名前知ってんの？」

「同じクラスだからだアホ」

呆れて再び夕焼けに目を戻すとあー！と声が響いて鷺谷は後ろを振り向いた。

「アンタもしかしてムツツリワシ!？」

「なんだそれ新種の鳥か？」

「いや、いつもムスツとしてるから」

「それにしたってヒデエだろ」

どんなネーミングセンスしてやがる、とため息をついてふと思う。

「あれ、お前どうしてここに――」

そこまで言っただけに思いついた。

「そっか、お前も」

「うん。ま、今は何もかも元通りだけどね」

「そうだな」

そう、何もかも戻ったのだ。能力を使えないところまで、何もかも。

「でもさ」

「ん？」

「能力なんかより、もっと大切なものに気付けた」

そう呟いた佐天の横顔を見て、鷺谷は軽く笑った。

「笑うことじゃないでしょ」

「ああ」

鷺谷は今まで寄りかかっていたフェンスから身体を離した。

「そうだな——その通りだよ」

果たして、それに気付いた人間が何人いるだろう？ 一人一人、それは違うだろうが。

「気付けただけ……いや、持っていただけでも、マシだったのかもな」

「佐天さん！」

ボソツと呟いた直後に響いた声に、鷺谷が顔を向けると、ちょうど駆けあがってきたのであろう息を切らした初春が立っていた。

「それじゃ、戻るかね」

そう呟いてフェンスから身体を離すとゆっくりと、初春が立つ階段へ向かう。そしてすれ違った瞬間。

「ありがとう」

「へっ？」

「アイツにも、そう伝えておいてくれ」

それから、何事もなかったかのように鷺谷はそのままゆっくりと階段を下りて行った。

目を覚ましてまず目に入ったのは、白い天井だった。辺りを見回して、どうやらここは病院らしい、と少年は見当をつけて、いろいろと視界に入る物を見て回る。しばらくそうしていると、白衣を着た小太りの男性が部屋に入ってきた。

「起きたようだね」

「あなたは、お医者さん、ですか？」

「この院長をやっているよ。ところで、どこか具合が悪かったりはしないか？」

なんとなく体を動かしてみる。特にどこか痛いわけでもなかった。

「はい、大丈夫です」

「そうか」

「あの！」

さも当然とでもいう風に、医者は返した。それから、医者は出て行こうとしたが、少年はそれを止めた。

「なにかな？」

「あの――」

いくつか気になっていた事があったからだ。少年は尋ねた。

「どうして、名札にカエルのシールが貼ってあるんですか？」

「僕の顔がカエルに似てるらしいから。これでいいかい？」

「あ、それと！」

そして、鷹月はもう一つ質問をした。起きてから、ずっと気になっていたこと。少年はそれを指さして言った。

「鷹月暁って僕の名前ですか？」

少年達のエピソード（後書き）

幻想御手事件、ようやく終わった・・・。
話はまだ続きますが。

少年の新しい生活（前書き）

新章、はじまります。

少年の新しい生活

トントントンと鷹月はバスの窓際に肘をつきながら流れて行く景色を眺めていた。いや、眺めていた、という表現はおそらく適切ではないだろう。鷹月の思考は、その反対側に向けられていた。

鷹月暁は、以前とある事件のケガが元で記憶を失った。いわゆる、記憶喪失と呼ばれるヤツだ。幸いにも、生活出来る程度の知識は残っていた上、脳に損傷が見られるわけでもないので、戻る可能性もあるらしいが、今のところそのような兆候は見られない。そんな中、鷹月は彼女と出会った。

初春飾利。

鷹月が出会った最初の知り合いである。

『初春飾利っていいです。鷹月くんとは、学校の同級生で、あと、ジャッジメント風紀委員と一緒に活動してるんですよ——』

彼女と出会ったのは、鷹月の病室だった。おそらくは、医者から聞いたのだろう。困惑する鷹月を前に笑顔で優しく語ってくれたのを覚えている。退院した後も、寮を案内してくれたり、何故か部屋に私服がほとんどなかったのを見て面白い物に付き合ってくれたりとてもお世話になっていたのだった。その間も終始笑顔だった初春だ。

『——初春って呼んでください』

自己紹介の最後。その時だけ、確かに彼女は寂しそうな、悲しそうな顔をしたのを覚えて、いや、忘れられずにいた。そして、何故かその言い方がしっくりこないのも確かだった。だがしかし、鷹月は初春と呼ぶことにした。彼女が嘘をつくはずがない、そして、仮

に嘘だったとしても何か理由があるのだろう、鷹月はそう考えたのだった。

そして、今考えていたのは。

（僕と初春はどういう関係だったのかなあ？）

クラスの同級生、風紀委員の同僚。それだけにしては妙に親しい、というか気を使いすぎてくれているような気もする。それに、初春は女、自分は男。親しいにしたって異性でここまで気を使ってくれるというのは――。

（彼女？）

いやいやいやそれはない、と鷹月は首を振る。

なんというか、自分はそういうの、あんまり興味なさそうな気がする。でなければ、私服が黒一色なんてことないと思う。

（じゃあ、友達がいなくて初春さんが仕方なく僕の面倒を見てくれるのかな？）

そう思うと、やけに悲しくなった。しかし、そっちの方が現実味があるのも事実。どうしよう。が、そこでふと閃いた。知りたいなら聞けばいいじゃないか、と。

「えと、初春？」

「なんでしよう？」

「初春は、どうして僕の事こんなに気にかけてくれるの？ 今日もうやって連れだしてくれたし」

「えっ！？ えっと、それはですね……」

まるで思いもしなかったのだろう。初春は何やらびっくりしたような声を上げて鷹月から視線を反らす初春。何かマズい事でも言うてしまったのかと思って、鷹月が思わず、ゴメン。と呟いてしまう。と、初春は、謝ることないですよ。と少し慌てたように言った。

「え、喋りたくないんじゃないの？」

「そんなことないですよ。鷹月くんは覚えてないかもしれないけれど、私、よく鷹月くんに助けられたんです。だから、今、恩返ししておきたいなって」

「ふーん。そうなんだ」

結局、記憶のない鷹月には心当たりのないことでよくはわからなかった。しかし、決して同情などではないということは嬉しかった。だから、鷹月は満面の笑顔と共に言う。

「ありがとう」

が、次の瞬間、なぜか初春は慌てて鷹月から顔を背けた。そして、ちよっとしてから、大慌てでバスのブザーを鳴らすと鷹月の手を引っ張って立ち上がった。

「え、初春どうしたの!？」

「お、降りましょう!」

あまりに突然の事に、鷹月は困惑の声を上げるが、初春はそのままずるずると鷹月を引っ張る。そして、ついには二人分のバスの会計も済ませてしまった。

「……」

鷹月は、あまりに突然の事に呆然とするばかりだった。そして、バスを降りるときに気になっていた事を初春に聞くことにした。

「ねえ、どうしてバスのお客さんはみんな笑ってたのかな？」

「しっ、知りません！ぜんっぜん知りません！」

早足で歩き始めた初春に鷹月は再び引きずられるハメになるのだった。

「はあ、ひい、す、すみませーん」

初春に引っ張られ辿り着いたファミレスでは、二人の女の子が何やら言いあっていた。初春と一緒に見舞いに来た二人。たしか、御坂と白井と言っていた気がする。

「ちょっとバス一本乗り遅れちゃって、お待たせしました」

「え？送れたんじゃないかって途中で降りたんがっ！？」

「えへへへへ。ちょっと失敗しました。鷹月くん、待ち合わせ場所に来ないなーって思ってたなら、場所を知らなかったんですよー」

「そ、そう。それは、大変だったわね」

苦笑しながら、御坂は笑う。

「にしても、よかったわ」

「へ？何がですか？」

いきなり「よかった」と言われても、と首を傾げる初春。御坂は初春と鷹月の間を見ながら。

「鷹月くんが記憶を失ったって言うから、初春さん落ち込んでないかなって思ってたけど、なんかむしろ前より上手くいってそうじゃない」

「そうですわね。この間なんか二人で鷹月の私服も買いに行ったそうですし」

白井もニヤニヤ笑いながらその会話に加わる。

「え！？マジ！？なんで黒子が知ってんの！？」

「警邏中に見かけましたの。今日は休むというので何があるのかと思えば二人仲良くお買いものとは、羨ましい限りでしたわ。わたくしだってできることならお姉様と……っ！」

「ちゃっかり抱きつこうとしてんじゃないわよ！それにしても、やるわねー初春さんも」

「そっ、そんなんじゃないですよっ！」

顔を真っ赤にして叫ぶ初春を見て笑いながら、御坂は鷹月の方に視線を向けた。

「それで、何か思い出した？」

「ごめんなさい。何も、まだ……」

「あー、いいのいいの。こっちこそごめんね。どう？生活に困ったことはない？私達も何かしてあげられればいいんだけど」

しゅんとする鷹月を気遣って変えられた質問。鷹月は大丈夫ですと答えた。

「生活に必要な知識はあるし、結構家の機械も説明書が取ってあったりしてるので……それに、初春もいますし」

「あ、そう」

「え？どうかしたんですか？」

急に返事が投げやりになったので、鷹月は首を傾げる。それを見て、御坂と白井は呆れたようにため息をついた。

「いや、何でもないのよ。気にしないで……」

「なんというか、これはこれでまた別の方向で厄介になりましたわね……」

「んー？ねえ初春。これってどういう——？おーい、初春？」

二人の言っている意味がわからず、残りの一人に尋ねようとして振り向くが、隣の初春は真っ赤になって固まっていた。

「ところで初春？そろそろ現実に戻っていただきたいのですが」

「はっ、はい！なんでしょか！？」

ようやく戻って来た初春に白井は尋ねた。

「今日は佐天さんも一緒という話でしたが……」

「ああ、それが」

初春は苦笑しながら理由を話した。

「今日は学校の補習があるみたいなんですよ」

少年の新しい生活（後書き）

記憶喪失になると性格が変わることも少なくないきそうす。

とある少年の補習授業・1

トントントンと鷺谷は机に肘をつきながら外を眺めていた。外はまるで自分に見せつけるようないい天気だ。チツと舌打ちすると鷺谷は教室に目を戻した。その教室も静まりかえっていて、その静けさが返って鷺谷を苛立たせた。

(つたく……どいつもこいつもしけたツラしやがって)

が、実のところ鷺谷はどうして自分がこんなにも苛ついているのかわからなかった。これは補習なのだから、喜んで受ける人間など本当に根っからの真面目なヤツか、もしくはただの変態^{マゾヒスト}くらいだろうが。そんな事を考えていた時だった。

「あれ？ アンタもしかして——」

「あ？」

唐突に掛けられた声に、鷺谷は不機嫌を隠さずに振り返る。が、それも大した意味もなく、声をかけた相手は臆さずに続けた。

「あ、やっぱりムツツ——」

「それ以上言ったらこの窓からテメエをつき落とすぞ、佐天」
「冗談だって」

相変わらず不機嫌を隠さずに言った鷺谷だったが、佐天は臆することもなく笑った。が。

「あれー？ 涙子、それ知り合い？」

「生憎だがオマエと同じクラスだよ！」

そんなに影薄いかと思わず自問する。クラスじゃ誰かと話す事など滅多にないし、授業でも注意される事も指されることもあまりない……薄かった。

納得できてしまう理由を見つけてしまつて、怒鳴つたあげくなんとなく八つ当たりみたいに思えて、再度鷺谷は機嫌を悪くする。

「ったく——お前らも補習組か」

「アンタだってそうでしょ」

「まあな」

その通りなので、ため息と共にそう返した。

「にしても、本当にいろんな学校から来てるんだね」

「そうみたいだね」

「それにしても、わびしい人数だねー」

「これじゃ居眠りできないわ」

（これはこれでウゼエ……）

うるさくなつた周囲を無視するかのようになり、がくつと机に突つ伏す鷺谷。もうすでに補習なんてやる体力も残ってないのではと疑いたくなるほどの疲労感だ。そんな感じでだらけていた時、ガラッと教室のドアが鳴った。

「どいつもこいつもシケたツラしてんなあ」

「やっぱり帰りましょうぜ姉御。だりいっす」

「オイ、ここまで来てつべこべ言つてんじゃないよ!」

「す、すいません!!」

（あー、うっせえなあ）

不機嫌を隠そうともせず、鷺谷は頭をかきながら体を起こして騒動の方に顔を向けた。途端。

「あ！？テメエ何見てんだよ！」

男の首根っこ掴んでいた女がこっちに気付き、つかつかと歩いて来た。

「あー、メンドくせえ」

「なにごちゃごちゃ言ってやがる！立てよオラ！」

ガン！と女が鷺谷の座っている席の机を蹴る。そして、鷺谷はそれに呼応するように舌打ちと共に立ち上がった。それに気が障ったのか、女はその耳元で怒鳴り始める。

「テメエどうやら騷がなって——」

「うっせえんだよ。耳元でがなんじゃねえよ。周りにだーい迷惑だ。大声出したきゃ校庭でやるこった」

「ッ！テメエ殴られねえとわかんねえらしいなあ！」

「ちよ、姉御こんなトコで——」

あわや一触即発というところで、パン、パン、と音が響き、騒動の気を取られていた全員が音の方を振り向いた。

「はいはい、そこまでなのですよー」

そこには、小学生くらいの子供が立っていた。それを見てから、目の前の女を見て、鷺谷は呟いた。

「オイオイ、子供がいんのか……アンタ。にしても連れて来るこた

ねーだろ」

「ちげえよっ!」

「じゃ、誰だよ!」

「先生なのですよー」

せんせえ!?!と教室にいた全員が声を上げた。その問題になっている赤いランドセルが恐ろしく似合いそうな自称先生は笑顔で。

「午前の講習を受け持つ、月詠小萌です。ナメた口きくと、補習時間延ばしちゃいますよ♪」

その外見からはかけ離れた、ちゃんと先生っぽいことを言っていた。

とある少年の補習授業・1（後書き）

鷺谷主人公回。ようやく日の目を見た鷺谷。しばらく鷺谷主人公回が続くと思われます。たぶん。

とある少年の補習授業・2

午前の授業が終わった昼休み。

弁当を食べ終えた鷺谷は屋上にいた。理由は当然、人が来ないからである。だが、鷺谷は人付き合いが苦手なわけではない。実際数年前までは、結構な人数と関わり合いを持っていた。……それが学園都市ではスキルアウトと称される者達であったとしても、だ。
落ちこぼれのまち

（あの頃はよく屋上登ってたっけなあ）

空を見上げながらそんな物思いにふけていた鷺谷だったが、不意に校内に続くドアが開いて、鷺谷は思考を現実に戻した。

「いやがったな！」

「ったく、人が思い出に耽ってたってのに……」

ぞろぞろと何人かの男を引き連れてやってきたのは、補習前に鷺谷に因縁をつけて来たあの『姉御』だった。

「嫉ならソイツらでやれよ。俺にや関係ねえだろ」

「口の減らないガキだね！」

「そりゃどうも」

「褒めてねえよ！」

怒調を増す『姉御』だが、鷹月は相変わらず適当に流して出口に向かう。が、その前に『姉御』のオマケが立ちはだかった。オマケと言っても全員高校生なのだろう。鷺谷に比べると体つきも大きさも充分だった。

「わーっ たよ」

ハア、とため息をついてから鷺谷は弁当を放り投げた。

「殴るなり蹴るなり、好きにしろ」

そう呟いた瞬間、男の一人が拳を握ったのを見て、鷺谷は身構えた。が。

「待ちな！」

『姉御』の声が響いて、男が手を止めた。

「コイツに用があんのはあたいだけだ。アンタらは手出しするんじゃないよ！」

へえ、と鷺谷は感心した。今時の不良には珍しいタイプだ。

「いいね。アンタの下つてのも案外面白いかもな」

「あたいはアンタみたいなクソガキお断りだよ」

「そりゃ残念」

『姉御』が拳を握る。が。

キーンコーンカーンコーン、とチャイムが無情にも鳴り響いた。チツと舌打ちして、『姉御』は身を翻す。

「行くよ」

「あ、姉御!？」

「行くよっつってんだ！」

「は、はい！」

バタバタと追いかけて消えて行くオマケ達を見送ってから、鷺谷は弁当を拾い上げる。

「……仲間、か」

鷺谷の呟きは風に流され誰に届く事もなくかき消えた。

「こんのクツソ暑い日に体力トレーニングなんて、たっりいなー」

「つべこべ言ってるんじゃないよ。文句言ったら涼しくなんのか？ ああ？」

（あっきねえなあ、アイツら）

「はいちゅうもーく！」

掛けられた声に全員が背筋を伸ばした。

「体力講習を受け持つ黄泉川だ。よろしくじゃん」

「よろしくおねがいしまーす」

鷺谷は頭を下げながら、目の前に来た巨乳の緑ジャージの教師を見た。

体力トレーニングというからには体育の教師なのだろうが……。

（ぜってえ邪魔なだけだろ、アレ）

まあ、別にだからどうってわけでもないのだが。

「よし、じゃあさっそく持久走行してみようか」

（走れなくなるまで走れ、ね……）

鷺谷は黄泉川が行言った事を反芻しながら走っていた。既にたいていの人間の倍は走っているが……。

（走ればただひたすらに走れ、ってことでいいんかね）

息切れすらせず、頭を働かせる余裕があるというのも嫌な話だ。が、走れなくなっても終わることはないだろうから別にいいのかもしれない。

鷺谷は追いついた男を見やる。真っ先に手を上げた男だったが、未だに走り続けている。おそらく、また手を上げてでも走らされるのだろう。

（まったく、ヤな課題だ）

いつも朝夕と走っている鷺谷にしてみればこの程度はどうってことないが、この男の様なインドア派には相当キツイだろう。ましてや、この課題には女もいるのだから。あの『姉御』ですら既にトラックの中で座っているのだ。今走ってるヤツは相当根性があるやつだろう。

（ま、意図なんか知ってもどうなる訳じゃねえし、ほっとくか）

そう思い、前に意識を戻したその時、突然聞こえた声に思わず鷺谷は肩を跳ね上げた。誰かと思っただけでみると、『姉御』が黄泉川に突っかかっていた。そして、再びなにかもやもやしたものがこみ上げて来るのを感じた。それは、朝感じていたあのイライラだと思いだすのにそう時間はかからなかった。それがどうして起こるものなのかは分からなかったが。

「本当の事言ったらどうだよ！ 罰なんだろう。この講習はあたいらに罰を与える為の物なんだろう！？」

「勘違いじゃん」

「じゃあ、この持久走の理由を説明してみろ！」

「限界を超えることに意味があるんじゃない。あいつを見てみる」

そう言うのと、黄泉川はある生徒を指した。それはさっき鷺谷が追い抜かした生徒だった。

「まっさきに手を上げたのに、まだ走ってる」

黄泉川は顔を戻した。

「もう無理だって諦めたら、そこで終わる。自分だって気付かない力がまだあるかもしれないのに。こいつだって」

黄泉川は今度は座り込んでいる佐天を見やった。

「もうダメだって思ってから、一周走ったじゃん。その一周走った力って、なんなんだろうな」

気付けば、佐天のところまで走った鷺谷の足は止まっていた。

「能力開発だって同じ事じゃん。自分で自分の限界を決めちゃった
らダメじゃんってこと」

「——屁理屈言ってんじゃないええ！」

『姉御』の拳が黄泉川を捉える。しかし、パン！という音を響かせたのは、黄泉川の手でも、ましてや顔でもなかった。

「また、テメエか」

「うるせえよ」

鷲谷は、やっと理由が分かった。その心の重しのわけが。

「そりゃそうだ。俺達がいくらこんな補習を受けたって能力なんて
出るはずもねえ」

「なんだと!？」

考えてみれば当然だ。どんな人間だって、どんな能力者だって、
どんなアスリートだって。

最初から諦めているのではどんな目的だって達成できるわけがな
い。

あのもやもやしたものはそこから来ていたのだ。この補習に顔を
出しておきながら、どうせ能力なんて使えやしないという諦め。そ
して、何より、自分もそう少なからず思っていた事に腹を立ててい
たのだ。

「この女の言う事を屁理屈って捉えてる限り、俺やアンタに能力は
使えねえ」

「っ！ふざけんじゃ——」

「はい、ストップじゃーん」

『姉御』が拳を握った瞬間、鷺谷との間に黄泉川が割って入った。

「このっ！邪魔すんじゃないよ！」

「だから、時間切れじゃん」

「なんのだ！」

『姉御』が叫んだ瞬間、ぽつ、ぽつと雫が降り始めてあつという間にどしゃぶりになった。

「急いで校舎に戻れ！っておい、どこに行くじゃん！」

多くの生徒が慌てて校舎の中に急ぐ中、鷺谷は校庭の真ん中に向かっていた。

「気にすんな。すぐ戻るさ」

鷺谷が向かっていたその先には、例の少年が膝をついていた。

とある少年の補習授業・2（後書き）

無能力者編に入ってから思う事。あの『姉御』、名前はなんというのだろう。そもそも名前はついてるのだろうか。

とある少年の補習授業・3

「どうも、勘違いしている人もいるようなので、ここで一言、念押ししておきますね」

ぼーっと雨模様の外を眺めていると、突然、小萌とかいう先生がそんな事を言い始めた。

「この講習は、レベルアップ幻想御手使用者を罰する物ではありません」

その一言に、教室にいたほとんどの学生が顔を上げた。というよりも、視線を変えなかったのは鷺谷だけかもしれない。鷺谷は、何をいまさら、というように考えていた。鷺谷は、幻想御手を使つて警備員を攻撃するという犯罪・・いや、下手をすれば学園都市というシステムに対する反逆ともいえる行為を取ったのだ。その鷺谷と今講習を受けている学生が、同じ処罰ではおかしいだろう。

「たしかに、レベル能力を上げる為に安易に幻想御手に手を出したのは、褒められることではないですよ。ですが、それが必要以上に悔いたり、自分を責めたりする必要はありません。ですが、罰ということであれば、みなさん意識不明の重体に陥るといふ辛い経験をしています。既にその身をもってあがなっているのです。だから今度は、その経験を生かすべきだとは思いませんか？」

（経験？）

鷺谷はその時初めて顔を上げた。意味がわからなかったというのもあるし、興味があったからというのもあった。

「みなさんは、幻想御手を使用したことで、一度は本来持っていた

能力チカラよりも、上の能力を体験しましたね。つまり、黄泉川先生言う言う所の、『自分の思っている限界を超えたじゃん』ってやつです」

フツと鷺谷は口端を上げた。面白いと思ったからだ。皮肉ではなく、本当に面白いと思った。まさか、あの事件をそうやって捉えるとは思ってもなかった。

「さあ、それでは、最後の講習に入ります」

鷺谷はパタンと机の上の教科書の類を閉じた。やることがわかったから。

「その感覚を思い出して下さい。目を閉じて、集中して、出来るだけ細かく、能力チカラを使った時のことをイメージしてください。みなさん、それぞれの自分パーソナルリアリティだけの現実を獲得、あるいは、強固にする足がかりになるはずです」

言われたとおりに目を閉じ、思い出す。あの時のことを。あの日、自分に初めて能力チカラが宿った時のことを。そして、あの時、幾つもの能力を振るう自分達に立ち向かって来た、アイツらのことを。

雨が止んだ夕焼けの下、鷺谷は最後に行われた能力テストの結果を見ていた。

結果は——無能力者レベル0。

「ま、そう簡単に変われれば苦労しねえよな」

いつもの如く苦笑する。元々、能力に対する関心が薄かった鷺谷の反応はいつもこんな感じだった。諦めていた、と言っても過言ではないほどに。

「さて、帰る——ん？」

そこでふと、背中に気配を感じて振り向いた。

「どうした？」

そこにいたのは、あの持久走で意地を見せたあの生徒がいた。

「あ、いや、お礼を言いそびれていたから……」

「お礼？」

そういえば、雨が降って来た時に肩を貸した気がする。

「あー、別に礼なんざいいのにな」

「そ、そうかい？ すまなかったね」

「謝られても困るけどな」

苦笑するとその男も苦笑を返した。

「どうだった？」

「なにがだ？」

「能力だよ」

あーと間延びした声を出してから、鷺谷はまた苦笑しながら「0だよ」と答えた。鷺谷も同じ質問を返すと「僕も」という返事。

「ま、いつも通りだからあんま気にしてねえけどな」

そう言うのと、男は少し驚いたような顔をしてから、言った。

「強いんだね」

「強い？」

思わず聞き返す。ああ、と男は苦笑しながら頷いた。

「僕なんか、いつも落ち込んでしまuish、特に今日なんかはちょっと期待もあったからね」

「単に諦めてるだけだ。強くなんかねえよ」

「そうなのかい？」

「そうだ」

なんとなく沈黙が続いた。が、「ただ」と鷺谷はその沈黙を破った。

「『次は頑張ろう』。今回は、そういう気持ちになれた」

「そうだね」

「ああ」

男と共に頷いてから。

「「また、がんばろう」」

「ん？」

「「え？」」

何故か一つ増えた声に、その声の方を向いてみる。

「「「あ」」」

いつからいたのか、そこには佐天がいた。

「ど、どうも」

「どうも」

なんとなく恥ずかしげに挨拶をかわす二人。その間にいた鷺谷は思わず「くくっ」っと吹き出した。男も佐天も声は出さずとも頬を緩める。

そんな中、鷺谷は黙って歩き出してから、いつも通り指でカードを弾こうとして、少し考えてから、カードをポケットに押し込んだ。歩いている最中、前から複数の声がして鷺谷は顔を上げた。女三人、男一人という珍しいグループ。鷺谷はその一人の男の顔を見て、口端を上げた。

そして、そのグループとすれ違う瞬間、「ありがとう」と呟いた。聞こえていたかはわからない。が、鷺谷は振り向くことなく歩みを進めた。

その帰り道。鷺谷はふと変な音を聞いた。甲高い、ノイズの様な音。それが路上に停められている車から出ているのを見て、眉をひそめた。決して聞いている気持ちのいい音ではない。まったく、と思ってその車に近づいた時、その車のちょうど横にある路地から複数の男の声がして、鷺谷はそこを覗いた。そこでは複数の男が、一人の女を囲んでいた。が、様子がおかしい。その女はま

だ何もされてないようなのに、頭を押さえてうずくまっている。なんだ？ そう思った時。

「おい！そこで何してやがる！」

振り向くと、おそらくその男達の仲間であろう男が数人、こちらに近づいていた。チツ、と舌打ちをして逃げようとした――が、鷺谷は止まった。その女と偶然目があったのだ。その女の今にも泣きそうな目を。再び舌打ちをしてから、鷺谷は堂々と路地の入口に立った。

「おいおいおい、どうしましたかあ？俺達は今忙しいんだ。ガキの相手をしてる暇はねえんだ、とっとと失せな」

「いい趣味してんなあ」

男の挑発にも乗らず、鷺谷は嘲笑する。

「女一人に男何人いるんだ？まったく、これで全員だよなあ？頭はいったいどのどいつだ？面がしれてるぜ？」

「いい度胸してんなあオイ。俺達が黒妻綿流の――」

そこまで言ったところでその男の声は途絶えた。なぜなら、鷺谷の拳が男の顔を潰したからだ。

「オイ！テメエ誰に手えだしたかわかってんだろなあ！」

当然、それに反応した男が一人、後ろから鷺谷に飛びかかって来た。が、鷺谷はそれに反応してみせた。振り返りながら肘を胸部にめり込ませ、その肘を軸にして跳ね上げた拳で顔面を割り、さらにその男の急所を膝でつぶした。

その鮮やかかつ残酷すぎる手に男達は怯む。ただのガキだと思っていたのに、とんだダークホースだ。そして、そのダークホースは言い放った。

「デメエらに、その名を騙ったことの意味ってのを叩き込んでやる」
地面で悶絶する男の腹を踏みつけて黙らせてから言った。

「黒妻さんの名前を、『ビッグスパイダー』の名前を穢したんだ。
きっちりケジメ付けてもらうぜ」

とある少年の補習授業・3（後書き）

補習授業の回は終わりですが、まだ鷺谷が主人公です。

彼を助けた少年は

「へっへっへっへ」

鷹月は自分を囲んだ男達を見やる。

「えっと、何か用———ですよね」

「ああ、鷹月暁さんよ。俺の顔を覚えちゃくれてねえか？」

おそろおそろ尋ねてみる。その男達は自分を知っているらしい、
が。

「えっと、友達、ですか？」

「んなわけあるかあ！」

当然、記憶喪失である鷹月が覚えてるはずもない。

「三ヶ月も前の話だ……俺はあるグループのアタマだった」
「はあ」

「小せえグループだった。けど、悪いヤツはいなかった。それを
メエはツブしたんだっ！」

「えと、ごめん、なさい？」

「悔しかった。何も出来ねえ自分が、そして待った。お前に復讐す
る事が出来る日を！」

自分は一体何をやったんだろう？と少々不安になってなんとなく
謝ってみた。が、男は聞いてはくれなかった。どうやら、自分に起
きた出来事を語るのに夢中のようなのだ。

「えっと、どんな仲間だったんですか？」

「いいヤツだったさ……一緒に停めてある車に落書きしたり、ポストの入り口をガムテープでふさいでみたり——テメエ、俺達をしょっ引いた癖に忘れやがったのか！」

やる事ちっさ！と思いつつも口には出さなかった。そして、呟いた。

「……どうして捕まえたんだろう、僕」

「今更それを言うんじゃないやねえ！だが！俺は力を手にした！お前を倒す力を——」

「さっさと行け、新入り」

「嘘だああああ！！！俺噛ませ犬かよおおお！！！」

悲鳴を上げながらも、ちゃんと拳を握っている事に気がついた時には、既にその拳が放たれていた。が。

「へ？」

「あ」

自分でもよくわからないまま、パン！と男の拳を受け止めていた。

（体が、勝手に——？）

直後、男が『あがっ！』と変な声を上げて倒れた。

「なに？なに？」

よくわからないまま、なんとなく敵を倒してしまった事に驚く鷹月を見ながら、男の一人が呟いた。

「エレクトロマスター発電能力者——とりあえず、能力者ってわかりやいい」
「え？」

次の瞬間だった。何か変な音が聞こえたと思ったら、突然鷹月は体の自由が利かなくなった。それだけではない。全身が感電したように動かない。

（な、に、が……！？）

「なんだ？今までの奴とは感じが違うな……まあ、いい。効果があったならあったで結構だからな」

ニヤリと男が笑い、その手に持った鉄パイプを掲げる。やられる——！そう思って目を瞑った時だった。

「おいおい、誰かと思えばこんなザコ相手に何やってんだ？」

その口ぶりからして、恐らくは自分の知り合いなのだろうがその声は鷹月が聞いた事のない声だった。しかし、確認しようにも体が動かない。

「テメエ能力者じゃねえな？」

「ああ、よくわかったな。それとも、この音が何か関係してんのか？」

「まさか、テメエか？能力者でもねえ癖に俺達の邪魔をする男ってのは。それなら、俺達の頭があくろづまわたるの黒妻綿流って事も知ってんだろかな？」

「知らないね。お前らの頭なんて。黒妻さんはこんな事をする人じやなかった」

「なんだと！？」

「悪いな。テメエらの頭の居場所——教えてもらうぜ！」

「チッ……逃げ足の速えヤツばっかだな」

鷺谷は男達が走って行った方を見ながら呟く。それから、後ろを振り向いた。

「いいかげん起きたらどうだ？もうあの音も鳴ってねえだろ？」

しかし、いつまで経っても起き上がろうとしない鷹月を鷺谷は不審に思った。が、原因もわからない以上鷺谷にはどうする事も出来ない。

チツと舌打ちして、鷺谷は携帯を取り出した。

『はい。こちら風紀委員第一七七支部。どうかしましたか？』

なぜこういう時に限って知り合いが出るんだろうな、とため息をつく。が、黙っていても伝わらないので仕方なく鷺谷は声を出した。

「あー、路上でスキルアウトに絡まれてるヤツを——」

『鷺谷くん！？その声、鷺谷くんですよね！？』

「見つけたんで通報した。場所は第7学区の——」

初春を無視して、全部言伝え終わったところで電話を切る後は勝手に来てくれるだろう。そう思ってその場を離れようとした鷺谷だったが。

「風紀委員ですよ！ってあら？」
「またお早いご登場で……」

いきなり路地の入口にあらわれた風紀委員の女を見てげんりする。まさか空間移動能力者がいるとは思わなかった。

「スキルアウトに襲われている、という通報のはずでしたが」
「不運にも通報した所を見つかって、追っ払った。正当防衛なら認められてるだろ？」

「はあ……それで、襲われた方はどちらに？」

風紀委員の女の問いに、鷺谷は親指で後ろを指す。ひょいと鷺谷の後ろを覗いてその女は驚いたように呟いた。

「鷹月じゃありませんの」

またコイツの知り合いかよ、と呆れる。一体コイツはどんなハレムを作る気なのだろう。女ばかりだ。が、そんなことはどうでもいい。ともかく、保護者は来てくれたのだから鷺谷がここにいる理由はもうない。

「んじゃ、俺はこれで――」

そう言ってその場を離れようとした時、突然女が前に現れた。

「なんだよ」

「一応、事情を聞きたいので支部まで来ていただけると嬉しいのですが？」

「悪いが俺は暇じゃ――」

「手間は取らせませんわ。支部へも一瞬ですし、なんでしたら待ち合わせ場所へも一瞬で送って差し上げますわよ？」

ないと言おうとしたところに声を重ねられて、鷺谷は諦めたようにため息をついた。どうやら、どうしても連れて行く気のようなだ。

「理解が早いようで助かりますわ」

では参りましょうか、と女が鷺谷と鷹月の手を握る。
直後、その場から三人の姿は消えた。

彼を助けた少年は（後書き）

最近調子が良くてガンガン投稿できるのはいいけど、文が雑になつてないか、それだけが心配です。

再会、覚悟、そしてまた・・・

「何やってんだかなあ……」

「どうかなさいました？」

「いや、独り言だ。気にしないでくれ」

呟きに反応されて、鷺谷は慌ててそう断った。ここは風紀委員の
支部。ジャツジメント どうも最近こういう事件が多発していて、なにぶん情報が足りないらしく、なにか変わった事でもいいから、ということとで事情を話させられることになったのだ。それはいい。しかし、鷺谷はそわそわと落ち着かなかった。

かつてスキルアウトに所属していた身としては、風紀委員に対する感情はあまりいいものではない。そして、ここには鷹月、初春と
いうある意味因縁のある相手がいる支部ということも落ち着かない原因の一つだった。

「で、男どもは『ビッグスパイダー』を名乗っていた———という
ことでよろしいのです？ はあ、こちらも既にこちらが持っている情
報しかありませんでしたか……」

「悪かったな」

「まあ、鷹月を助けていただき、その上情報提供までご協力くださ
ったのですから、こちらとしては感謝の一言に尽きますわ」

「いや、ま、アイツにゃ借りがあるしな。頭を下げられるほどの事
でもねえよ」

白井と名乗った女にそんな言葉を掛けられて困惑する。まさか風
紀委員から頭を下げられるなんて思ってもみなかった。

「しかし……アイツはどうしちゃったんだ？」

「アイツ、とは？」

「鷹月だよ」

支部に連れて来られた鷹月は、戻ってきて五分ほどでようやく口が聞けるくらいに回復した。が、鷺谷に対する最初の言葉は「ありがとうございます」だった。

「よそよそしいっつーか、初対面です、みたいな言い方しやがって」「それは説明したでしょう。……信じられないというなら仕方ないかもしれませんが」

「まあ、なあ」

鷹月は記憶喪失。そう聞かされた時は驚いたが、今となってはなんとなくそう思えるようになっていた。でなければ、鷹月があの不良共^{ザコ}に負けるとは思わないからだ。……ヤツらに負けたようなヤツに自分が負けたと思いたくなかったというのもあるだろうが。

「まあとにかく、今日は助かりましたわ。あなたのような不良でも、こうした素直な方がいてくださるといのは意外でしたけど」

「いろいろいるってことだ。無能力者^{スキルアウト}の中にも、な」

席を立ち、話しながら、鷺谷は出口に向かう。送って差し上げましょうか？と聞かれたが、それを断って鷺谷が部屋を出ようとした時。そのドアが勝手に開いた。そして、その先にいた人物を見て、目を大きく見開いた。

「固法……さん？」

「え？」

「驚いたわ。まさか鷺谷くんが支部にいたなんて」

「俺だって、まさか風紀委員を助けちまうなんて思いもしませんでしたよ」

支部から少し離れた公園。そこで、二人はベンチに腰掛けて話していた。それまで、終始笑顔で話していた鷺谷だったが、そこで視線を落とした。

「最近の事件のことですけど」

「ええ……」

固法もそれを察してか、声のトーンを落とす。

「俺は、絶対に黒妻さんじゃない。そう思ってます」

「……」

「黒妻さんは、あんなことする人じゃない。『ビッグスパイダー』だって、勝手に名前を使われてるだけだ」

「……」

「なんで」

そこまで言って、鷺谷は勢いよくベンチを立った。その顔に込められている感情は、怒りだった。

「なんで何も言ってくれないんですか！？あの頃の『ビッグスパイダー』を知ってる人なら誰だってそう思うでしょう！？」

しかし、固法は何も言わない。それを感じて、そうですよね、と

眩いて鷺谷は背を向けた。

「……固法さんの居場所は、もう変わっちゃったんですね」

それを聞いて、固法は弾けたように顔を上げた。

「どうするつもり?!」

「そいつは、黒妻さんの名前を、『ビッグスパイダー』《オレたち》
の名前を貶めた。だったら――」

鷺谷は拳を握って歩き出す。

「そいつをぶちのめす。それが『ビッグスパイダー』の名前背負った俺のやるべき事です」

「だあああああっ!!」

「がああアああっ!」

とある路地裏に雄叫びと悲鳴が上がる。その雄叫びの正体は、青
い革のジャンパーに身を包んだ少年――鷺谷だ。

「く、くそっ! なんなんだこのガキ!!」

そう声を上げた男も即座に鷺谷の木刀に倒れる。既に鷺谷自身も
いくらか怪我を負い、息も上がってきているが、それでも木刀を振
るう。

「出て来いよ……」

壁のように立ちふさがる男を蹴散らして鷺谷は吼える。

「出て来いよニセモノおおおおおおおっ!!」

『ビッグスパイダー』の本拠地はすぐに見つかった。いつも能力者の襲撃には必ずと言っていいほどある、あのワゴン。それをつけて来るのはとても簡単だった。何か貴重な物でも乗せているのか、そのワゴンの速度が自転車でもあれば簡単について行ける速度だったからだ。本拠地を見つければ、あとは簡単。その本拠地に殴り込みをかければそいつは出て来ると踏んでいた。

「まったく、今度はなんだ!」

響いた声に、周囲の男がざわざわと騒ぎ始める。おでましか、と鷺谷は振り返る。

「やっと出てきたなニセ、モ、ノ……?」

そして、視線の先に現れた人物を見て凍りついた。そして、なんとか口を動かす。

「アンタ……何やってんだ……」

「テメエ、は」

向こうも気付いたようだ。鷺谷はギリ、と歯を噛みしめて叫んだ。

「何やってんだよ! 蛇谷さん!」

「……ッ！ テメエら、何やってる！ こんなガキ一人相手に出来ねえのか テメエらは！」

「蛇谷さん！？」

驚きの声を上げた刹那、後ろに雄叫びを聞いて慌てて身を翻す。ブン！ と風を切る音を残して鉄パイプが鼻先をかすめて行く。

「つく……畜生！」

しばらく逡巡してから、驚谷はその場から駆けだした。

再会、覚悟、そしてまた・・・（後書き）

スキルアウトってひねくれてるけどあまり悪いヤツってない気がします。いないってわけでもないですけど。

居場所

「はぁ……はぁ……まい、たか、いつっ！」

プツと唾を吐きだすと、出て来たのは赤い血だった。どうやら口を切ったらしい。他にも服で隠れて見えはしないが結構な数のあざが出来ている事だろう。なにせ、体中が痛い。しかし、今はそんなことは気にならなかった。それだけ、蛇谷が黒妻を名乗っていたのはショックだった。蛇谷は、黒妻と共にかつて『ビッグスパイダー』を率いていた男だ。それが今や、能力者狩りを行う無法者の集まりと化した『ビッグスパイダー』のリーダーとして黒妻綿流を名乗っている。

「畜生……どうして……」

ビルの壁に寄りかかり、拳を握る。どうしてこんなことになってしまったのだろう。どうして自分は何もできないのだろうかという不甲斐なさがこみ上げる。

「畜生……っ！」

パタパタと、顔の下のコクリートに雫が落ちる。もう表通りだったが、それでも、悔しくて悔しくてそれは滴り落ちる。居場所を失くし、そして、それを取り戻す為に戦おうにも、相手はその居場所。鷺谷には、その居場所に力を振るう事が出来なかった。情けない現実。それを突き付けられ、鷺谷の心は悲鳴を上げていた。そんな時。

「わし、や？」

聞いたことあるような声が耳に届き、慌ててぐいと目元をぬぐって鷺谷は振り返った。

「なんか用か？」

「いや、たまたま通りかかったただけなんだけど——ってボロボロじゃん！どうしたの！？」

「何でもねえよ。ほっとけ。じゃあな」

そう言って歩こうとした鷺谷だったが、途端に腕に走った激痛に顔をしかめた。

「おま、なにしやがる！」

「ご、ごめ——っていいから！」

「お、おい！引っ張んなって痛ててて！放せ！引っ張るな！頼むから、自分で歩くから止まってくれ痛ええええええからああああ！！！」

（どうなってんだよ）

鷺谷は周囲を見回して頭を抑える。

（どうしてこうなった……っ！？）

『ビッグスパイダー』の名を穢すヤツらをぶちのめす為にヤツらのアジトに出向いたが、黒妻を騙っていたのが、蛇谷で、どうしよ

うもなくなつて逃げ出して、それで……それで。

(どうして佐天アイッの部屋にいるんだあああっ!?)

「ちょ、大丈夫!? 頭怪我してんの!?!」

鷺谷を最大の困惑に追い込んだ元凶が、慌てたように声をかけて来る。違えよっ! と叫びたかったが、鷺谷は身体のとろくに巻き付けられたお世辞にも上手いとは言えないそれを見て留まった。

「お前、包帯巻くの上手いな」

「そう? 初めてだったから自信なかったけど」

「お前ならエジプト人も真っ青なミイラが作れそうだ」

「それどういう意味よ!?!」

「そりやお前、そのまんまの——痛えから包帯の上から突くんじゃねえ!」

ぎゃあああ! と悲鳴じみた声を上げて、なんとかやめさせてから、んで、と佐天に尋ねる。

「どういうつもりだ? わざわざこんなことまで」

御世辞にも上手いとは言えない包帯を指さす。いくらクラスメイトとはいえ、佐天と鷺谷が話したのはついこの間のこと。わざわざ部屋に連れ込んで傷の手当てをされるほどの関係ではないはずだ。

「だって、泣いてたじゃん」

「うるせえよっ! それだけじゃねえだろ!」

鷺谷が恥ずかしさをごまかすように怒鳴ると、佐天はごめんごめんと笑う。が、そのすぐ後、佐天は笑顔を消した。

「放っておけなかったんだ。鷺谷、そっくりだったから——あ
たしに」

「いやいや、似てねえだろ」

「そうじゃなくて！なんていうか、誰にも話さないで思いつめてた
っていうか——」

正直、驚いた。まさか、当てられようとは思ってもみなかった。

「……それでも、お前にゃ関係ねえだろ」

「そりゃ、そうかもしれないけど、放っておけないよ。だから、話
して」

「なんでお前に話さなくちゃなんねえんだよ」

「わかんない。けど、聞く事くらいならあたしにだってできる。ず
っと一人で抱え込んで、取り返しのつかないことになっちゃいそう
なこと、あったから」

少し黙ってから、チツと舌打ちする。コイツは間違いなく、話を
聞くまで自分を帰しそうにない気がする。それも、好奇心で聞いて
るんだったらまだキレて帰ってしまえるが、コイツは本当に心配し
ている。

「昔、つっても三年前ぐらいか、俺は、あるスキルアウトに会った。
スキルアウトつつつても、そこらみたい有能力者にケンカ吹っかけ
るようなんじゃないかって、そこを気に入ったヤツらが勝手にたむろっ
てバカ話をするとか、そう言うレベル。ケンカだって、することに
やしたけど、不運にも不良どもに絡まれちまったガキを助けたりと
か、仲間が別のグループに脅された時にゃそいつ助ける為に殴り込
みするとか、そんなケンカだ。俺も能力者数人に絡まれてたところ
を助けられてそいつらを知って、そいつらと一緒に行動するように

なった。そりゃ、そんなとき俺は小学生。当然、そいつらの中じゃ反対するヤツらもいた。でも、そのボスは、いいって言うてくれた」

「それって……『ビッグスパイダー』？」

「知ってたか。まあ、最近有名だからな。それから、一年だったか。仲間の一人が別のグループに攫われてよ。黒妻さんが一人で助けに行つて——罨だったんだよ。それで、『ビッグスパイダー』は解散。でも、俺は学校に行くのも嫌でさ。いろんなスキルアウトに入ったりした。でも、どこも長くは続かなかったな。いい人はいたけど、大抵は子供だからつって追い出されたよ。しぶしぶ学校に来てみても、誰かとつるむ気はしなかった」

「そっか、だから……」

「もう、いいだろ。俺は帰る」

苛立ちと共にそう言つて立ち上がると、佐天が慌てて鷺谷を留めた。

「なんだよ？」

「じゃあ、その傷は？」

「……『ビッグスパイダー』に殴り込みをかけて、ヤキがまわった。それだけだ」

何を話してるんだ俺は、と玄関に向かって歩き出す。そして、ドアを開いた時、あのさ、という声が鷺谷を止めた。

「今度はなんだ？」

「居場所なら、あるから。鷺谷が気に入るかどうかはわからないけど」

「なんで、そこまでできる？」

「わかるから。居場所がほしいって気持ち」

その答えを聞いた後、驚谷は黙って部屋を出て行った。

居場所（後書き）

佐天さんの回。

シリアスな佐天さんとの絡みは個人的に書いてて好きなシーンです。たぶん今後書く回数は減るでしょうけど。

次回は黒妻さんと固法先輩が大暴れする回。鷺谷も暴れさせたかったです……。

失くした居場所

荒れた街並みを、眺める。見慣れた街だ。かつて、まだ一人じゃなかった頃に見た街。ただ、もう変わってしまった。自分も仲間達も。

（居場所ならある——ね）

昨日かけられた言葉を思い出す。が、その言葉は、すぐ下から響いた声にかき消された。

「オイ聞いたか！？アンチスキル警備員が一斉摘発って！」

「マジかよ！やっぱ、ハシヤギすぎたんじゃねえの？黒妻ってヤツ」

「野郎！！迷惑掛けやがって！！」

チツと舌打ちして鷺谷は階段へ向かう。

（警備員ごときに邪魔されてたまるかよ——っ！！）

歯を食いしばって、痛む体を叱咤して走る。そして、アジトの入口が見えた時だった。

「鷺谷くん！？」

「あなたは！？」

「え！？誰！？」

振り返り、姿を確認する。固法と、白井と、あとは名前は知らないがたしか鷹月達の知り合いだ。そして、その内の二人の右腕を見^{ジャッジメント}て、鷺谷は急いで走る。どうして、警備員の摘発に風紀委員がいる

のかは知らないが、どうせ碌なことではない。そして、入口についた時、その中で大暴れする人物を見て目を見開く。

「黒妻さん!？」

「鷺谷か!？なんでここにいる!？まさかお前も!？」

驚いた。しかし、それも一瞬。鷺谷は黒妻のところを駆けだし、木刀を振るった。その後ろ、黒妻を狙う鉄パイプに。

「テメエら……誰の背中狙ってっかわかってんのか!？」

それを弾き、さらに木刀を振るおうとしたところで、バカ野郎!と黒妻の声が響いた。

「手え出すんじゃねえ!」

「でも!」

黒妻が鉄パイプを持った男を蹴り飛ばす。が、さらに鷺谷まで突き飛ばされた。

「黒妻さん!」

「テメエら何やってやがる!コイツらだって能力者と同じだ!武器と数で押すんだよ!」

蛇谷の掛け声とともに手下がジャカジャカツ!と拳銃を取り出す。その時。

「待ちなさい!」

響いた声に、鷺谷は振り返る。そこには、先ほどあった固法が立

つ
て
い
た。

「美偉？」

「固法さん!？」

驚く二人をよそに、固法が笑みを浮かべる。

「蛇谷君。貴方ずいぶん下衆な男になり下がったわね。数に物を言わせて、その上武器？」

「う、うるせえ！俺達を裏切って風紀委員になった奴なんか何がわかる！テメエら！俺達の力見せてやれ！」

掛け声に応じてその手下どもが銃口を向ける。が、その銃が火を吹く前に、その銃身を鉄の針が貫いた。そして、その前に白井が現れる。

「今度は直接体内にお見舞いしましょうか？」

「だ、だが、俺達にはアレが」

「アレって」

声と共にコインを弾く音が響く。直後、壁が吹き飛んだ。その奥には驚谷も見覚えのある車が転がっていた。

「これのこと？ まさか、同じ罠に二度も引つかかるなんて思つてないわよね」

ぐ、と氣圧されたように唸った後、蛇谷はやケクソ氣味に叫んだ。

「やれ！ やつちまええええええええ！」

思い出した。かつて幻想御手の副作用で意識を失くした時、夢で見たあの女。常盤台の制服を着た、電撃使用の頂点。エレクトロマスター

「で、でもあれ、常盤台の『超電磁砲』レールガンっすよ！」

ざわざわと男達が騒ぎだす。が、その声を発した男に拳銃が突き付けられ、静まる。

「やるんだよ！でねえと俺がテメエらをやっちまうぞ！！オラ、行けえ！」

ドツと蛇谷に蹴られ、男が黒妻の前に躍り出る。その男を殴り飛ばした黒妻の背から襲いかかる人影を見て、鷺谷は叫び、手の木刀を握り直して走り寄ろうとした。が。

「手え出すな！鷺谷！」

「そんな！」

不服そうに声を上げるが、黒妻は意に介していないように、声を上げる。

「ほら、もちっと気合入れて来ねえと張りあいねえぞ！」

その挑発に乗せられたのか、一人の男がポケットに手をつ突っ込み、それを引き抜く、がその手は一瞬でねじり上げられた。

「これは没収！それから——このスタンガンもね！」

見えないはずの胸ポケットの中身を使い、男を昏倒させる。

「それが、お前の能力か。すげえじゃねえか」
「でしょ」

ぐ、と鷺谷は唇を噛みしめる。何もできない。また。なぜ黒妻が手を出すなというのが、わからない。が、それでも、鷺谷は黒妻の言葉を無視できなかった。しかし、鷺谷は意を決して固法の下へ駆け出す。

「鷺谷!?!」

「え!?! きゃあ!」

木刀を走りこんだ勢いのまま振るう。さっきと同じように、固法を狙った金属バットをすくい上げて弾く。

「あ、ありがとう」

「固法さんと黒妻さんの背中ぐらいは守らせて下さい! 俺だって『ビッグスパイダー』です!」

「鷺谷!」

「俺だって、ずっと待ってたんだ! こうやって黒妻さんと一緒にケンカ出来る日を!」

「ッ! …… バカ野郎が!」

黒妻が笑みを浮かべる。鷺谷はありがとうございます! と叫びながら男が取り落としたそのバットを投げる。そのバットは、拳銃で黒妻を狙っていた男の目の前を通り過ぎ、驚いた男が驚いた隙に間合いを詰めて拳銃を手で掴み、ひねり上げる。暴発した一発が天井を穿ち、その時点で鷺谷は手を放した。その男は慌てて銃を鷺谷に向け、引き金が引かれる。

カチンと乾いた音がした。

男が驚いてる隙に固法が男の腕を捻り上げる。

「すごいわね。そんなところで覚えたのかしら？」

「二年あったんです。忘れました！」

笑いながら手を出す固法に驚谷も笑いながら、奪った銃倉^{マガジン}を手渡した。

「ごはっ……」

ドサツと最後の一人が倒れた音と共に、沈黙が訪れる。が、くくくと突然蛇谷が笑いだした。

「これで勝ったつもりかよ」

「蛇谷さん！アンタまだ……」

「これを見ろお！」

バツと皮ジャンを開いたその中には、何本もの茶色い筒の様なものが身体に巻き付けられていた。

「ダイナマイト！？」

「うわ、いつの時代の方ですよ」

なにやら変なりアクションが飛んで来たような気もするが、気にしないでおく。

「これ以上近づいてみる。みんなドカーンだ！」

「蛇谷さん……」

「どうだ、どうした、ビビったか！」

それに対する黒妻の対応は冷めたものだった。

「あーあ、メンドクせえ」

呟きと共に、皮ジャンを脱ぐ。背中の大きな雲の刺青が露わになる。

「来るな！来るなよ！ドカーンだぞ！」

「蛇谷。昔は楽しかったよなあ。みんなでつるんで、バカやって。それがどうしちまったよ」

「来る……な」

黒妻が一步進むたび、蛇谷が一步退く。次第に追いつめられ、そして。

黒妻の拳が蛇谷を捉えた。

ダイナマイトと共に崩れる蛇谷を、鷲谷はじつと見る。

「しょうがなかった。しょうがなかったんだよ——俺達の居場所はどこしかねえ。『ビッグスパイダー』をまとめるには、俺が黒妻じゃなきゃダメだったんだ！だから——今更テメエなんかいらねえんだああああっ！！」

「黒妻さん！」

突然ナイフを取り出し蛇谷は黒妻に襲いかかる。しかし、その後、顔面に黒妻の拳が突き刺さった。

「蛇谷——居場所ってのは、自分が自分でいられる場所を言う

んだよ」

ぐ、と鷺谷は唇を噛む。これで。これで本当に。
『ビッグスパイダー』は無くなってしまった。

少年の新しい居場所

「あー、終わった終わった」

黒妻が連行される『ビッグスパイダー』の面々を見て呟く。そして、隣の固法の前に両手を突き出す。

「ほら」

「黒妻さん……」

「美偉！」

わかっていたことだった。たとえ相手がスキルアウトだろうとも、黒妻は何十にもの人を病院送りにしたのだ。そして、それを防ぐために黒妻は鷺谷に手を出させなかった。

「黒妻綿流。あなたを暴行傷害の容疑で拘束します」

「固法さん！……だったら、だったら俺だって！」

「鷺谷君！」

「蛇谷さんだけじゃない！俺だって、居場所はここしかない！」

「鷺谷！」

黒妻の声に肩を跳ね上げる。止まった鷺谷の頭に、黒妻の手が載せられる。

「居場所は誰にだって必要だ。そして、お前の居場所がここにあって、たつてことだって知ってるさ」

「なら居させて下さいよ！」

「なかったらないで、テメエで探すんだよ。作るもよし、見つけるもよし。俺にだって出来たんだ。お前に出来ねえはずねえだろ」

「でも！」

「お前だって一人じゃねえ。ちゃんとお前のことわかってくれるやつだっているさ」

「……」

黙り込んだのを確かめて、黒妻は再び固法に両手を差し出し、そして固法がそこに手錠をかけた。

「コイツのこと、頼めるか？」

「……しょうがないわね」

微笑みながら、固法は頷いた。

「こんにちはー」

「こんにちは」

「こんにちは、二人とも」

初春に続いて、鷹月も支部に足を踏み入れる。

「やっと元気になったみたいでよかったです」

「あなたの問題の方が深刻なのに、心配させてごめんなさいね」

「いえ。いつもお世話になってますから、大丈夫です。あ、初春、始末書の書き方教えてくれない？」

「えー、またですか？なんでそんなに始末書ばかり」

「だって、どうしてか知らないけど、机の中始末書ばかりなんだもん」

がつくりと頭を垂らす初春に苦笑しながら、鷹月がそう言うのと、初春が何かを思いついたように頭を上げた。

「固法先輩！鷹月くんは記憶喪失なんです！」

「そ、そうね」

「だから、始末書免除というわけには！」

「うーん……そうねー」

指を顎に宛てて考える。しかし。

「ダメだよ。結局全部僕がやっちゃったことなんだから。責任取らなきゃ」

「ごめんなさいね。本人がやる気だから、手伝ってあげてくれる？」

「えー！そんなあ！」

「ご愁傷様ですわね。初春」

声の方を向いて、初春が頬を膨らませる。

「そんなこと言うなら白井さんも手伝ってくださいよー！」

「生憎ですが、わたくし、馬に蹴られる趣味はありませんの」

「馬に蹴られるってなんですかー！」

「手伝ってあげたいけど、私始末書の書き方なんてわからないのよねー」

「お姉様。それなら黒子が手取り足取り教えて差し上げますの」

「あー！もうー！くつつくなーっ！」

ぎゃああー！と二人の悲鳴が上がる中、風紀委員の部屋のドアが再び開く。

「おっはよー！あれ！？なんかあたしがいないうちに面白そうな光景が！」

「つつか、風紀委員の支部がこんなに騒がしくっていいのかよ。そもそも俺ら部外者だろ！？」

「「「え！？」「」」」

佐天の後に響いた聞いたことあるような声に、佐天、鷹月を除いた四名の声が一致する。

「鷺谷君！？どうしてここに！？」

「いや、どうしてと言われても……よ、よろしくお願いします」

はあ、とため息をついて、固法は叫んだ。

「ここは！子供の溜まり場じゃないのよーっ！！」

「初春、ちょっとここどうしたらいいのかな？」

「えと、ここはですね——　ってまだこんなにあるんですか！？どうしたらこんなに溜まるんですか！？」

「ああ、お姉様、早く黒子の席にお座りになってさあ早く！」

「だーかーらー、くつつくなっつつてんだろがああああっ！しかもどさくさにまぎれてどこ触ってんだあああっ！」

再び阿鼻叫喚の図と化した部屋の中、鷺谷は呆然と立ち尽くす。

「なあ、マジでいいのか？これ……」

「んーま、いいんじゃない？だいたいこんなモンだし」

「ちよっと！誤解を招くような言い方はやめなさい！いつもはこんな感じじゃないのよ！」

「ああ、なんと慎ましやかなお姉様……黒子はっ！黒子は！」

「だからどさくさにまぎれて変なところ触ってんじゃないわよ！」

「うえーん。全然終わりそうにないじゃないですか。そもそもどうやったら本人の記憶なしで始末書なんて書けるんですか」

「えっと、四月二十四日に車泥棒を確保の際に——え！？あれ！？でもこっちの記録じゃ——」

「俺風紀委員でもないのに激しく不安なんだが……」

鷺谷はため息をつく。しかし、その顔には苦笑が浮かんでいた。ここが自分の居場所になるかはわからない。でも、居心地は悪くなさそうだった。

とある少年の補習労働（前書き）

新章突入です

とある少年の補習労働

「はあー」

サツサツサとリズムカルに箒が鳴る。

「はあー」

子供たちの声が青空に響く。

「はああー」

「どうしたの？」

ようやく鷹月が反応したので、鷺谷は着せられたエプロンをつまんで言った。

「な鷹月」

「なに？」

「どうして、どうして！俺は！こんなところでボランティアなんかしてんだよおおおおおっ！！！！？」

「どうしてって……テストの点数が悪かったから——」

「俺が悪かったみたいに言うんじゃないっ！俺のテスト見てみるか！？真ん中より上な自信はあるぞ！いいか！テストの点数が悪かったのは佐天なんだ！」

鷹月に向かって叫ぶながら、鷺谷は今朝のことを思い出す。

今朝起きていつものように着替えると、なぜか佐天からメール。

見てみれば、制服でなぜか来いという。一体何なんだと思いつつも、別段やることはないので軽い気持ちでついて来た結果が。

「まさかペナルティボランティアに巻き込まれるとはな」

「そんな身も蓋もないこと言わないでよー、何事も経験経験！ほら、手を動かして！」

まったく、と思い、ふと鷹月を見ると、こめかみを押さえて俯いていた。何かあったのかと声をかけようとしたその時。

「鷹月くん？」

鷹月の後ろから初春が声をかけた。その目は心配そうに鷹月を見つめている。

「ん、大丈夫」

「本当ですか？」

「うん」

そうですか、と笑顔を見せる初春を見て、鷺谷は佐天に問いかける。

「その上、俺はあのいちやついてんを見なきゃいけねえのか？」

「あ、あはははは。でも、初春が心配するのもわかるけどね」

苦笑した後の佐天の言葉に、鷺谷はどうしてだ？と尋ねた。

「鷹月には話してないんだけど、あいつ、チャイルドエラー『置き去り』らしいんだよね」

「あいつが？」

鷺谷が確認するように尋ねると、佐天は頷いた。

「初春から聞いた話なんだけど、^{レベルアップ}幻想御手事件の時に木山先生と一緒にいたんだって。どうして一緒にいたのか、詳しい事は教えてくれなかったけど」

へえ、と鷺谷は呟いた。あいつが背負っていた物はそれだったのだろうか？そう思った時、不意に声がして、鷺谷は振り向いた。

「あ、いたいた。ちょっといいかな」

そう呼びかけたのは、鷺谷達の担任の大園だ。その隣には、その大園よりもかなり歳を重ねていそうな女の人が並んでいた。

「まだ挨拶してなかったね。こちらが、園長の重野守和子さん」

「この子達が、大園先生の生徒さん？今日一日、よろしくお願いします」

「「「よろしくお願いします」」」

四人で挨拶を済ませた後、ところで、とその園長先生が視線を別の所へ向けた。振り返る四人。

「「「あ」」」

「は？」

白井と、御坂がいた。手を振る二人を見て、三人が動き出す中、はあ、と一人鷺谷はため息をついた。

「なんで結局いつものメンバーそろうんだよ……」

呟くと、ふと大園が笑っていることに気付いて、鷺谷は眉をひそ

めた。

「なんか可笑しいんかよ」

「いや、ちょっと嬉しくてね」

「嬉しい？」

鷺谷がさらに眉をひそめる。

「鷺谷君、学校じゃいつも一人だったじゃないか。心配だったんだよ。でも、やっと友達も出来たみたいだね」

「……あんた、中学いるより小学校とかこういうところの方が向いてんじゃないか？」

「そうだね。そうしようかな？」

チツと舌打ちして、鷺谷もその場を離れて、五人のいるブランコへ向かう。そして。

「何やってんだお前ら」

「「「「うわあ!？」」「」」「」」

「マジで何やってたんだ……」

あまりに大きな五人のリアクションに、頭を抑える。

「あ、あんたもいたんだ」

「まあ、成り行きだよ。で——」

御坂にそう応えてから、なにやらなにが答えを得たかのような顔をしている白井を見て尋ねた。

「なんかわかったみてえだけど、なんかあったのか？」

それから白井達の向いてる方を見て、ああ、と納得した。

「なるほどね」

「あら残念、わかるのはわたくしだけだと思いましたのに」

「え？なに？」

不思議そうに尋ねる鷹月に、はあ、とため息をつきながら、鷺谷は告げた。

「ま、あの女がどこの誰か知らねえが、大圏に惚れこんでんだよ」

「「ええっ!？」」

「へー」

「そのテンションの差は何なんだろうな……。で、お前は何をやらかすつもりなんだ？」

視線を白井に向けると、白井はなにやら含みのある笑みを浮かべる。

「フッフッフ……やらかすなど人聞きの悪い言い方をなさらいでいただきたいですわね。ただ、わたくしが寮監様の恋を実らせて差し上げるだけですわ」

「ちょ、ちよつと黒子」

「わあ、なんか楽しそうですね！」

「わたしも手伝いますよ、白井さん」

それを見て、ため息と共に鷺谷は呟く。

「……不安しかないんだが、お前らっていつもこういうのか？」

「ま、まあ、そうかしら、ね」

御坂が苦笑を浮かべたのを見て、鷲谷はため息と共に呟いた。

「苦労してそうだな、お前」

「あ、あはははは……」

「さ、そうと決まれば作戦会議ですよ！」

「え？ あ、ああ……」

白井に連れ去られる御坂を見ながら、鷲谷は呟く。

「……苦労すんだな、超能力者^{レベル5}って」

不安定な一日

「今日一日、一緒に遊んでくれるお兄さん、お姉さん達ですよ」

「「「「「よろしくおねがいします」」」」」

「「「「「「「「「よろしくおねがいしまーす」」」」」」」

園長先生の挨拶と同時に拍手が上がる。いい子だなーと鷹月が思っている、突然寮監と呼ばれていた女性が目の前を高速で過ぎ去って行った。その行き先を見ると、白井に寮監が腕をまわしていた。白井が寮監に耳打ちすると、なぜか白井が全員の一步前に立つ。

「ではさっそく作戦を実行いたしますわよ」

うなずく初春と佐天につられて、頷く鷹月。ふと横を見ると呆れたような御坂と鷺谷の顔が見えた。

「で、結局こういう役回りなんだよな、俺達は」

「まあ、いいじゃない。楽しいし」

ため息をついた鷺谷に笑いかける。鷹月達、男の役割は子供たちの相手をする事だった。

「楽しいか？^{ガキ}子供の遊びなんざ卒業だっつの」

「おにいちゃんつかまえたー」

腰の辺りを掴まれて、鷺谷は動きを止めた。あ、と鷹月の脳裏を最悪のシナリオがよぎった。が。

「お、やったな？さーて誰を捕まえてやろうかなあ？」

ニヤリと笑うと、きゃああと楽しそうな声を上げて子供たちが逃げる。それを追って鷺谷も笑いながら追いかけ始めた。

「楽しんでるじゃないか」

鷺谷を見て笑っていると、くい、とエプロンの裾を引っ張られた。

「おにいちゃん、にげないとつかまっちゃうよ？」

「そうだね。逃げなきゃ——っ!？」

女の子に笑いかけた瞬間、ズン！と頭に衝撃が来た。女の子に別の女の子がかぶる。見たことはない筈なのに、見たことがあるように映る。おにいちゃん、と女の子が呼びかけて来る。その声もまた、別の女の子の声に聞こえて来る。

「鷹月くん！」

声が響き、ハッとして顔を上げると、顔色を変えた初春がいた。身体がだるい。手を見るとかなりの量の汗がにじんでいた。

「大丈夫ですか！ちょっと休みましょう！」

「……うん」

初春に連れられて、鷹月は建物の中へと入り、イスに腰掛ける。

「……ごめん」

「いいんですよ。しばらく、ここで休んでください。わたしが代わりに相手してきますから」

「ごめん」

「謝らないでください。誰も責めてなんかませんから」

「ごめ……うん、ありがとう」

初春が出て行くと入れ替わりに、先ほどの女の子が入って来た。

「だいじょうぶ？」

「大丈夫。心配かけちゃったね」

心配そうにこちらを見る女の子の頭に手を乗せて、笑う。その瞬間、今度は一瞬だが先ほどの女の子と目の前にいる女の子がぶれる。それを気付かれないように笑みを作る。

「さ、お兄ちゃんは大丈夫だから、みんなと遊んでおいで」

頷いてドアから外に出て行く女の子を見送ると、詰まったように止まっていた息を吐きだした。

「「お誕生日、おめでとー！」」

「たかがケーキ買っただけでどうしてこんなに疲れなきゃいけないんだ……」

「どうしたの？」

ケーキを前に子供達のはしゃぐ姿を見ながら、鷺谷が一人ごちたのを聞いて、尋ねた。

「ああ……多分緊張してたのかもしれないけど、道を間違えるならまだしも、犬の尻尾踏んづけて追っかけまわされたり、終いにゃ川に落ちそうになるし……一体どんだけあがつちまったらああなるんだよ……？」

「はは……お疲れ様」

気力も使い果たしたという顔をする鷺谷を苦笑しながらねぎらい、自分達の前でケーキやピザを食べる子供達に目を向ける。先ほどのようなことは起こらない。一体なんだったんだろう、そう思考に耽った直後、それは起きた。ガタガタとテーブルの上のものが音を立てる。

「地震!？」

驚き、混乱する子供達。しかし、鷹月は別の物に苦しめられることになった。

(あ、頭が……っ!?)

何かが頭に流れ込んでくる感覚。

『に——す——て』

声のようなものが頭に響くが、何を伝えようとしてるのか、まったくわからない。

「なん、なんだ、きみ、はっ——!」

『お——に——ん』

「何、を、言っ、てるんだ——っ!？」

次の瞬間、その頭の痛みがふっと消えた。息もあがり、自分の鼓動もはつきり聞こえるぐらいに強くなっている。いつの間にか地震も収まっていた。

「一体、なんなんだ……」

何やら静かになっていく周囲をよそに、鷹月は一人呟いた。

不安定な一日（後書き）

なんだかおそろしく更新が遅れてしまつて申し訳ないです。

転校生と合同会議

「——つかよお、鷹月」

声をかけられ、鷹月は後ろでダンボールをごそごそやっている鷺谷の方を振り向く。

「何？」

「なんで俺達がこんなことやんなきゃなんねーんだ？」

うーん、と少し考えてから一言。

「でも、頼られるのって悪い気はしないよね」

「あんな……」

再びのため息と共に鷺谷はビツとある方向を指さした。

「これは頼られてんじゃなくて使われてるっつーんだよ！」

その方向では、和気あいあいと話に興じる佐天達がいた。

「すみません。いろいろと手伝ってもらってしまっ……」

「大丈夫！これくらいならいつでも任せてよ」

頭を下げる初春の前で笑顔を見せる。

「まったく、いきなり呼ばれて何かと思えば——つかお前ら服
しまっただけじゃねえか」

「男に女の子の服しまわせるわけにはいかないでしょ」

「服以外も手伝えつつったんだよ！」

「男なんだからぐずぐず言わない！」

一方、その隣では鷺谷と佐天がぎゃあぎゃあ騒ぎたてる。主に鷺
谷の不服を佐天が笑いながら受け流す形で。

「みなさん、ありがとうございますなの」

「気にしない気にしない」

「だからあんたも服しまっただけじゃねえかつ！」

笑って謙遜する御坂を指さして鷺谷が叫ぶ。と、御坂に頭を下げた
少女がふと呟いた。

「どちらさま……なの？」

「散々手伝わせといて紹介すらしてなかったのかっ！？つかよくよ
く考えたら俺達もそいつ知らねえじゃねえか！」

再びぎゃああ！と鷺谷が叫ぶ。その声に、慌てて初春がすいませ
ん！と少女に駆け寄った。

「えっとですね。まず、この子が春上衿衣さんです。それから……」

初春の視線を受けて、鷹月が進み出る。

「僕は鷹月暁。初春とは、ジャッジメント風紀委員の同僚で、春上ともクラスメイ
トになるかな。よろしくね」

「ほら、次！」

「うおあっ!？」

ドン!と背中を押され、前に出て来ると、鷺谷は後ろを振り向く。

「デメエっ!何しやがる!」

「ケンカしないの!春上さんが怖がるでしょ!」

御坂に嗜められ、チツと舌打ち一つしてから、鷺谷はくるりと前を向いた。

「鷺谷洸だ。お前とは同じクラスだな。まあ、よろしく」

「よ、よろしく……なの」

「あーあ。ほら春上さん引いちゃってんじゃん。どうすんの?」

「最初っから自己紹介させてくれりゃこういうことにはならなかったんだっつーの!」

「ま、まあ自己紹介は出来たんだからいいじゃない」

もう嫌だコイツとこぼす鷺谷をなだめながら、それより、と鷹月は尋ねた。

「引っ越しはこれで終わりなんだよね?」

「うーん、そうねえ。時間も余っちゃったし———そうだ!どっか遊びにいこっか」

「さーんせーい」

御坂の提案に初春が声を上げる。しかし、そこで鷹月が声を上げた。

「え?僕達ってこれから警備員と合同会議じゃないっけ?」

アンチスキル

「なんで俺、ここにいんだろうな」

とあるクレープ屋の前で、呟く。その前のベンチでは春上と御坂がクレープを片手に、鷺谷の隣では佐天が手にクレープを持っている。どうやら、佐天と御坂が仲良くなったのもこのクレープ屋が始まりらしい。

「まあ、そう言わないで！気楽に行こうよ気楽にさ！」

「俺の苦勞の多くはお前のせいだよ！」

クレープを頬張りながら鷺谷が叫ぶ。

「ははは、遅いかもしれないけど、鷺谷君も私達の友達になったわけだしね。それとも、甘い物は苦手だったかしら？」

苦笑する御坂を見てから、鷺谷はクレープを見やる。元とはいえ、スキルアウトに属していた鷺谷は、御坂達から見れば一端の不良でしかなかったはずだ。だが、彼女らはそうは扱わない。佐天がいるということもあるのだろうが、基本的に彼女達は好意しか向けない。見下したり、侮蔑したりということは決してなかった。少し考えてから、鷺谷はそのクレープを口に運んだ。

「……いや、嫌いではない、な」

「そ、よかったわ」

能力者は、いつも自分達を見下している者ばかりだと思っていた。しかし、その考えは改める必要があるかもしれない。鷺谷はそう思う。

「にしても、地震でなんであいつらに仕事が回ってくんだ？自然現象だろ？地震てのは」

クレープを頬張りながら、鷺谷は呟き、御坂もそれに頷いた。が、その時鷺谷は隣から意味ありげな笑い声が響いてくるのを聞いた。見てみると春上の世話をしていた佐天がくっくくと肩を揺らしていた。

「それについて、さっきは黙ってましたけどね。実はそのことでホットな噂が！」

「このところ頻発している地震について判明した事がある」

巨大なモニターを前に、マイクを持つ黄泉川に集中する。警備員第七学区本部の会議室。そこには、学園都市の治安を守る警備員と風紀委員が集まっていた。ここ最近頻繁に起きている地震の為だ。そして、黄泉川は告げた。

「結論から言えば、これは地震などではない。正確にはポルターガイストと呼ばれる現象だ」

会議室内にどよめきが起こる。しかし、それは黄泉川の「だが」

という声によって静まる。それを確かめてから、黄泉川は続けた。

「『これは超常現象だ』などと騒ぎたてる学生が出て来ないとも限らんからあらかじめ釘を刺しておく。これは超常現象ではない。ポルターガイストの原因は」

直後、黄泉川の後ろのモニターが切り替わる。

「RSPK症候群の同時多発じゃん」

RSPK症候群。能力者が一時的に意識を失い、能力を無自覚に発動させる。つまり、一種の暴走なのだろうと鷹月は考える。

「ここから先は、先進状況救助隊のテレステイナーさんから説明してもらおうじゃん」

黄泉川の声聞きながら、鷹月はスクリーンに映る文字列をじっと見ていた。

転校生と合同会議（後書き）

更新がやったら遅くなつてすみません。

拭いきれぬ悩み

「思ったより早く終わりましたね」

嬉々として言う初春だったが、一方、鷹月の顔色はあまり優れていなかった。

「RSPK症候群――」

地震。能力の暴走。そして、声。まだ例の現象にあったことは一回しかない。だが、もしかすると、あれは。

（暴走した、能力者の声……？）

だが、なぜそれが自分にのみ聞こえたのだろうか。あの場にいた佐天や初春に聞いてみても、誰一人として、声の様なものを聞いたものはいなかったという。

「鷹月くん聞いてますか？」

「え？ あ、ああ何？」

呼び止められ、慌てて返事を返す。

「もう、佐天さん達が待ってるんですから、行きますよ」
「え、あ、えと」

鷹月は少し考える。果たしてこのまま佐天達と合流していいのだろうか。このことについてもっと考えるべきではないのか。だが、それにはあまりにもヒントがなさすぎる。

(まあ、いいか)

そう自分に言い聞かせて、鷹月は初春の後を追った。

「どうしたよ。シケた面しやがって」

声を掛けられ、振り向く。

「ほら。せっかく来たんだ。楽しめよ」

鷺谷が指さした先では初春が春上をゲームセンターの中のあちこちに引っ張り回していた。

「……うん」

返事をした瞬間、額に痛みが走った。

「何が『うん』だ。わかってねえじゃねえか」

「ごめん」

再び、額に痛みが走る。額を抑えて顔を上げると、鷺谷が呆れた顔をしてこちらを見ていた。

「あのな？ お前が何を悩んでんのか知らねえけど、それを表に出す

くらいなら俺達に吐いちまえ。それを迷惑だと思ってんなら、別にそれは間違いじゃねえよ。けどな、お前はちっと間違ってる」
「間違ってる？」

鷹月は首を傾げた。人の迷惑になることは間違っていない。なのに、自分は間違っていると言っていると鷺谷は言う。
あのなあ、と鷺谷が口を開く。

「迷惑かけるなんて誰が言ったよ？」

「えっ？」

「だから、お前に、迷惑かけんかって誰が言ったんだっつってんだよ」

「そ、それは」

「言われてねえだろ？初春も佐天も御坂も白井も俺も固法さんも。誰もお前に迷惑かけるな、なんて言ってねえ」

確かに、その通りだ。そんなことは誰にも言われたこともない。
だが。

「他人に迷惑かけちゃいけないのは当たり前だろ？」

そう言った瞬間、再び額を弾かれ、抑える。なんだよ、と文句を言おうとして顔を上げた鷹月は言葉を失った。鷺谷の表情が、険しくなっていた。

「『他人』じゃねえ。俺達は『仲間』だろ」
「仲間……」

そうだ、と鷺谷強く頷く。

「初春も佐天も御坂も白井も固法さんも——俺も、お前の仲間だろうが。仲間に遠慮なんかすんな。弱音だろうが、なんだろうが、受け止める。それが仲間ってモンなんだよ」

「それが、仲間——」

「俺は、そう思ってるけどな。……少なくとも、お前に相談事されて嫌がるヤツらじゃねえだろ？」

そうかな、と呟くと、当たり前だ、と返って来る。ふと声が耳に届いて、振り返ると、初春がこちらに向かって手を振っていた。空いた方の手では、何やら大きな機械を指さしている。たしか・・・『プリクラ』、とか言っただろうか、と鷹月はなんとなく考える。すると、バン！と背中を衝撃が走って鷹月は前につんのめる。振り向けば、鷺谷が笑っていた。

「ほら、行くぞ」

「え、行くて」

「『仲間』の場所に、だよ。ほれ」

「で、でもまだ相談するって決めたわけじゃ」

「好きな時にすりゃいいさ」

肩に腕を回され、鷹月は歩き出す。いつになるかは、わからないが、まあ、彼の言う通りかもしれない、と考えて。

今だけは

「よう。遅かったな」

隣の鷺谷が手を上げたのを見て、鷹月は川の方から視線をそちらに動かした。

「仕方ないでしょー。そっちと違って、あたし達は浴衣で来てんだから」

「遅くなつてすいません」

「ごめんなさいなの」

「その言い分はずいぶんとデリカシーのないもの言いですが……遅刻しなかっただけよしといたしましょうか」

「黒子、あんたずいぶん上から目線ね……」

色とりどりの浴衣に彩られた面子がそれぞれに反応する。騒ぐ初春達を少し離れたところから何も言わずに見ていると、ふと初春と目があつた。

「あの、どうかしたんですか？」

「え？何が？」

「鷹月くん、ずっと黙りっぱなしだったので——もしかして、変でした？」

少しがっかりした様子で尋ねて来た初春変？と鷹月は首を傾げる。

「えと——」

何の事？と尋ねようとした瞬間、スパァン！と頭を思いっきりは

たかれた。それもなぜか二つぐらいの手に一斉に襲われたような気がして、振り返ろうとした瞬間、ぐいっと後ろ首を引っ張られた。

「テメエ（あんた）はバカか!？」

佐天と鷲谷に両側からがっちりとホールドされ、え!?!うええ!?!と妙な声を上げる鷹月だったが、それすらも口を抑えられて止められてしまった。

「今の状況を見てそういう判断しかできねえのかテメエは!？」

「もっと言うことがあるでしょ!？」

「えっと……花火、楽しみだね?」

再び鷹月の頭がスパァン!と心地いい音を奏でる。だが、実際叩かれる方としてはたまったものではない。

「一体何なんだよ!？」

「だから、初春を見ろ!」

言われて、というか無理矢理首を曲げられて、鷹月は初春を見た。

「どう!?!何か変わったところは!?!」

「えっと——あ、もしかして具合が悪いのに無理を——」

スパァン!と頭が音を響かせる。

「もう!何なんだよ!」

ぎゃああ!と悲鳴のような声を上げる鷹月だったが、それでも、鷲谷と佐天は放さない。

「いいかし？ よーく初春を見ろー？ よーし、見たかし？」
「う、うん」

なんだか口調が変わってしまっている鷺谷にビクつきながらも、
鷹月は言われたとおりに見る。

「じゃあ、いつもの初春と違う所は！？」
「え、えっと――」

鷹月は慌てていつもの初春を思い出そうとする。が。わからない。
どこがどう違うのか。具合が悪いわけでもなさそうだし、初春自身
に何か変化があったとは考えられない。だが、違う所があると言う。
答えなければという焦燥感が鷹月から冷静さを奪っていく。

太った？ やせた？ おそらくそんな類ではないだろう。そんなこと
佐天はともかく鷺谷はわかるはずがない。それなら、何だ？ だが、
悠長に考えてる暇は鷹月にはない。だからこそ。鷹月は気付いた。
佐天や鷺谷も気付ける、初春自身と言ってもいいほどにいつも初春
がつけているそれに。

「頭の花飾り、変えた？」

四度目の音が響いた。

「そこじゃねえから！ 見るトコ違えから！ つか変わったらお前分
かんのか！？」

「まさかそこ見るとは……」

「じゃあ、どこ見ればいいのさ……」

疲れたように呟く。同時に、両隣からため息が聞こえた。

「ホントにテメエは……まあ、仕方ねえか」

「はあ——初春も大変なヤツにいれこんじゃったねえ……ん？」

ふと、佐天が何かに気付いたように辺りを見回し始める。そして、その顔がパアッと明るくなった。

「夜店だあ!!」

え?とおのおの話していた一同の視線が佐天の視線の先に集まる。

「あ、本当だ!結構出てるね」

暗くなった河原に沿って様々な屋台が店を構えていた。たしかに、気付くと美味しそうな香りも漂ってきていた。

「んー!たまらーん!」

「おい危ねえぞ!ったく、一ガキかつつの!」

叫びながら土手を駆け下りる佐天を鷺谷が追う。

「あ!私もー!」

「お姉様!そんなに走っては——もう!」

それを追って御坂が駆け下りるのを見て、白井が土手の下に空間^{テレ}移動^{ポート}。

「春上さん。私達も」

「うん」

初春と春上が頷きあつて土手を下りて行く。それを鷹月は茫然と眺める。鷹月は、夜店がどんなものかを知らない。知識としては残っている。だが、わからない。初春達が楽しみにしているものが、わからない。だが、鷹月は妙な感覚に襲われていた。知らないはずなのに、あんな場所に行ったことがあるような気がするのだ。初春や、佐天とは違った、もっと親しい誰かと。

直後、あの時の重石を乗せられたような感覚が鷹月を襲った。

脳裏に浮かんだのは、あの置き去りの施設で一瞬だけ見た、女の子。
チャイルドエアー

「一体、誰、なんだよ——っ!？」

立っていられなくなり、膝をつく。じつとうずくまって、治るのを待つ。

「鷹月くん!？」

声が響く。どうやら初春が気付いて戻ってきてくれたらしい。そう気付いた途端、感覚が消えた。

「大丈夫、なの？」

「うん……ごめんね。初春だけじゃなくって、春上さんにも迷惑かけちゃって」

「そんなことはいいんですっ! それよりも、本当に大丈夫なんですか!？」

「大丈夫だよ。もうほとんど辛くないから」

でも、と悲鳴のような声を上げる初春を落ち着かせるように、鷹月は努めて笑顔を見せて立ち上がる。

「もう大丈夫だから、ほら、行こう？置いてかれちゃうよ。ほら、春上さんも」

心配そうな表情を見せる初春と春上の手を取って、鷹月は祭りの方へ歩き出す。

記憶を失う前の自分にとって、あの少女がどんな存在だったかはわからない。でも。

今だけは、何も考えずにみんなと居ることを楽しもうと思ったから。

「初春」

「なんですか？」

「浴衣、似合ってるよ」

「へっ？」

間の抜けた声と同時に初春の顔が真っ赤に染まった。

「初春さん、どうかしたの？」

「いっ、いえいえ！？えと、そのっ」

キョトンと首を傾げる春上の前でせわしく動く初春を見て、鷹月は笑った。

今だけは（後書き）

最近忙しくてどうにも。文章が荒くなったりしたらスイマセン。

乱雑解放ーポルターガイストー

「ガキかよ、そのお面」

「いつ、いいでしょ！お祭りなんだから！雰囲気よ、雰囲気！」

鷺谷が呆れ、御坂が慌てて言葉を返す。そのやりとりを見て、白井も呆れたようにため息をつく。そんな中、ふと鷹月は河原に停めであるトレーラーに気付いた。

「何、あの車？」

佐天も気付いたようで、綿飴を食べながら尋ねた。

「MAR——先進状況救助隊だね」

「例のポルターガイスト対策ですかね」

「ポルターガイスト！？じゃああの噂マジだったんだ！」

「こんな所で地震なんてあっちゃあたまったモンじゃねえな」

「それにしても、あんな警備下で花火見物だなんて、風情もへったくれもありませんの」

白井が肩をすくめると、佐天が何かに気付いたように声を上げた。

「だったら、良い所があるんですよ」

「「「わあゝゝ」」」

「ここ、穴場なんですよ」

初春達が歓声をあげる中、佐天が誇らしげに語る。

「よくもまあこんなトコ見つけたモンだな」

「すごいでしょー」

「いかにやる気のベクトルがこっち向いてるかがすぐわかる」

「……あんたもしかしてまだボランティアのこと根に持ってる？」

佐天が半目で睨むが、当の鷺谷は気にもせずに花火に目を向けている。それを見て、鷹月も苦笑すると、今度は初春の方に目を向けてみる。初春は花火に夢中でこちらには気付いていない。

（初春、か）

未だにこの呼び方は何故かしっくりこない。だが、初春はその呼び方でいい、と言った。いや、むしろその及び方がいいと言っているようにも聞こえた気もする。聞いてしまおうか？とも思ったが、やめた。今はそんな事をしてはいけない気がしたから。

「どうかしましたか？」

「えっ、あ、いや、なんでも、ないよ」

こちらに気付いた初春に声をかけられて、鷹月は慌てて反対側に視線を戻す。すると、その先にはニヤニヤと気味の悪い笑みを浮かべた鷺谷がいた。

「な、なんだよ」

「いいねえ、青春てのは。若いつてのはさあ」

「鷺谷だって僕と同じ年だろっ！」

慌てて突っ込むと、ニヤニヤしながら、鷺谷は携帯を取り出した。

「……気付かねえんだもんなあ？」

「な——っ!？」

そのディスプレイには、初春をじっと見つめる自分の姿が。顔に熱が上がって来るのを感じながら、鷹月は鷺谷の携帯に手を伸ばす。だが、鷺谷もそれをさせまいと携帯を持った手をその手から遠ざける。

「このっ——!」

「へへへ、どうしたー? こんなモンかー?」

笑う鷺谷の手を必死に追う鷹月。とその時、ふと階段を上がって行く初春達が視線に入った。

「あれ？」

「ん? どうした——ってあいつら今度はどこ行く気だ!？」

鷺谷が叫んだその時、何かが鷹月の頭の中で響いた。まずい。そう思った直後、鷹月は走りだした。

「あ、お、おい!？」

止めに入る鷺谷の声を無視して、鷹月は階段を駆け上がり、走る。そして、それが来た。ズン! と頭に重い音が響き、鷹月は倒れ込むように座り込んだ。

『た——け——』

「くそっ！また——っ！」

少女の声が頭に響く。声と同時に、激しい痛みが鷹月の頭を駆け巡る。

「おい！どうした！？鷹月！？」

追いついて来たのか、鷺谷の声が聞こえるが、鷹月は頭を抱える。この間にも、声は響き続ける。そして、何の前触れもなしに地面が揺れ始めた。

「おいおい！ポルターガイストじゃねえのかこれ！？」

鷺谷の驚愕の声も耳に届かず、鷹月は響き続ける声にただ翻弄される。そして、何の前触れもなく、それは来た。

それは映像だった。どことも知れない場所で、誰かと手を繋いでいた。そこに映っているのは。

（僕！？）

見た事もない少年。だが、たしかにわかる。これは自分だ。幼いころの、自分。その時の自分が、すごく心配そうな顔で語りかける。だが、声までは届いてこない。幼いころの自分が、頭上に手を伸ばして笑いかけのを見て、そこで映像は終わった。鷹月は、震える自分の手を見つめる。映像の最後。そこだけ言葉が流れた。その声は、今まで何度も何度も聞いた声で。

「お、兄ちゃん……僕、が……？」

鷹月は呆然と眩き、そして糸が切れた人形のようにその場に倒れ

伏した。

科学者の女

「大丈夫、なのか？」

鷺谷が尋ねると、女は頷いて鷹月から手を放した。

「心配する必要はないな。大丈夫だ」

「そっか……」

ほっと胸をなでおろす。慌てて気を失った鷹月を担いで河原まで下りたはいいものの、途方に暮れていた所をこの女が声をかけて来たのだ。今はその女の車に鷹月を寝かせて女に診てもらっていた所だ。

「しかし、ありがとう。おかげで助かった」

「気にすることはない。この子と私は知り合いだからね」

「は!？」

突然の告白に、鷺谷は驚きを隠せない。が、そんな鷺谷を気にすることなく女は立ちあがった。

「かつてこの子は私の生徒だったんだ」

「あんた教師だったのか!？」

「いいや、科学者だよ。その時は成り行きで教師をやっただけだ」

科学者?と鷺谷は首を傾げた。科学者って教師をしなきゃいけない時もあるのだろうか?とか思ったが、もしかすると理科の先生とかって科学者だったりするのかな、と無理矢理に納得する。

「助けてくれたのはだからか？」

「それもあるが、私は彼に償いをしなければいけない立場でね」

「ふーん。大切なものって知らずにドジって壊しちゃったとか？」

「まあ、そんなところだ」

無表情で答える女を見て、もしかしてちょっと触れちゃいけないえとこだったか？と思いつつも、上がり続ける花火を見上げる。

「つたく、せっかく暑い中来たってのにな」

「まったくだ。この暑さは何とかならないものかね」

「それは俺があんたにいう台詞だぞ科学者」

呆れながら振り向いて鷺谷はギョツとした。気付いたら科学者の女がスーツを脱ぐどころか下着姿になっていたからだ。

「ちよいちよいちよいちよい！何やってんですか！？男子中学生の前でストリップしちゃマズいだろ！仮にも教師やってたんだろ！？」

「いや、しかし暑いのは今であってそれとは関係ない——」

「あるあるあるある！ぜってえあるから！モラルとか！つか人前で下着見せるなって人としての常識だよな！？」

「しかし、服を脱いで温度を調節するというのは人の知恵だと思うのだが——」

「あんたに羞恥心でモンはないのかああああああああああっ！
！！！！！」

結果として、鷺谷はなんとか人目につく前に女に服を着せて犯罪

者になる事を未然に防いだ。そして、現在、鷺谷は気絶した鷹月を抱えて木山春生と名乗った女の車に乗っていた。

「それにしても悪いな、寮まで送ってくれるなんて」

「何、この子の親しい友人だからな、当然だ」

「そこまでこいつに償わなきゃいけないモンがあるのか？」

「いいや、これはそうじゃないな。その償いと同時に、この子には借りもある——この子は覚えていないだろうがな」

なんだか重い話ばかりだなあと思いつつ、鷺谷は鷹月を見る。

こいつは一体どれだけの物を背負っているんだろうか？かつて対峙した時もこいつは重い物を背負っている印象を受けた。一体何なんだろうな？と思考をめぐらせて、やめた。どれだけ考えたところでわかるはずもないからだ。とりあえず、何か明るい事を考えよう、と鷺谷は鷹月から目を外して、外を眺める。ガラスに映った自分と鷹月を見て、思う。

（やっぱ、男を膝に乗せるよりは女の方がなあ）

次の瞬間、ゴッという音が車内に響いた。

「どうした？」

「いや、気にしないでくれ」

鷺谷は今度こそ何も考えないことにした。何故か女関係の事を考えたら、あの長い黒髪のうっとうしいクラスメイトが浮かんできたのかなどという事を考えない為に。

と、ふと気付いたように鷺谷は顔を上げた。そういえば、鷹月は今回と似たような症状にあったことがあったはずだ。そう、たしかあれは佐天のペナルティのボランティアに付き合わされた時。あの

時、混乱する建物の中で唯一、鷹月は避難しないで頭を抱えて座り込んでいたはずだ。その時は地震に何かトラウマでもあるのかと思っただが、もし、あれがポルターガイストだったとしたら？そして、鷹月はあの時今回と同じように苦しんでいたんだとしたら？

これは憶測にすぎないかもしれない。だが、もしかすると、事実かもしれない。

鷺谷は、しばらく考えてから決意した。

「木山さん」

「なんだ？」

「この近くにある病院、知ってますか？」

異変

「自然公園！？春上さんと二人で！？ずーるーい！なんで誘ってくんなかったのよー」

「ホントにご迷惑かけてすいません」

「いいのいいの。というか、鷺谷くんが謝る事でもないじゃない。今更気にしないわよ」

携帯電話を片手に話す佐天の後ろで鷹月はひたすら頭を下げる。固法はそう言うが、鷺谷としては何かしなければ申し訳ない。だからこそ。鷺谷は今まで培った経験から最もこういう時に役に立つ言葉を選びぬいた。

「固法さん」

「何？」

「コンビニ行ってきますけど、何か買ってきてましようか？」

「……よく食べますね」

「ほうは？ほほひへんはいばひふほほんふふあいふあふお？」

「鷺谷くん。昔にも言ったような気もするけど口に物詰め込んで喋るのはやめなさい」

「んぐっ。すいません——オイコラそこ今なんつった？」

素直に謝った瞬間に御坂が子供かと呟いたのを聞き逃さず、鷺谷は噛みついた。が、固法の目があるので噛みつくだけにしておく。

と。

ピー、ピーと機械音が部屋に響いた。

「何ですかね？」

「さあ？あーっ！触っちゃダメ私がやるから！」

機械に触ろうとした鷺谷を押しとどめて固法がスイッチを押すと、画面にメールが表示された。

「第二一学区の自然公園で——大規模なポルターガイスト発生！？」

それを聞いて、今まで話しこんでいた佐天、御坂、白井の三人が固法を振り返る。それから、何かに気付いたように佐天が表情を変える。

「自然公園で、初春達がいる所じゃないですか！」

「がっ、あがああああっっ！……！！！」

その時、ある病室では絶叫が響いていた。

（助けて——！！！）

「ああああああああああっっ！！！」

（助けて、お兄ちゃん——！！！！）

「ああああああっっ！！！！！」

まるで咽喉を潰すような絶叫に、看護婦達は少年の身体を抑えつけながらもおろおろとするばかりだった。

そんな中、抑えつけられている鷹月は頭を割るような激痛に苛まれていた。

前に見たような幻影がかすんでは消える。それはまるで頭の中から出ようとする何かを別の何かを抑えつけているようにも思えた。そんな中、鷹月はまた声を聞いた。

『これからどこに行くの？』

『ああ、学園都市っていう所さ』

『どんな所なの？』

『行った事はないからなあ——でも、きっと楽しい所さ』
(そうだ)

鷹月は思い出す。

(これで僕達は、施設に入れられて——)

ははは、と笑った。脳裏に浮かぶのは、ボランティアの時に会った子供達。

心のどこかで、自分は初春や鷺谷と同じだと思っていたのかもしれない。いや、もしかすると、思っていたかったのかもしれない。きっと自分には親がいて、きっと捨てられたような人間ではないと思っていたかったのかもしれない。

自分の存在が揺らぐのを、鷹月は確かに感じた。

「(まったく、やってらんねえぜ)」

壁に寄りかかりながら、鷺谷は一人ごちた。

今回のポルターガイストは規模がかなり大きく、負傷者もかなりの数出たようだが、幸運にも、その場にいた初春と春上に大した怪我はないようだった。しかし、鷺谷達は今先進^{MAR}状況救助隊付属の研究所にいる。元々は病院で合流したのだが、ある事情によって移動して来たのだ。その事情によって、鷺谷の周囲はギスギスとした空気が満ちていた。

鷺谷はちらりとその視線を床からその空気の元凶に変える。

初春と白井。

別に誰が悪いわけでもないのだが、発端を作ったのは白井だった。鷺谷はつい先ほど知った事なのだが、春上はポルターガイストの度に様子が変わるらしく、白井はどうやらポルターガイストと春上に何か関係があるのでは、と踏んだそうだ。だが、それに待ったをかけたのが初春だった。ルームメイトということもあって、春上とかなり親しくなっていた初春にとっては、それが信じられなかったらしい。

おかげで二人は反発しあってしまった、というわけだ。

(あいつがいたらどうしたんだろうーな)

鷺谷は、今頃病院で暇を持て余しているだろう友人の事を思った。

定まらない物達（前書き）

いいサブタイが思いつかない・・・

定まらない物達

暗い病棟の中を鷹月は歩いていった。

チャイルドエラー

自分が置き去りだと知ってから、鷹月は自分の中の何かが崩れ始めたような感覚に襲われていた。

初春達はその事を知っていたのか。知っていたならばなぜ話してくれなかったのか。知らなかったとしても、知ってしまった時、彼女達は今までの様に自分を見てくれるのか。

（何なんだろうな、僕は）

ともかく、鷹月は何か欲しかった。何でもいい。自分という存在を保証してくれる何かが。

そんな時だった。カッンカッンと靴音が響き始めたのは。

咄嗟に鷹月は身を隠した。しばらくして、懐中電灯を持った女性とおかしな格好をした御坂が前を通り過ぎて行く。

（どうしたんだろう？）

こんな夜更けに、病院に来る。それも急患とかそういう用事ではなさそうだ。

（よし）

少し考えてから、鷹月は彼女達について行くことにした。

（なんなんだろう……ここ）

御坂と女性が止まり、鷹月も手近なところに身を隠す。

そこは一度も来た事がなかった。隔離病棟へ続く道とも思ったが、どうやら、ここが目的地のようだ。ポーンと音が鳴り、自動ドアが開いた。

二人が歩み始め、鷹月も後を追おうか迷っていたところに、それは鷹月の視界に入ってきた。

（あの女の子……）

鷹月に事あるごとに語りかけて来た少女が、ガラスの向こうのカプセルの中に寝ていた。だが、それを見ているうちに、ドアは閉まり始める。

あ、と気付いた頃には完全に閉じられた。クソツと毒づいて、鷹月はドアにへばりつく。だが、叩くわけにもいかず、なんとか入る手はないか探っていた時だった。

「ぽ——た——ったのね!!」

御坂の声が中から響いた。

（なんだ？）

不思議に思った鷹月はドアに耳をつける。

「一体何が起きてるのよ!？」

「木原幻生——彼が全ての始まりなんだね？」

それから語られたのは聞き覚えのない事ばかりだった。あの事件、
木山、能力体結晶、暴走能力の法則解析用誘爆実験。なのに。

（知ってる）

鷹月は驚く。どれも知っている。まるで普通に生活していれば知ることではないような物ばかりなのに、どれも知っている。それが自分にどのようにかかわっているのかという記憶はないけれど、たしかに知っていた。そして、ドアの向こうでは同い年の妹が、その犠牲となっている。ならば、どうして自分はここにいる？なぜあそこで妹と同じく寝ていない？

気付けば、口を開いて笑っていた。気付けばドアの前で座り込んでいた。

なんだこれは、と鷹月は笑った。暖かかった世界が崩れたような気がした。もしも本来の居場所があそこなら、今までの居場所はなんだったのか。

頭が痛い。気持ちが悪い。腹の奥から何かがこみ上げて来る感じがする。涙が勝手に出て来るのに、笑いが止まらない。

もう、嫌だ。ただただ、鷹月はそう思った。

「気が付いたかい？」

横を見ると、記憶喪失になって最初に出会ったあの医者がいた。

「ああ、体を起こす必要はないね？」

たしかに、先ほどから頭にもやがかかったように変にだるい。それは、と思いだそうとすると、今度は頭に締め付けるような痛みが走り、鷹月は頭を抱えた。

「無理に思い出さない方がいいね？君の記憶喪失の原因は、どうやら怪我だけではなかったようだからね？」

「どういう、事、ですか？」

「無意識に君が過去の記憶を封じ込めている、と言って間違いではないということだね？怪我はあくまでスイッチであって、常にその危険はあったらしい——君の精神状態は常に多大な負担を強いられていたようだからね」

そうですか、と鷹月は天井に視線を移しながら呟いた。

「とりあえず、今はゆっくりと休むことだね？気分転換が必要なら、いつでも言うといい」

ありがとうございますと呟くと、鷹月は窓の外を見た。相変わらず憎らしいほどの青空が広がっていた。

「ポルターガイスト関連の資料、集め終わりましたあー」

段ボール箱いっぱいファイルを机の上に置いた鉄装が次の指示を仰ぐ。黄泉川は、何やら納得のいかなさそうな顔で告げた。

「それ全部捨ててくれ」

一瞬、何を言われたかわからないといった顔をする鉄装に黄泉川は答える。

「今先進^{MAR}状況救助隊から連絡があって、ポルターガイストの件はもういいって」

「そんなあー。頑張ったのにいー。なんでですかー」

「知らん。終わったからとしか——おい唐沢！さっきから何やってる！」

さっきからがさごと何かを探していた唐沢に黄泉川が怒鳴る。すると、向かい側の机の下から声が帰って来た。

「いやー、やっと中学の生徒名簿手に入れたんだがどこか行っちゃって」

「生徒名簿？そんなもので何やってるんですか？そういうば、この間も別の学校の名簿見てましたけど」

「つかそれなら書庫^{バンク}使えばいいじゃん」

呆れたように呟く黄泉川だったが、唐沢はわざとなのか聞こえてないのか、あれー？とひたすらに探し続けていた。

「結局、なんで唐沢先生は名簿を？」

「ああ、人探し」

「手伝いましょうか？これが終わったらですけど」

「いや、別にいい」

ひらひらと机から伸びた手が揺れた。

「まったく、名前ぐらい教えてくれたっていいじゃんよ。知ってるかもしれないじゃん」

「んー、まあ、かけてみるか」

ひょこつと机から顔が出て来て、唐沢は告げた。

「鷹月暁と鷹月明理っつー双子の兄妹なんだけどさ」

定まらない物達（後書き）

ずいぶん久々に書く気がしますあとがき。

ていうか妙にとびとびで申し訳ないです。正直ここまで来て自分の文才のなさに絶望してきてます。元々あると思っていたわけでもありませんが。

できれば、なんらかの感想を頂けると嬉しいです。

個人的にはここら最近あまり上手くかけてないのでどんな言葉が出て来るかヒヤヒヤものです。

手間のかかるヤツら

「オイオイ、どういうこったよこりゃあ……」

「大丈夫だから、ね？」

鷺谷は入り口で呆然と立っていた。

上機嫌な佐天に言われて、来てみたものの、支部の雰囲気はまさに最悪だった。テーブルで初春は泣いてるし、そのほかの面々も何やらただならぬ雰囲気だった。しかもその後の話はもう何が何だかわからなかった。木原だかテレスティーナだか実験だか意味不明の単語が羅列して。

だが、よくわからないなりに考えて、鷺谷は支部を静かに出た。今の自分に出来ることなんてまったくわからない。それでも、何か動いている。

（まったく、手間かけさせやがって！）

向かう先は、今頃病院で寝ているはずの鷹月バカの下。

（でなんでこうなるんだよクソツたれ！）

悪態をつきながらも、鷺谷は街中を走り回っていた。病院で寝ているはずの鷹月が、何故か病室にいなかったのだ。そして、そんな多忙な鷺谷の携帯が鳴り響いた。

「もしもし!?!? つかかなんだ忙しいんだよこっちは!」

「あー鷺谷!?!? どこ行つてのんよ!?!? まあいいや! 急いで春上さんがいた研究所に向かつて!」

「は!?!?」

「いいから行く! 任せたからね!」

「おい! ちよっと待て! 説明が足りなさ——クソッ、切りやがった!」

ヤケクソ気味にボタンと荒々しく携帯を閉じた鷺谷は携帯を開いた。

(ていうか、よくよく考えてみりゃああいつに連絡とりゃよかったんじゃない)

気付いてしまったが最後、鷺谷は自分を殺したくなった。だが、気付けば問題ない。気付いてしまえばいつでも出来るのだから。荒々しく閉じておきながら再び鷺谷は携帯を開いて電話帳を見る。鷹月に電話なりメールなりして場所を尋ねて迎えに行けばいい。

「まったく、ホンットに手間かけさせやがって」

鷺谷は携帯のボタンを押し、しばらくしてからそれを閉じて走り出す。

トントントンと鷺谷はスニーカーの底で床を叩く。だが、そんな彼に周囲は誰も気づかなかった。

何故か慌てたように外に向かった御坂を佐天が留めてから、何故か佐天が取り仕切って何やらみんな仲直りしました、みたいな雰囲気になったのが最大の原因だろう。

厄介事に巻き込まれるのはごめんだったが、蚊帳の外というものはそれはそれでイライラさせてくれるもんだなと驚谷は思った。

「で、一体何なんだ？ 研究所はボロボロだわ御坂は気絶してたわ」
「あーえと……それはね」

佐天のつたなすぎる説明を要約すると、つまりテレスティーナというあの科学者が春上とその友達をさらってった、ということらしい。

「そりゃまた大事だな」

「そうなんです！ しかもそこには鷹月くんの妹さんも——ってあれ？」

そこで、初春は言葉を止めた。その他の面々も、何かに気付いたように辺りを見回す。そういえば、と初春が呟いた。

「鷹月くんは？」

「今更かよ。どんだけ余裕なかったんだお前ら」

「あ、あはははは——で、でも驚谷は知ってるんでしょ!？」

「まあ、あいつが今どんな状況に置かれてるかも一応な。だけど、居場所がわかんねえ——連絡がとれねえんだよ仕方ねえだろ！」

はあ!？ という声と冷たい視線に驚谷は慌てて弁明する。というか、自分だけが責められるのはあまりに理不尽な気がしてならないのだが、言わない方が良いだろう。今の状況では多勢に無勢だ。

「ともかく、だ。俺は鷹月あいつを探してくる」

そう言ってドアに向かおうとしたその時だった。

「それを許すわけにはいかないね？」

いつの間に部屋に入ってきていたのか、そこには、白衣を着た、カエルに似た顔の男がいた。おそらく格好からして医者なのだろうが。

「どけよ。俺はこれからあいつを探しに行かなくちゃいけない」

そんなことは関係ないとばかりに鷺谷はドアへと向かう。だが、その前に医者は鷺谷の前に立ちはだかった。

「さっきも言ったね？行かせるわけにはいかないよ」

「一体どういうつもりであんたは俺の邪魔をするんだ？！」

「彼は僕の患者だ。患者に必要な物は用意するが、わざわざ彼の容体を悪化させるようなことを認めるわけにはいかないね？」

「どういふことですか？」

ぐ、と押し黙った鷺谷の代わりに、初春が尋ねた。だが。

「それを聞いてどうするね？」

カエル顔の医者は表情を変えずに言った。

「今の今まで彼を放っておいて、何を言っているのかわかっているのかい？」

「仕方ないじゃないですか！初春は——」

「だが、彼は君達よりもはるかにひどい状況だった——いや、
今もその状況は続いているんだ」

佐天の言葉を遮るように、医者は言いきった。それから、ため息
を一つつくと、仕方ない、と呟いた。

「本当は患者のプライバシーを明かすのは不本意なんだがね」

少年の真実

「お待たせしましたー」

差し出されたクレープを受け取り、鷹月はベンチに座った。公園では、近くの幼稚園から来たのか、同じ服を着た子供たちが駆けまわっている。

そんな中、鷹月はクレープをかじった。

「……甘い」

鷹月は別に甘いものが嫌いなわけではない。ただ、そう言ってみたかった。

「甘いモンは苦手か？」

聞いた事のあるような声が響いた。鷹月が振り返るとそこにはふてぶてしい顔をした友達が立っていた。

「まったく、さんざん人を走り回らしといて見つけたらクレープ片手にのんびりとは、世話の焼ける野郎だよお前は」

「……何？」

「行くぞ。用事だ」

「……いい」

その用事が頭をよぎると同時に、締め付けられるような痛みを感じた鷹月はそれを振り払うように言った。しかし、鷺谷は諦めるどころか鷹月の胸ぐらを掴む。

「いいかげんにしろよ。こっちはテメエがトラウマで記憶捨てたって事くらい知ってんだよ」

「……じゃあほっといてよ！」

次の瞬間、鷹月は地面に倒れていた。頬に熱いものを感じる。殴られた、と知覚したのはそれからすぐだった。

「昔のトラウマで記憶失ってる！？だからどうした！んなこた関係ねえんだよ！」

「関係ないわけないだろ！あそこには——っ！」

頭の痛みを知覚しながら、鷹月は悲鳴のように叫んだ。しかし、それに負けじと鷺谷も叫んだ。

「だから関係ねえつつってんだろ！！」

胸ぐらを掴まれ、無理矢理起こされながら、鷹月は鷺谷の声を聞いた。

「テメエのトラウマがなんだろうが、それで仲間を助けなくていい理由にはならねえだろうが！違うか！？」

何も言えずに唇を噛みしめる鷹月に向かって、鷺谷は叫び続ける。

「俺もあいつらも待ってんだよ！全員無理しなくていいつつーだろうが、それでも待ってるはずなんだよ！」

「……でも、僕は置き去りで、それで」
チャイルドエラ

「それもどれ関係ねえ！俺達にとっちゃテメエは風紀委員の鷹月ジャッジメント暁で、俺達の仲間！それだけなんだよ！」

だけど、と鷹月が口を開いた時だった。

「よーしいたいたいたい！」

「あ？」

あまりに空気を読まない叫び声に、苛立ちを含みつつ驚谷が声の方を振り向き、それにつられて鷹月も同じ方を向いた。

「えっと……？」

「ああ、そういえば初対面……じゃないはずなんだが、記憶ないんだっけか。俺は警備員アンチスキルの唐沢一士だ」

「で、その警備員が俺達に何か用か？」

苛立ちを隠そうともしない驚谷だったが、唐沢は相変わらず笑みを浮かべながら答える。

「あー、まあ用があるのは鷹月くんだけけどな。まあ君がいても変わりはしねえだろうし、それに今は時間がないんでな。さっさと済ませちまおう」

そう言う唐沢はポケットから何かを取り出して鷹月の前に掲げた。それは指輪だった。一本の紐に、指輪が2つぶら下がっていた。

「えっと、これは？」

「君の物だ。正確には、君の両親の物」

それまでの笑みを消して唐沢が言った言葉は、半ば信じがたいものだった。

「君は覚えていないらしいが、これが、君の両親だ」

そう言って唐沢が取りだしたのは、1枚の写真だった。しかし、それを見ても発作は起きなかった。なぜなら。

「――違う？」

「は？」

「僕を施設に入れた人と、違う……」

写真の中の人物は鷹月が覚えている鷹月達を施設に入れた人物ではなかった。それを聞いて、少々いぶかしげな顔をしながら、唐沢は頭をかきながら言った。

「それは君の叔父だろな。まったく厄介な事してくれやがって」

叔父？と鷹月は首を傾げる。

「君の両親は残念だが君が施設に入った頃には既にこの世にない――君を学園都市において逃げたのは、君の叔父だ。俺は君の父親に君の面倒を頼まれたんだが……悪かった」
「じゃあ」

鷹月は自分でも知らずに問いかけていた。

「僕は、僕達は、捨てられた、わけじゃ、ないんです……？」

「お、おい、鷹月？」

ぼろぼろと涙を流す鷹月を見て、鷺谷は思わずうろたえる。しかし、唐沢はほとんど初対面の少年の涙にうろたえる事もなく、断じた。

「ああ、だから俺がここにいる」
「よかった」

そう呟き、鷹月は地面に座り込んだ。
本当に、よかったと鷹月は思う。置き去りという烙印を押され、実験台として扱われたという過去があつたとしても、鷹月暁には、それが救いだつた。

「つと、で、明理ちゃんは？」

「あつ！そうだよ！コイツの妹！えーあー、あああメンドくせえ！
とりあえず案内します！説明は案内しながら！」

「え、あ、おう！」

頷き合い、駆けだす二人。その時、二人の背中に声かけられた。
振り返った二人は笑った。そして、尋ねる。

「「行くか？」」

「はい！」

鷹月は力強く頷いた。

男達の戦い（前書き）

御坂達がテレスティーナに追いかけて回されてる頃の裏話的な。

男達の戦い

「唐沢さん！」

エンジンが放つ爆音に負けないように鷹月が叫ぶように尋ねる。

「僕達、今どこに向かってるんですか？！」

「トレーラー追ってんじゃねえのか？！まだ見えねえみたいだけど
！」

同じ事を思っていたのか、鷲谷の声も少し不安げだ。しかし、その答えは二人とも全く予想していないものだった。

「追ってねえよ！トレーラーなんざ！」

二人揃って「はあ！？」と声を上げる。当然だ。これから二人はチャイルドエラ¹置き去りを乗せたトレーラーが目的地に着く前に奪い返す予定だったのだ。不満の声は当然だった。

「おっさんまさか何もしねえつもりか！？」

「ンなわけあるか！いいか？俺が聞いた話じゃお前達の仲間は高位能力者がいるって聞いた！それに比べりゃコッチは無能力者^{レベル0}に病み上がりの異能力者^{レベル2}に警備員^{アンチスキル}の三人だけだ！俺達が加わったところで大して変わらん！」

「だからって全部終わるまでおっさんとドライブなんてのはゴメンだぞ！」

「話は最後まで聞け！いいか！だからこそ、俺達は合流しない！」

自信満々な唐沢の物言いに釈然としない二人は首を傾げる。その

二人を見て、唐沢はニヤリと笑って言った。

「まあ、ある意味じゃ俺達の方が危険かもしれねえけどな」

「搬入はこれで終わりか？」

確かめるように男が尋ねると同じ服を着た男が頷く。

「ああ。今頃はマールリーダーがヤツらを始末してるだろうよ」

「だが、あんな物まで持ち出す必要あったのか？」

「わかってねえなあ。お前、相手はあの第三^{レールガン}位だぞ？ 備えるに越したことはないだろう。モルモットとはいえ、ヤツらに対して生身の俺達は無力だからな。まあ、それでもさすがにアレを出すって聞いた時はビビったがね」

ハハハ、と笑う相手につられて男も笑みを浮かべた。だが、そんな余裕のある空気は一瞬で消し飛ばされた。

ドゥーン！ という砲撃の様な銃声と共に一台のトレーラーが炎に包まれたからだ。

駆動^{パワードスーツ}鎧を着た仲間達が周囲に展開する。銃声、ということから考えられる敵は警備員。しかし、男は即座に首を振った。

（俺達のバックには上^{うえ}層部がいる。警備員^{アンチスキル}が来る筈がねえ！）

しかし、そんな男の考えを消し飛ばすように再び銃声が響き、トレーラーが燃料タンクを撃たれて火を噴く。しかし、いくら見渡してみても未だに敵は見当たらない。

見えない敵に男だけでなくチーム全体が不安に揺らぎ始める。

「いやいやいや、おかしいだろ何者だあのおっさん」

「僕も初対面だからよく知らないし——でも普通の人じゃない
つていうのはわかるよ」

「当たり前だ」

「だよね」

黒煙の上がる施設を見ながら、鷹月は苦笑した。

唐沢はバイクから降り、バイクが運転できるという鷺谷に運転を
任せて敵を減らすと言ってバイクを降りた。それからしばらく走る
とさっきの銃声が響き始めたのだ。ちなみに、唐沢がバイクを降り
たのは施設から二キロも離れた場所だった。目標二キロ地点からト
レーラーのエンジン部分だけを狙撃。ただの教師では到底無理な芸
当だろう。そして、鷹月にとってもう一つ不可解なのが。

「鷺谷って免許——は持っていないよね。なんで運転できるの？」

「俺、ちよっと先輩から教わった事があってな。ついでに教えても
らった良い言葉がある——運転に必要なのはカードじゃない。
技術だ」

「あの、一応僕が何をやってるか知ってるよね？」

無免許だと知っていて運転を任せてしまう警備員が保護者代理と
なったのだが、それはそれである。

「つと無駄話してる場合じゃないみたいだぜ。そろそろ突入だ」

鷺谷の呼びかけに、鷹月は頷くと足に電流を送る。スニーカーに
嵌めたローラーが駆動するのを確認して、鷹月は鷺谷の方を二回叩

いた。

「よし、いくぜ！」

威勢のいい掛け声と共に、エンジンが唸りを上げ、車体が傾いて一気に施設の敷地に飛び込んだ。同時に、鷹月がバイクから飛び降りる。

（くうっ……！！）

着地には成功したものの、一瞬バランスを崩してヒヤリとした。しかし、ブレードはきっちりと地面を捉えられた。視界の向こうでは、こちらに気付いた駆動鎧が大型の銃火器を向けるのが見えたが、それから弾が放たれる事はなく、嫌な音と共に銃身が半ばから吹き飛んだ。その隙を逃さず一気に肉迫すると、鷹月は駆動鎧の表面を撫でるように触れる。刹那、駆動鎧がまるで糸の切れた人形のように動かなくなった。

（これなら……！）

鷹月は拳を握る。触れた物の電気を操る力。同系統最強の能力者である御坂が身近にいるおかげでそれほど強い能力にも思えなかったが、よくよく考えてみれば、現状でこれほど心強い能力もないと鷹月は思った。駆動鎧の詳しい構造は知らないが、電気駆動である以上電気を操る事の出来る鷹月は天敵に近い。鷹月からすれば、触れてしまえば動力を落とすことだって可能なのだ。

（僕でも、戦える！みんなの役に立てる！）

鷹月は視界に入った二機目の駆動鎧の下へ向かう。

出来る事を（前書き）

かれこれ二カ月近くも放って申し訳ありませんでした。
……大学生活って大変だなあ

出来る事を

「ふう……」

「やろうと思えば駆動鎧も相手に出来るモンだな」
パワードスーツ

「自分がやったみたいと言わないでよ」

地面に転がる駆動鎧を蹴飛ばしながら笑う鷲谷に釘をさす。鷲谷も何もしなかったわけではないが、鷲谷が相手にしたのはもっぱら駆動鎧を着ていない職員をのしただけで駆動鎧を相手にしたのは全て鷹月である。もっとも、その鷹月でも唐沢の援護なしには無傷でこれだけの駆動鎧を無効化することは叶わなかっただろうが。

「えっと、子供達はもう中なんだよね……って僕達と同じ年なんだよね、よく考えたら」

「まあ、そこんトコよくわかんねーけど……。とにかく、今度は探検か。ホントにトンデモねえ夏休みだぜ」

「中にも人いるのかなあ」

「その辺は多分大丈夫なんじゃね？こいつらの目的はこの施設に子供達をブチ込む事なんだろ？後は多分親玉の仕事なんじゃねえの？」

「僕に聞かないでよ」

鷹月が苦笑すると同時に、施設の入り口付近から音が響いた。

「やっとご到着みたいだな。二人でここの中を探しまわんのは骨が折れるから丁度良かったぜ」

「そうだね」

二人は、入ってきた青いスポーツカーに向かって手を振った。

「まったく、アンタことが勝手な行動するから……」

「いや、仕方ねえだろ。俺達じゃんなこと考える余裕なかったんだからよ」

「病み上がりの異能力者たかつきに無能力者の貴方、それに警備員アンチスキルが一人。無茶を通り越して無謀ですわね」

「ま、まあその無謀のおかげでアタシ達もあっさりここに入れたわけですし」

苦笑いを浮かべながら、佐天が二人をなだめる。が、鷲谷は反省したような素振りも見せずに手に持った警棒を振り回す。

「なかなかいいモンだな。さすが警備員の正規品つつートコか」

「アンタそれ一本で戦ったの？ていうかどこで拾ったのよ」

「トレーラーにあったモンちょっくら借りただけだ。ちゃんと返すさ。俺には警棒なんてモン似あわねーし」

「まあ、たしかに、どっちかっていうと鉄パイプかな、鷲谷は」

「……お前も様になってるぜ？金属バット」

「それ、か弱い女の子にかける言葉？」

「こんな事件にメットかぶって首突っ込む時点でか弱い女の子通り越してるだろ」

ジト目で睨んでくる佐天をものともせず鷲谷は笑った。

「それにしても……」

「あ？」

ぼそりと呟いた佐天を振り向くと、佐天は部屋の中を見ながら尋ねた。

「なんか、いつもよりずっとぐく生き生きしてない？ 鷹月」

「んー……まあ、なんつーか、吹っ切れたからな。自分を取り戻したっつーか」

「記憶が戻ったの？」

「そこまではいかねーんだけどなあ……」

うーん、と悩んでいると、部屋の中から初春の声が届いた。どうやら、子供達が見つかったらしい。

「ま、まずはやることやってからだな。アイツのことを考えんのは」

「っはー……こりやまたトンデモねーなオイ」

周囲を見回しながら鷺谷は呆れたように声を上げた。ここがなんらかの研究施設だとは聞いていたが、どちらかというと地下組織の秘密基地なんじゃねーの？ と疑いたくなるような施設の規模だった。その真ん中のカプセルでは、初春がしきりにそれを叩いていた。もしかするとまた厄介な状態にされているのではと、鷺谷は少し不安になったが、しばらくすると初春がほっとしたような表情をしたのを見て安心した。ここまで来てまた厄介なんて御免だぜ、と心の中で呟いてから、今度はさらに心配な人間に目を向ける。

「……妹さんはいたのか？」

「……うん、あの子」

鷹月が指さしたカプセルを覗きこむ。が、あいにく鷹月の妹の顔など見たこともなかったものでどう反応していいかと悩んでいると、不意に鷹月が喋り出した。

「記憶、ないはずなのに」

「あ？」

「記憶、ないはずなのにさ。僕、あの子を見た時すぐに妹だってわかったんだ。声を聞いても、イメージとして出て来てもわからなかったのに、あの子見たらわかったんだ。妹だって」

「不安なのか？」

答えは帰って来なかったが、鷺谷は一つ息をつくと鷹月の背中を思いつき叩いた。

「ま、んなこと今考えたって仕方ねーよ。あの子がお前の妹かそうでないかなんて関係ねえ。俺達はコイツら助けるだけだ」

「……うん」

「ま、そこまで心配ならあの先生とやらに聞きゃいいだろ。あの先生、お前の妹のことも知ってるみたいだし。じゃ、俺も俺に出来ることとしてくるわ」

そう言うと、鷺谷はカプセルの周囲で何かを探しまわる初春の方へ歩き出した。

出来る事を（後書き）

ようやく更新出来た……待ってくれていた方は申し訳ございませんでした。開いてみたら一気読みしてくれた方がいたそうで……49話分全てを？

ありがとうございます。

この小説が終わったら今度は舞台は同じ学園都市で原作とは違ったオリジナルストーリー書いてみようかなと思ってます。いつ終わるとも知れませんが。

無能力者一レベル0一（前書き）

今回はかなり短めです

無能力者一レベル0一

（自分に出来ること……か）

鷲谷に言われたことを思い返して、ふっと笑った。そして、鷹月は何かを探し続けている初春の下へ歩き出す。しかし、突然奇妙な音が響き始めたのと同時に、鷹月はその場に倒れ込んだ。

（な、に……？）

その音には聞き覚えがあった。たしか『キャパシティダウン』という能力者の能力を封じる事の出来る機械だ。それくらいのことしか知らなかったが、それだけ知っていれば十分だった。

「……の……ガキ共があ」

聞いた事のあるような声が響く。テレスティーナとか言っただろうか、聞いた話だと彼女が今回春上と自分の妹を拉致した主犯格だと聞いたなと半ば消えつつある意識で思いだす。

「御坂さん！白井さん！」

「っ貴様あああああああっ！！！！」

初春が悲鳴を上げ、木山が吼える。が、視界に入っていないなくても、わかる。一研究者に過ぎない木山ではテレスティーナには敵わない。彼女とテレスティーナの間には駆動鎧という壁がある。だが、わかっている鷹月は立ち上がれない。能力を封じ込められた御坂や白井は中学校に通う少女でしかない。初春も元々身体を鍛えているわけでもない。テレスティーナの狂気じみた笑い声が響く中、鷹月は

ただ地面に倒れているしかない。そんな絶望的な状況の中で、初春の声が響いた。

「キャパシティダウンですね！」

「御坂さんが言っていました。能力者だけを苦しめる音だって！」

（何を言って……？）

「なんだテメエ？それがわかった所でどうしたっつーんだ？」

「たしか、改良型は、大きすぎて、固定したスピーカーを移動できないって」

「ああ、この施設中に設置してある。なんなら一個一個壊して回るか？」

ただ理由もなく叫んでいるわけではない。だが、何が目的？今更キャパシティダウンについて開発者に説明しても……説明？

鷹月はようやく気付いた。これは、テレスティーナに向けての物ではない。この場にいない、残り二人に向けての物だと。

「それだけ大きなシステムなら、制御できる場所は限られます！この建物の中で、中を調べた限り、それができるのは、さっきまで私達がいた中央管制室！」

「だったら、やってみろっの」

何か固い物がぶつかる音が響き、誰かが倒れる音が聞こえた。

「初春！」

「ああ？」

直後響いた声に、テレスティーナの怪訝そうな声が漏れた。

「テメエ……なんで動ける？」

その視線は間違いなく佐天に向いているだろう。そして。

「チッ、やってくれたなクソガキがあ……っ！」

同時に初春の意図に気付いたのか、テレスティーナが歯を噛みしめる。が、それはすぐに凶悪な笑みに変わった。

「行けるもんなら行ってみろよ」

テレスティーナが何を考えたか、それはすぐに分かった。しかし。

（うい、春、さ、にげ……）

それを伝える術が鷹月にはない。そのもどかしさに唇を噛みしめたその時、鷹月の前を影が走った。

直後、ゴツと硬い物を打つ音が鷹月の耳に届いた。

「……一番脆いトコ出して何イキがってんだ？オバサン」

無能力者一レベル0一（後書き）

かなーり短い回でした。

次回はようやく……？

「鷹月暁」(前書き)

そろそろ一回サブタイ統一させようかと思ってる今日この頃。

「鷹月暁」

「……まったく、警備員アンチスキルの使う駆動鎧パワードスーツもカッコイイとは言えねえけど、こつちよか百倍マシだぜ。なんだよこのカラーリングは」

「な、ナイス鷺谷！初春よろしく！」

「お、おい！まあいっか」

走っていく佐天を見ながら、鷺谷は笑った。そして、言う。

「起きてんだろ？悪イけど、一発で人気絶させるようなマネできねえよ」

「さっきから湧いて出るように出てきやがって……このクソガキ共が……」

「詳しい事は知らねえよ。けどなあ、どんな実験だろうがテメエが俺の仲間に手エ出すってんなら容赦はしねーぜ」

警棒で肩を叩きながら、鷺谷はテレスティーナを睨みつける。

「ごちゃごちゃうるせえガキだ。せっかくいいもん見せてやろうってのに……能力体結晶の完成っつーなア」

「だからどうした？それがいったいなんの役に立つってんだ？」

鷺谷は警棒を担ぎながら、テレスティーナに尋ねた。

「聞きゃテメエはテメエのジジイに実験台にされたいじゃねえか。テメエが犠牲になった研究を完成させるのがそんなにおもしろいのか」

「犠牲じゃねえ。権利を得たのさ。私から生まれたこの種を花開かせて……」

テレスティーナは笑みを浮かべて答える。その手にあるのは、赤い結晶の入ったカプセル。首を傾げる鷺谷だったが、その背から、声が響いた。

「それはまさか……ファーストサンプル！」

「レベル6を生み出す権利をなあっ！」

「……はあ？」

思わず気の抜けた声を出してしまう鷺谷。

「超能力の強さは『5』までのはずだろ？なんだよ『6』って」

「『神ならぬ身にて天上の意思に辿り着く物』……レベル5の上に立つ、『絶対能力者』の事さ」

「そうだ！そしてコイツはその学園都市初のレベル6になるんだよ！こいつらの能力を使ってなあ！」

木山の説明に続くようにテレスティーナは深い笑みを浮かべて叫んだ。

「……春上が？」

呆然とする鷺谷達を置き去りにして、テレスティーナは嬉しそうに言葉を紡ぐ。

「特定波長下におけるレベルを超えたコイツの受信能力は能力体結晶と競合するのに実に都合がいい。高位のテレパスは貴重だからなあ」

「何故だ……何故またこの子達なんだ……何故この子達ばかりを苦しめるんだ！」

「なあに、ちょっとコイツらの『頭の中の現実』ってヤツを拝借するだけだ」

パーソナルリアリティ
「『自分だけの現実』……」

御坂の呟きが耳に届く。たしか『レベルアップ幻想御手』の補習でやった気がする。

「呼び方なんざどうでもいい。要はその神経活動を司る伝達物質、とりわけ眠れる暴走能力者のそれを採取し、ファーストサンプルと融合させる。それによって……」

（まだかよ佐天！）

中央制御室に向かって駆けあがっているだろう佐天を思わず責めてしまう鷺谷。こんな所でやたらと長話してくれるバカだとは思ってなかったが、それにしあって中央制御室までの道のりは遠い。

「……さて、あとはコイツを――」

（ヤベエ話終わった！？）

「やめなさい！」

心の底で焦った瞬間、御坂の声が響いた。

「もしそんな事をして、あの子達が暴走状態のまま覚醒でもしたら……」

「学園都市は空前のポルターガイストに見舞われて壊滅する、か？
上等じゃねえか」

「はあ?! テメエ何言ってるのかわかってんのか?! この学園都市まちに何万人の人間が住んでると思っていやがる?!」

テレスティーナの口から出たとんでもない言葉に思わず尋ねてし

まう。だが、実際にこの学園都市に住んでいるのは何万なんて生易しい数字ではない。その数は二三〇万人に上るのだ。

「『神ならぬ身にて天上の意思に辿り着く者』……その為の学園都市だ！それさえできりゃこんな街用済みだろうが！」

「させるかよ！！」

警棒を握りしめてテレスティーナに突っ込む。

「さっきはよくもやってくれたなあ？」

勝てるなど思っていない。残念ながら、自分ではコイツに勝てない。わかってるが、それでも。

「やらせるわけにやいかねえんだよ！」

勢いをつけて跳び上がる。狙いは頭、そこしかダメージを与えられる場所はない。が。

「さっきのお返しだ、受け取りやがれ！」

「ツフ……ツツツ！！！？！？？」

脇腹に尋常ならぬ衝撃を受け、腹から何かが上って来る。直後、鷺谷の身体は宙を舞って地面に叩き付けられた。

「ゴフッ?!グ、ガアアアアアアアアアアア?！」

「ったく、モルモット風情がイキがりやがって」

「もる、も、っと……だ……?」

テレスティーナを睨みつけながら、鷺谷はなんとか声を出す。そ

「うおおおおおおおおお！！！！！！」

ガッ！と硬い物がぶつかる音がした。が、次の瞬間、鷺谷の首元にテレスティーナの手が迫った。

「ガッ?!」

「そのモルモットの中でも使えねえのがテメエら無能力者だよ！^{レベル0}実験にも使えねえ最低辺が！ワタシ達に楯突いてんじゃねえよ！」

テレスティーナの顔が狂気に歪んだ、瞬間だった。

ボーンとマイクに何かを叩きつけるような音が響いた。突然の事に怪訝そうな目で辺りを見回すテレスティーナ。それに対して、鷺谷は笑みを浮かべた。

「ったく、遅えんだよ」

《モルモットだろうがなんだろうが、そんなの知った事じゃない！》

勝った。その確信と共に、鷺谷は告げる。

「悪いな……」

「ああ？」

《アタシの友達に——》

「これから先は、アンタ達の能力者がお相手してくれるそうだ」
《手を出すなあああああああ！！！！！！》

次の瞬間、何かを叩きつけた音と同時にブツンとそれまで響いていた音が止んだ。

「音が！」

「しまっ……」

「く、おおおおおおお!!」

テレスティーナの気が逸れたのを見て、鷺谷がもう片方のテレスティーナの手を蹴飛ばす。中から転がり出たカプセルが木山の前に運ばれたのを見てニヤリと笑う。

「へへっ、ラッキー」

「デメエ!ぐあっ?!」

うめき声と共に鷺谷の首から手が離れた。何が起きたかわからず地面に叩きつけられる鷺谷だったがその手首に刺さった金属矢を見て理解する。そして、鷺谷は仰ぎ見る。レベル6。この場で作られるはずだった絶対能力者。それがなされなかった今、未だに学園都市の頂点に立ち続ける事になった、常盤台の超能力者^{レベル5}。

「ひっ、うわああああ?！」

御坂の身体から電撃が迸る。が、その能力は電気を流すのみではない。磁力を操り、金属の鎧をまとったテレスティーナを投げ飛ばす。

ガシャア!と金属と金属がぶつかり合う音が響く。

「へへへ、容赦ねーな、やっば」

「当たり前でしょ。あの音さえなければこれくらい簡単よ」

「恐ろしいこって」

「はいはい。アンタは休んでなさい」

「言われなくてもそうさせてもらいま……そういうわけにもいかなさそうだなあ」

鷺谷の弦きを聞いて、御坂が振り返る。

「まったく、しつっこいわね」
「もういいわかったよ」

笑いながら、テレスティーナは手に持った槍を掲げた。

「なんだ？」

「テメエらこの施設ごと」

次の一手に備えて身構える鷲谷。正直体が限界だが、そんな事を言っていられる状況でもない。が。

「まとめて吹っ飛ばしてやんよオ！」

テレスティーナが叫ぶと同時にその槍がまるで花のように開き、その中心部が青白く輝きだした。

「はあ?! なんだそりゃ?!」

「こいつはテメエの能力を解析して作ったモンだ。テメエの超電磁^{レール}砲^{ガン}より強力になあ！」

「まったく、モルモットとか家畜とか、どんだけ自分を憐れんだら、そんな逆恨みが出来んのよ」

そう言って、御坂がコインを取り出す。だが。

「そうだなあ、わざわざテメエに撃つ必要もねえよなあ」

「っテメエ！」

「音速の3倍の速度だ。横から当てられるか？」

ガシヤリとテレスティーナの腕が動いた。その先にいるのは、初

春飾利。

「アンタ……ッ！」

ギリリと御坂が唇を噛みしめる。

「『超電磁砲^{レベルガン}』、超能力者^{レベル5}。大層な名前だが、所詮はただの小娘！人質をとられりゃ何にも出来ねえようななあ！」

「クッ……」

「能力だってこうなりやただのデータ！減らず口を叩くただのデータだあ！」

「畜生！」

鷺谷は叫んだ。多少の能力を持っているなら何とかしようがあったかもしれない。しかし、鷺谷は真正銘の無能力者^{レベル0}だ。電気を扱う事も、何かを空間移動^{テレポート}させる事も出来やしない。こんな状況では、無力なただの人間だ。ただ、こうやってテレスティーナの超電磁砲に光が集まって行くのを見るしか出来ないただの人間だ。だからこそ、気付いたのかもしれない。

その光の中に、飛び込んで行く人影があったのを。
刹那。

「えっ？」

「何イ?!」

唐突に光が消えた。それまで銃身に集っていた電気が放っていた光が、突然消えた。そして、その光があった場所に、その少年は立っていた。

「デメエ……一体?!」

「鷹月暁」

少年は告げる。

「初めまして……それから」

その右腕に、緑色の腕章を携えて。

「返してもらおうぞ、全部」

「鷹月暁」(後書き)

次回、帰って来た主人公が主人公っぷりを全開。

守るためのチカラ

膨らみつつある光を、鷹月はただ見ていることしかできなかった。キャパシティダウンが止まったというのに、鷹月の身体は動かない。何故かはわからなかった。ただ、自分だけがそうだった。

（畜生……！）

血が出るのも構わず、唇を噛みしめる。そうでもしなければ、おかしくなりそうだった。ここまで来たのに。そう、ここまで来れたのに、何もできない。友達を助ける事も、それを奪おうとする敵を倒す事も。また、何も出来ずに――

（……また？）

頭に浮かんだ言葉に、違和感を覚える。思いだせそうな、思い出したくないような、そんな、言葉が。

（僕は、また守れない？）

直後に頭に鋭い痛みが、走ったような気がした。構わず、いや、むしろ、望んで、鷹月はそれと向き合う。

（守れなかった……誰を？）

白い天井、並べられたカプセル、驚愕する先生、そんな彼女に詰め寄り、涙を流しながら何かを叫ぶ少年――

（守りたかった……何を？）

笑う長髪の少女に、彼女が顔を赤くしながら詰め寄る。ツインテールの少女と彼女が互いに真剣な面持ちで何かを調べている。小さな彼女が、自分に向かって泣きながら助けを求めている――

（変わりたかった……何故？）

取り戻したかった。たった一人、血のつながった妹を。守りたかった。たった一人、沈んだ心の中に入ってきた彼女を。

（そうだ――）

そして、それは、まだ――！！

（終わってない！！）

鷹月は意識を膨らむ光に向けた。
足は、地面を蹴っていた。

「ツククク……アーハッハッハッハッハッハア！！」

『超電磁砲』の発射を止められたにも拘らず、テレスティーナが笑った。

「鷹月、ねえ。発電能力者の異能力者が何吠えてやがんだ？ アア？」

「……」

「磁力も使えねえ、放電も出来ねえテメエなんぞ怖くねエんだよオ！アッハハハハハ！！」

「……だあッ！！」

笑うテレスティーナのパワードスーツに、蹴りを一撃叩き込む。

「ムダムダムダァ！何やってだあ？アタシが来てるパワードスーツ駆動鎧は最新型！テメエの能力でもコイツをジャックすることは出来ねえ——ッ
！！！？？」

テレスティーナの言葉が止まったのは無理もない。なぜなら、彼女の視線の先、いや、彼女の身体、正確には彼女の駆動鎧に。足が、くつついていた。鷹月が、地面から足を離したにもかかわらず。

「——っあああああああ！！！」

そのくつついた足を軸に、鷹月は身体を捻る。空を切る左足の行き先は、ガラ空きの頭。ガッ！とテレスティーナの横っ面に踵が入り、同時に振られた『超電磁砲』を右足をテレスティーナの駆動鎧から放し、落ちることで避ける。同時に左足で床を蹴って距離をとった。

「テ、メエ……進化、だと？」

「進化なんかじゃない」

テレスティーナの小さな呟きを、鷹月は否定した。

「これは元々僕が持っていた能力だよ。大切なモノを奪われてからは、何故か使えなくなっていたけどね」

「フザけてんじゃねえぞ！そんな都合のいい事があるはずがねえだろうが！」

「都合がいいか悪いかは関係ない。言っただろう？返してもらおうと」
「……」

その事が信じられないのか、または、別の意図があるのか、テレスティーナは数秒黙った。そして。

「……ククツ、アハ、ハツハハツハツハアアアアアア！……」

突然笑い出したテレスティーナは再び『超電磁砲』を初春に向ける。

「取り戻すだあ？やってみろよ！テメエが動きやそのガキは木端微塵だア！テメエがいくら速かろうが、コッチが引き金引く方が早えに決まってんだろうがよォ！」

笑いながら叫んだテレスティーナ。だが、再び膨らみつつある光を見ながら、鷹月は呟いた。

「そうか、そういう構造になってるのか」

そして、鷹月が取った行動に、その場にいた全員が目を疑った。
鷹月は、『超電磁砲』を向けられた初春の前に立ち、腕を前にかざした。

まるで、常盤台の超能力者^{レールガン}がするように、その指にコインを乗せて。

「ハッ」

最初に声を上げたのはテレスティーナだった。

「ハハハハハ！レベルが上がったつつつてもそりゃねえだろ！」

「あ、アンタ何考えてんのよ！」

「鷹月くんやめてください！」

初春と御坂の声が響く。だが。

「できるさ」

鷹月は断言する。

「いや、やる。みんなを守るために」

言い放った直後、鷹月の腕にバチバチと電流が流れ始める。

そう、その為に鍛えて来た。それでも足りなかった部分は、ついさっき、取り戻した。

「その為の――」

「チィッ！」

焦ったようにテレスティーナの『超電磁砲』から光が放たれた。だが、音速を超える速さで迫るそれを見据えたまま、鷹月は叫び、指のコインを弾いた。

「この能力だあああああッ！！！」
チカラ

膨大な光と共に、コインが放たれた。そのコインと光がぶつかったのはまさに一瞬だった。ぶつかった二つの質量は周囲に凄まじい余波をもたらす。その余波が静まり、声が響いた。

「これで終わりだ、テレスティーナ」
「あ、……なっ?!」

信じられないといった顔をするテレスティーナに、鷹月はさらに断言し、歩き出す。

「もう動かないだろう? その駆動鎧も」
「て、メエ、さっきの分の電力は」

徐々に歩みを早め、走る。全てを取り返して、全てを始めるために。

「こ、のモルモットがああああああ!!!!」

その叫びを最後に、テレスティーナは駆動鎧ごと倒された。
そして、その後ろに、うつ伏せに倒れた少年がいた。
その顔はたしかに笑っていた。

誇らしげに、確かな笑みを。

守るためのチカラ（後書き）

「……」

「……」

「……で、どうして俺達がこんなトコロに出て来るんだ？ 鷹月？」

鷹「……そんなの知らないよ。ただ、あんまりあとがきに味がないんで他の人がやってるみたいにオリキャラで間を潰そうって話みたいだけど」

「知らねえよ！ オレの状態わかるだろ？！ ってしまった！ ケガがねえ！」

鷹「そりゃ本編とは関係ないみたいだからねえ、鷲谷がどれだけボコボコにされてもここではきれいさっぱりってわけだ」

鷲「……まあ、グダグダ言ってもしょうがねえ。やることやって帰るぞ」

鷹「うん」

鷲「えっと、まあ、今回不思議だったのはお前がどうして今まで能力をフル活用できなかったのかって事だ」

鷹「えっと、それについては原作を読んだ方は想像ついてると思うけど、能力っていうのは演算が必要で、その能力が大きくなるに連れて複雑になるんだ。そして、複雑になるにつれて、疲労や、精神状態の影響が大きくなる」

鷲「原作じゃトラウマ抱えて自分に能力を使えないテレポーターがいたよな」

鷹「そうだね。僕の場合、妹と離れ離れになってからの精神的ストレスが枷になってたんだろうね。僕の場合は強さは大した事ないけど、使い方が使い方だけにデリケートなんだ」

鷲「レールガンを撃てたのは？」

鷹「僕達発電能力者は磁場や電磁波を感知する事が出来る。御坂さんのような強い人になるとリーダーみたいに使えらしいね。僕の

場合はそれでテレスティーナのレールガンの磁場の動きを解析した
ってわけ。電力の方はもちろん最初に奪った分を使ってね」

鷲「こうやって聞くとお前万能だな」

鷹「そう？御坂さんみたいに電気で戦う能力者とか駆動鎧みたいに
電気で駆動する敵が相手なら分がいいってだけだよ」

鷲「嘘つけ！生身の人間相手なら体術で圧倒出来んじゃねーかお前
！」

鷹「鍛えてたからね……っとずいぶん長くなっちゃったみたいだ。

今日はここまで！じゃ、次回もよろしくね！」

鷲「オイ逃げんな！待ちやがれ！」

とある少年の後日談　ープロローグー

「……ん」

ゆっくりと目を開ける。

白い天井が見えて、それから目を巡らせた先にあった機材を見てここが病室だと気付く。窓から見える空は青く澄んでいて、たまに入ってくる風が気持ちいい。それから、逆の方に目を向けると、色とりどりの花を乗せた花瓶……ではなく、少女が心配そうにこちらを覗いている。その後ろには自分と同じ病院服を着た少年少女が何人かと、一番近くにいる花飾りの少女と同じ制服を着た少女、短い髪の少女と同じ制服を着たツインテールの少女がいた。

「……たか、つき、くん？」

一番前の少女がつまりながら尋ねた。そして、少年は、それに答えるように。

「ごめん」

少女の顔がはっと悲しげに歪む、が少年は笑顔を浮かべながら言った。

「それから……ただいま、初春さん」

「……っ」

「ちよっ、初春さん?!」

心配させないようにと笑顔で言ったつもりだった鷹月は、直後、大いに慌てた。ボロボロと初春の目から大粒の涙が流れたからだ。

そうなる事を防ごうとして、自分の無事をアピールしたつもりがこの結果である。女の子の扱いに長けた出来た男ならこの後どうすべきかも考慮済みだったのだろうが、鷹月はとある目的の為にそれ・・・《からずつと目を逸らし続けてきた不器用極まりない少年だった。思わず周りの人間、特に詳しくそうな佐天や鷺谷に目を向けてみるが、彼らは黙って自分を見つめるばかり。それどころか、御坂や白井からは呆れと怒りとを混ぜたような、正確には「何やってんだこのバカ、さっさと覚悟決めろ」と言わんばかりの目をしていた。最も、前者には気付いて後者の意味には口に出しても気付こうとしないというのがこの鷹月という少年だったが。終いには、

『お兄ちゃん……いくらなんでもそれはないよ……』

精神感応能力テレパスを持つ妹に呆れられる始末だったが、わからないものはわからない。

『もう！』

そう妹の声が響いた瞬間、とある映像が思い浮かんだ。おそらく妹から送られて来ただろうそれは確かに似たような条件だ。だが。

（ちよ、ないないないない！！ていうか、何見てたんだよ明理！）

そんな心の叫びと共に病院服の集団の中に妹を見つけようとした鷹月は、凍りついた。病院服の集団だけではない。佐天や鷺谷、いつものメンバーまで、つまり、初春を除いたその場にいる全ての人間が、こちらに怒調をはらんだ視線を一身に注いでいた。視線は言う。

黙ってやれ。

鷹月は、頬をひきつらせて、視線から目を背けるように、俯いて

泣く初春を見た。

確かに、妹の言う事は正しいのかもしれない。というよりも、正しいのだろう。実を言えば、鷹月だって彼女が自分に好意を抱いている事は知っている、というか、感じている。だが、それとこれとは話が別だ。自分が彼女に向き合う時だという事なのかもしれないが、それはいささか、鷹月には衝撃が強すぎたし、少年には早すぎる……気がする。だが、状況は逃げる事を許してくれそうにないし、心の底から嫌かと聞かれれば、「違う」と即答できる。むしろ、今まで抑えつけてきたせい、か、そうしたい、してみたい欲求にも駆られている。しかしながら、果たしていいのか、という自分もいる。みんなの見ている前である事、そしてなにより、自分にその資格はないと、散々迷惑をかけて、傷つけて、利用してきた自分にはないという後ろめたさもあった。だが、その手は戸惑いを表しつつも、少しずつ動いていた。

自分のわがままで振りまわし続けてきた。自分の目的のために目を逸らし続けてきた。今までは。

（だけど——いや、だからこそ、なのかな）

向き合わなくちゃいけない。そんな気がした。だから、震えの止まらない手で、しかし強く、初春を引き寄せて、強く抱きしめた。ピクツとその肩が反応したが、それ以外には動かずに初春はただ身を任せた。

（……重症、かな）

拒絶されなかった事に安堵している自分を感じて、ふと苦笑する。結局、自分は彼女がいたからこそ今まで生きて、そして、変わったのだろうと改めて思う。

「ありがとう」

だからこそ、鷹月は思わずそう口にしていた。伝わったかはわからない。だが、それだけでよかった。

「……」

面会時間が過ぎ、初春達が帰るのを見送ってから、鷹月は首にかけていたそれを取り出した。

きらびやかな装飾がある訳でもない、ただの指輪。しかし、鷹月にとっては唯一残された、両親の形見。

「それ、私達の……？」

戸の方から聞こえてきたのは、聞き慣れた……より少し大人びた声。

「うん。そうだよ。僕らの——父さんと母さんの、結婚指輪だって」

「ふうん」

あれ？と鷹月は首を傾げる。そして、尋ねた。

「いらないの？」

「私にあげてどうするの？」

即座に返って来た問いに鷹月は答える。

「いや、父さんのと母さんのって二つあるから、どっちかって」

「いない」

「えっ？」

鷹月は返ってきた答えに驚きを隠せない。鷹月にとって唯一無二の形見という事は妹の明理にとってもそうだという事なのだ。それなのに、明理はいないと言う。首を傾げる鷹月に向かって明理は告げる。

「父さんも母さんも、私やお兄ちゃんを捨てたわけじゃないってわかった。それに、今はもう一人じゃないって、寂しくなんかないもん。先生やみんなや、お兄ちゃんがいるから」

「明理……そっか」

「そ、れ、に」

指輪を見つめる鷹月にいたずらっぽい笑みを浮かべながら明理は告げる。

「せっかくの結婚指輪なんだし……私にあげるよりもっとちゃんとした人がいるでしょ？ お兄ちゃんには」

「えっ——？」

言われて数秒してから、その内容に気付いて鷹月は顔を真っ赤にする。

「ちょ、初春さんとはそんな関係じゃないって！……まだ」

「まだって言うからにはちゃんと自覚はしてるんだね」

「……もう、目を背けるのはやめるって、決めたんだ」

そう呟いて、鷹月は両親の指輪を握る。

（いつになるかは、まだわからないけど）

今までは、考えもしなかった。けれど、今なら、いつかできると
思える。妹を取り戻し、自分を取り戻し、仲間がいて、想える相手
がいる。

鷹月の現在いまは、ここから始まる。

とある少年の後日談　ープロローグー（後書き）

鷹「さてわけのわからないタイトルから始まったこの回だけど……」
鷺「どうやら最強と書いてさいじやくと読む、みたいなことやってみたかったらしいな、この作者は」

鷹「で、今回の内容は……」

鷺「お前と誰かさんがさんざんいちゃついた上でお前がヘタレの話だな」

鷹「ヘタレって……」

鷺「あそこまでやっついてまだ告んのはいつかというのをヘタレと言わんでなんと言う」

鷹「うう……」

鷺「まあ、主人公イビリはこんくらいにして……こっからオリジナルというわけだが――」

鷹「作者曰く『何も考えついてない』そうな」

鷺「大丈夫か……？ ただでさえ更新速度ヤバイのに」

鷹「アイデアあつたらぜび、というのが本音なそうだよ。既に初春さんや佐天さんだけでなく御坂さんや白井さんとの絡みもみたいとかいう感想もあつたみたい」

鷺「じゃあ、やりやいいじゃん」

鷹「それがポンと出てきたら苦労はしないそうだよ？ まあ、考える最中らしいけど」

鷺「じゃ、俺達はそれまでのんびり休暇だな」

鷹「休暇って何……？ え、えっとそれではこの辺でお開きです！」

感想お待ちしてます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5181p/>

とある科学の生体電極（パルスポール）

2011年11月15日08時40分発行